

竹の前遺跡・畑田遺跡発掘調査報告書

－姫路市飯田手柄土地区画整理事業に伴う発掘調査報告－

2014

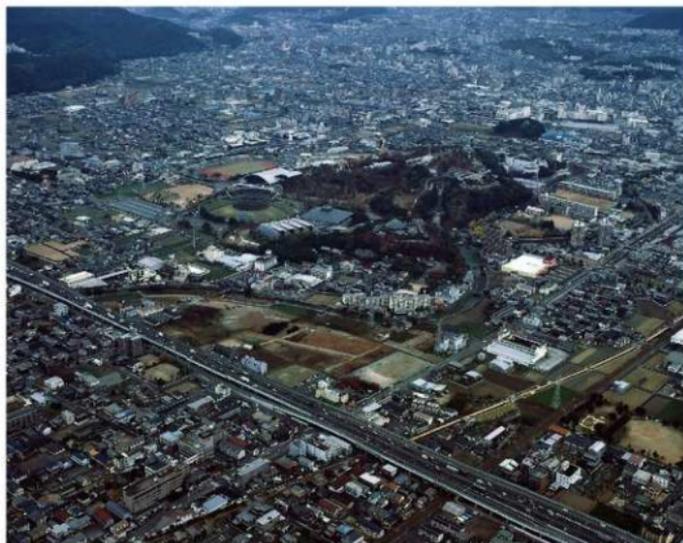
姫路市教育委員会

竹の前遺跡・畑田遺跡発掘調査報告書

－姫路市飯田手柄土地区画整理事業に伴う発掘調査報告－

2014

姫路市教育委員会



1. 調査地近景（南東から）



2. 調査地遠景（北から）



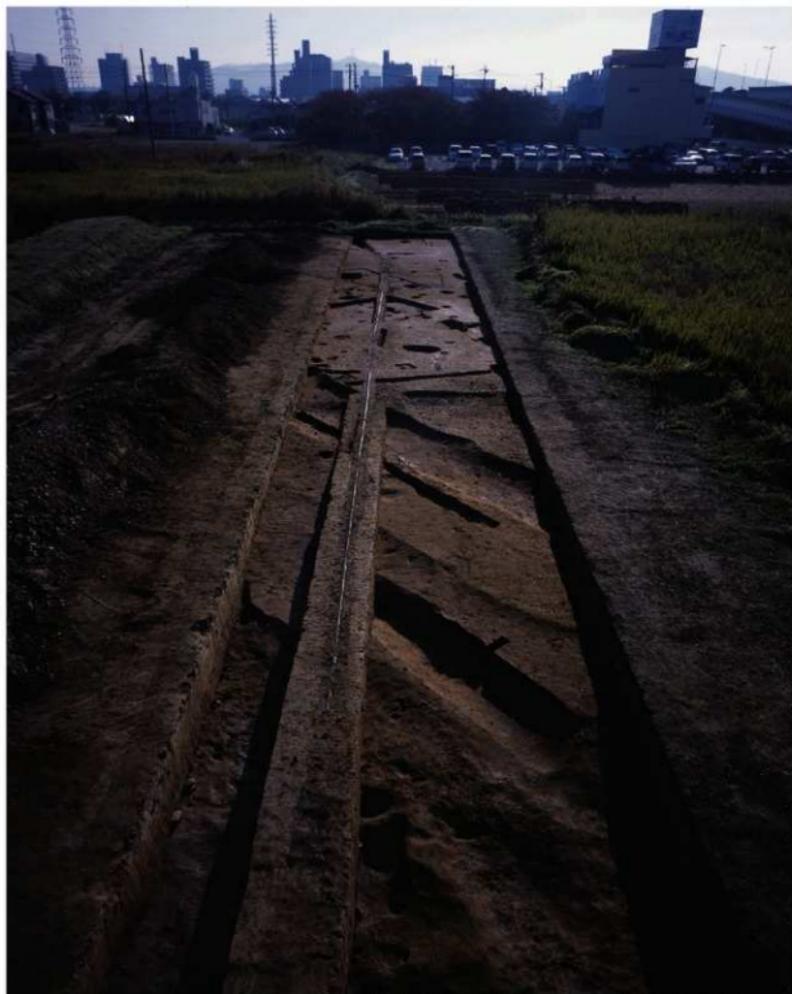
1. 調査地近景 (南から)



2. 畑田遺跡SR1土器 (39・43・44・46・51・53・56・59・60) 出土状況 (北西から)



畑田遺跡SR3全景（北から）



畑田遺跡SR8 東半全景（西から、奥にSH9・SH10を望む）

序

姫路市内には数多くの有形無形の文化財が残され、歴史文化の重厚さを物語っています。なかでも地中に埋もれた遺跡(埋蔵文化財)は約1,200箇所にも達し、現在では失われた人々の暮らしや文化を今に伝えています。

姫路市教育委員会では、埋蔵文化財センターが中心となって、これらの遺跡の発掘調査を進めるとともに、現地説明会や企画展等を通じて調査成果を市民の皆様に広く伝えるように努めております。

本書では、飯田・手柄地区の区画整理事業に伴い実施した竹の前遺跡及び畑田遺跡の発掘調査成果を報告します。これらの遺跡は市城南部の手柄山南側に位置し、周辺には小山遺跡・長越遺跡をはじめ著名な遺跡が多数知られています。また、手柄山は『播磨国風土記』にも「手苺丘」として登場しております。

このたびの調査では、弥生時代から平安時代の各時期について、多くの成果を挙げることができました。ここに調査成果をとりまとめ、今後の調査・研究の進展に資する所存です。

最後になりましたが、今回の発掘調査事業の実施にあたり多大なご協力を賜りました姫路市飯田手柄土地区画整理組合の方々、その他関係者の皆様に心から御礼申し上げます。

平成27年1月

姫路市教育委員会

教育長 中杉 隆夫

例 言

1. 本書は、兵庫県姫路市手柄・飯田地区内に所在する竹の前遺跡（県遺跡番号020435）、畑田遺跡（県遺跡番号020432）において実施した発掘調査の報告書である。
2. 本事業は、姫路市飯田手柄土地区画整理組合の施行する区画整理事業に先立ち、組合と協定書を締結した上で、平成18～23年度にかけて発掘調査、同24～26年度にかけてその整理作業を実施したものである。
3. 発掘調査及び整理作業の担当者は第1章に明記した。
4. 本書の執筆は、福井優、南憲和がおこなった。立命館大学の青木哲哉氏には地質学の見地から玉稿を賜った。須恵器付着物の自然科学分析については、(株)バリノ・サーヴェイに委託し、その成果を収録した。木製品の固化、保存処理、樹種同定については、株式会社吉田生物研究所に委託した。執筆分担は本文目次に明記した。編集は南がおこなった。
5. 出土した土器の整理作業は、黒岩紀子、香山玲子、清水聖子、田中章子、玉越綾子、寺本祐子、野村知子、藤村由紀、三輪悠代がおこなった。土器の実測・採拓は、黒岩、香山、田中、玉越、野村、三輪、福井、南のほか、一部を株式会社地域文化財研究所に委託した。遺構図のデジタルトレースは、野村、三輪がおこなった。遺物実測図のデジタルトレースは、香山、田中、玉越、野村、三輪がおこなった。
6. 遺物の写真撮影及び遺物写真図版のレイアウトは、福井がおこなった。
7. 本書の作成に関係する写真・図面等の調査記録、出土品は姫路市埋蔵文化財センターで保管している。広く活用されたい。
8. 発掘調査及び報告書の作成に関して、下記の方々にご協力・ご教示を頂きました。記して感謝申し上げます。
荒木幸治、上田健太郎、魚島純一、加藤史郎、北川貞夫、北村貞雄、千葉 豊、豊島直博、中川 渉、橋本 肇、福田剛史、松本正信（敬称略）

凡 例

1. 本書で使用した標高値は、東京湾平均海面（T.P.）を基準とする。
2. 方位は、図版1・2を除き世界測地系に準拠する平面直角座標系第V系の座標北（G.N）を示す。なお、座標北（G.N）に対して真北（T.N）は $0^{\circ}11'$ 、磁北（M.N）は $7^{\circ}07'$ 西偏する。
3. 土層図及び遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修「新版 標準土色帖」に準拠した。
4. 遺構は、アルファベットと数字を組み合わせた略号で表記した。略号は以下のとおりである。
SH：堅穴建物跡 SB：掘立柱建物跡 SA：柵 SK：土坑 SD：溝 SR：旧河道 P：柱穴
5. 遺物図版では、遺跡別に土器・木製品・金属製品・瓦の種類別に通し番号で表した。ただし、木製品には「W」、金属製品には「M」、瓦には「瓦」を冠し土器と区別した。実測図の断面の表示は、土師器・金属製品-白抜き、須恵器-黒塗り、瓦器・陶磁器-網点、木製品-木取りの方向、瓦-斜線で区別した。番号は本文、挿図、図版、写真図版ともに統一している。

本文目次

第1章 調査に至る経緯・経過	(南) 1
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境	(南) 2
第3章 竹の前遺跡の調査成果	
第1節 調査概要	(南) 4
第2節 弥生・古墳時代の遺構・遺物	(福井) 4
第3節 奈良・平安時代以降の遺構・遺物	(南) 9
第4章 畑田遺跡の調査成果	
第1節 調査概要	(南) 11
第2節 弥生時代の遺構・遺物	(福井・南) 11
第3節 古墳時代の遺構・遺物	(福井・南) 14
第4節 奈良・平安時代以降の遺構・遺物	(南) 23
第5章 自然科学的分析	
第1節 竹の前遺跡と畑田遺跡の地形環境	(青木) 33
第2節 畑田遺跡SR7出土須恵器付着物の自然科学分析	(パロ)/サーヴェイ株式会社 41
第6章 まとめ	
第1節 弥生時代の遺構・遺物の検討	(福井) 43
第2節 古墳時代の遺構・遺物の検討	(福井) 44
第3節 平安時代から鎌倉時代の遺構の検討	(南) 45
第4節 平安時代後期から鎌倉時代初頭の建物遺構の検討	(南) 46
参考文献	

巻頭図版目次

巻頭図版1	調査地近景（南東から） 調査地遠景（北から）
巻頭図版2	調査地近景（南から） 畑田遺跡SR1土器（39・43・44・46・51・53・56・59・60）出土状況（北西から）
巻頭図版3	畑田遺跡SR3全景（北から）
巻頭図版4	畑田遺跡SR8東半全景（西から、奥にSH9・SH10を望む）

図版目次

図版1	遺跡の位置
図版2	周辺の遺跡
図版3	竹の前遺跡第1次調査・畑田遺跡第18次調査の調査区配置図
図版4	調査次数別調査区配置図
図版5・6	竹の前遺跡・畑田遺跡調査区全体図
図版7	竹の前遺跡 調査区全体図
図版8	竹の前遺跡 SH1平・断面図 SH1 遺物出土状況図
図版9	竹の前遺跡 SH2平・断面図・ピット断面図 SH2 遺物出土状況図
図版10	竹の前遺跡 SK1平・断面図 SK1 遺物出土状況図
図版11	竹の前遺跡 SK2平・断面図 SK2 遺物出土状況図
図版12	竹の前遺跡 SR1・SR2平面図
図版13	竹の前遺跡 SR1断面図
図版14	竹の前遺跡 SR1遺物出土状況図
図版15	竹の前遺跡 SR2断面図
図版16	竹の前遺跡 SB1平・断面図 SB2平・断面図
図版17	竹の前遺跡 SB3平・断面図
図版18	竹の前遺跡 SH1出土土器 SH2出土土器①
図版19	竹の前遺跡 SH2出土土器② SK1出土土器①
図版20	竹の前遺跡 SK1出土土器② SK2出土土器 SR1出土土器①
図版21	竹の前遺跡 SR1出土土器② SR1出土木製品
図版22	竹の前遺跡 SR2出土土器①
図版23	竹の前遺跡 SR2出土土器②
図版24	竹の前遺跡 SR2出土土器③
図版25	竹の前遺跡 SR2出土木製品
図版26	畑田遺跡 調査区全体図（弥生時代）
図版27	畑田遺跡 SH1平・断面図 SH2平・断面図 遺物出土状況図
図版28	畑田遺跡 SK1平・断面図 SK1 遺物出土状況図
図版29	畑田遺跡 SD1平・断面図 遺物出土状況図
図版30	畑田遺跡 SR1・SR2平・断面図
図版31	畑田遺跡 調査区全体図（古墳時代）
図版32	畑田遺跡 SH3・SH4・SH5・SD2平・断面図 遺物出土状況断面図
図版33	畑田遺跡 SH5カマド平・断面図 遺物出土状況図
図版34	畑田遺跡 SH6平・断面図 遺物出土状況図 SH7平・断面図
図版35	畑田遺跡 SH8平・断面図 遺物出土状況図 SH9・SH10平面図
図版36	畑田遺跡 SH9平・断面図
図版37	畑田遺跡 SH10平・断面図 SH11平・断面図
図版38	畑田遺跡 SK2平・断面図 遺物出土状況図 SK3平・断面図 SK4平・断面図
図版39	畑田遺跡 SR3・SR4平面図
図版40	畑田遺跡 SR3・SR4断面図
図版41	畑田遺跡 SR3・SR4 遺物出土状況図
図版42	畑田遺跡 SR5・SR6・竹の前遺跡SR2平・断面図
図版43	畑田遺跡 SR7平・断面図
図版44	畑田遺跡 SR7・SR8・SR12平面図
図版45	畑田遺跡 SR8断面図 SR12断面図
図版46	畑田遺跡 SR8遺物出土状況図① 詳細図（第1群） 詳細図（第2群） 詳細図（第3群）
図版47	畑田遺跡 SR8遺物出土状況図② SR8遺物出土状況図③ 詳細図
図版48	畑田遺跡 SR9・SR10・SR11平面図
図版49	畑田遺跡 SR9・SR10・SR11断面図
図版50	畑田遺跡 調査区全体図（奈良・平安時代以降）
図版51	畑田遺跡 SB1平・断面図 SK5・SK6平面図 SK5断面図 SK6断面図 SB2平・断面図
図版52	畑田遺跡 B・C地区全体図
図版53	畑田遺跡 B地区全体図 SK7平・断面図 SK8平・断面図 SD4断面図
図版54	畑田遺跡 SB3平・断面図 SB4平・断面図 SB5・SA1・SA2平・断面図
図版55	畑田遺跡 SB8平・断面図 SB6・SB7・SB9・SA3平・断面図

図版56	畑田遺跡	SB10平・断面図 SB11平・断面図 SB12平・断面図
図版57	畑田遺跡	D地区全体図 SD3断面図
図版58	畑田遺跡	SB13平・断面図 SB14平・断面図
図版59	畑田遺跡	SB15・SB16・SB17平面図
図版60	畑田遺跡	SB15平・断面図
図版61	畑田遺跡	SB16平・断面図
図版62	畑田遺跡	SB15P3 遺物出土状況図 SB15P7 遺物出土状況図 SB15P14遺物出土状況図 SB17平・断面図
図版63	畑田遺跡	SD5平・断面図
図版64	条里地割と奈良・平安時代の遺構との合成図	
図版65	畑田遺跡	SH1出土土器 SH2出土土器 SK1出土土器
図版66	畑田遺跡	SD1出土土器 SR1出土土器①
図版67	畑田遺跡	SR1出土土器②
図版68	畑田遺跡	SR1出土土器③
図版69	畑田遺跡	SR1出土土器④
図版70	畑田遺跡	SR1出土土器⑤ SH3出土土器
図版71	畑田遺跡	SH4出土土器 SH5出土土器 SH6出土土器 SH8出土土器 SH9出土土器 SH10出土土器 SK2出土土器 SR3出土土器①
図版72	畑田遺跡	SR3出土土器②
図版73	畑田遺跡	SR3出土土器③ SR3出土木製品
図版74	畑田遺跡	SR4出土土器・木製品
図版75	畑田遺跡	SR6出土土器①
図版76	畑田遺跡	SR6出土土器②
図版77	畑田遺跡	SR6出土土器③ SR6出土木製品
図版78	畑田遺跡	SB1出土土器 SB2出土土器 SB7出土土器 SB11出土土器 SA1出土土器
図版79	畑田遺跡	SB15出土土器 SB16出土土器 ビット出土土器
図版80	畑田遺跡	SD4出土土器 SK7出土土器 SK8出土土器

写真図版目次

写真図版1	竹の前遺跡	SH1全景(北から) SH2全景(北東から) SH2土器(16)出土状況(北西から) SH2床面被熱部分(東から)
写真図版2	竹の前遺跡	SK1土器出土状況(西から) SK2全景(北東から) SR1全景(北から)
写真図版3	竹の前遺跡	SR1土器(70~75)出土状況(西から) SR1土器(62)出土状況(西から) SR1木製品(W2)出土状況(北西から) SR1土層断面(西平) SR1土層断面(東平)
写真図版4	竹の前遺跡	SR2全景(南から) SR2土層断面(a-a') SR2土層断面(b-b')西半) SR2土層断面(b-b')東半) SR2木製品(W6)出土状況(北から)
写真図版5	竹の前遺跡	SB1全景(西から) SB2全景(北から) SB3全景(北東から)
写真図版6	畑田遺跡	SH1全景(北から) SH2全景(北西から) SH2断面(南西から) SH2焼土・土器出土状況(東から) SH2柱穴・土器出土状況(西から) SK1土器出土状況(西から) SD1断面・土器(23)出土状況(南から)
写真図版7	畑田遺跡	SR1・SR2(20次調査)全景(西から) SR1(21次調査)全景(東から) SR1土層断面 SR1(20次調査)土器出土状況(西から)
写真図版8	畑田遺跡	SR1(21次調査)土器出土状況(北西から) SH3全景(北東から) SH3土器出土状況(南東から) SH3・SH4土層断面(北東から) SH3内土坑検出状況(南東から)
写真図版9	畑田遺跡	SH4全景(北東から) SH4瓶(75)出土状況(北東から) SH5全景(南東から) SH4・SH5土層断面(南東から) SH5カマド検出状況(南西から) SH5カマド裏(79)出土状況(南西から) SH5カマド土層断面・掘方検出状況(南西から)
写真図版10	畑田遺跡	SH3・SH4・SH5・SD2全景(北から) SH6全景(北東から) SH6土層断面(東から) SH6土器出土状況(北から) SH7全景(東から)
写真図版11	畑田遺跡	SH8全景(南から) SH8全景(西から) SH9・SH10全景(北東から)
写真図版12	畑田遺跡	SH9全景(北東から) SH10全景(北東から) SH10土器(96)出土状況(東から)
写真図版13	畑田遺跡	SK2全景(東から) SR3・SR4全景(北から) SR3土層断面(b-b') SR3遺物出土状況(北東から) SR3木製品(W4)出土状況(西から)
写真図版14	畑田遺跡	SR4土層断面 SR4土器(173・174)出土状況(西から) SR5・SR6(20次調査)全景(西から) SR6(21次調査)全景(北東から) SR6土層断面
写真図版15	畑田遺跡	SR7(19次調査)全景(東から) SR7(19次調査)土層断面 SR7(19次調査)土器出土状況(西から)

写真図版16	畑田遺跡	SR 8 (22次調査) 西半全景 (西から) SR 8 (22次調査) 全景 (西から) SR 8 (22次調査) 土器 (第2群) 出土状況 (東から) SR 8 (22次調査) 土器 (第3群) 出土状況 (北東から) SR 8 (19次調査) 全景 (北東から) SR 8 (19次調査) 土層断面 SR 8 (19次調査) 土器出土状況 (南東から)
写真図版17	畑田遺跡	SR10・SR11 (23次調査) 全景 (北から) SR9 土層断面 (南西から) SR10土層断面 (南東から) SR11 (24次調査) 土層断面 (南西から) SR12 (19次調査) 全景 (北から)
写真図版18	畑田遺跡	SB 1・SB 2 全景 (東から) SB 2 全景 (東から) SK 5 全景 (北西から)
写真図版19	畑田遺跡	B 地区全景 (北から) SB 3 全景 (北西から) SB 4 全景 (北から) SD 4-1 (20次調査) 土層断面 (南から) SD 4-2 (20次調査) 土層断面 (西から)
写真図版20	畑田遺跡	C 地区全景 (北から) SB10全景 (北東から) SB11全景 (北東から) SB 4-1 (22次調査) 全景 (北から)
写真図版21	畑田遺跡	SB13全景 (東から) SB14全景 (北から) SD 3・SB15・SB16 (21次調査) 部分 (東から) SB15P 7 土器出土状況 (北から) SB15P 7 土器直下礫群 (東から) SB15P 3 土器出土状況 (南から)
写真図版22	畑田遺跡	SB15・SB16 (19次調査) 部分・SB17全景 (東から) SB15・SB16 (19次調査) 部分 (南から) SB17全景 (東から)
写真図版23	畑田遺跡	SD 5 (23次調査南半) 部分 (北から) SD 5 (23次調査北半) 部分 (北から) 現地指導状況 (立命館大学 青木哲哉氏) 現地説明会開催状況
写真図版24	竹の前遺跡	遺物 3・8・10・16・26・32
写真図版25	竹の前遺跡	遺物 33・35・38・39・41・42
写真図版26	竹の前遺跡	遺物 44・45・45細部・47・48・49
写真図版27	竹の前遺跡	遺物 50・58・59・62・62細部・66・68
写真図版28	竹の前遺跡	遺物 67・72・73・W 1・W 2・W 3
写真図版29	竹の前遺跡	遺物 W 4・W 5・W 5細部・81・83・85
写真図版30	竹の前遺跡	遺物 91・104・110・112・118・120・129・131
写真図版31	竹の前遺跡	遺物 136・137外面・137内面・138・140・143・144
写真図版32	竹の前遺跡	遺物 147・145細部・148・W 6・SR 2 出土石製紡錘車
写真図版33	畑田遺跡	遺物 2・3・12・14・15・16
写真図版34	畑田遺跡	遺物 17・18・19・22・24・25
写真図版35	畑田遺跡	遺物 26・28・30・31・32
写真図版36	畑田遺跡	遺物 33・34・35・36
写真図版37	畑田遺跡	遺物 38・39・40・43
写真図版38	畑田遺跡	遺物 44・45・46・50・51・55
写真図版39	畑田遺跡	遺物 53・56・57・58・60
写真図版40	畑田遺跡	遺物 60口縁端部・60脚部部・61・66・69・71・72・73・74・75・76・78
写真図版41	畑田遺跡	遺物 79・82・87・88・89・90・96・97・116
写真図版42	畑田遺跡	遺物 100・118・119・120・140・141
写真図版43	畑田遺跡	遺物 142・143・143口縁端部・144・145・149
写真図版44	畑田遺跡	遺物 150・151・159・161・164・W 2
写真図版45	畑田遺跡	遺物 W 2 細部・W 3・W 3 細部・W 1・W 4・165・167
写真図版46	畑田遺跡	遺物 168・169・170・171・173・173内面炭化穀粒痕・174
写真図版47	畑田遺跡	遺物 175・178・192・193・236・237
写真図版48	畑田遺跡	遺物 181・195・199・200
写真図版49	畑田遺跡	遺物 203・206・207・213・221・207の杯部接合状況
写真図版50	畑田遺跡	遺物 222・223・225・226・228・232・233・235
写真図版51	畑田遺跡	遺物 231外面・231内面・W 7・W 8・M 1・M 2・SR 7 出土漆附着須石器

挿図目次

挿図 1	SR 8 出土耳環
挿図 2	SK 5 出土土器
挿図 3	SD 4 出土陶甕
挿図 4	SB15P 6 出土瓦
挿図 5	調査区周辺の地形分類図
挿図 6	調査区付近における微地形の分布
挿図 7	竹の前遺跡4次調査区の a-a' 地質断面図
挿図 8	竹の前遺跡4次調査区の b-b' 地質断面図
挿図 9	試料写真
挿図10	FT-IR スペクトル
挿図11	弥生時代の住居域想定図
挿図12	古墳時代の住居域想定図

第1章 調査に至る経緯・経過

開発計画 姫路市飯田手柄地区は姫路平野の中央部を南流する船場川下流域にあたり、その地理的条件から、山陽電鉄や姫路バイパスの建設など早くから開発の進んできた地域である（図版1）。この地区のうち、具体的には東を主要県道姫路港線、南を姫路バイパスで区画された範囲において、組合施行による区画整理事業が計画された。

試掘調査 計画地には周知の埋蔵文化財包蔵地として、（仮称）船場川東区整遺跡第6地点（現在は畑田遺跡に改称）や竹の前遺跡が近在しており、事業計画との調整を図る上で、事業予定地の全体（対象面積6ha）における埋蔵文化財の有無を把握するため、平成14年度に試掘調査を実施した。

調査の結果、上位段丘面において、北東部を中心に弥生時代から古墳時代の遺構が検出され、南半部においても弥生時代から古墳時代の旧河道及び中世の遺構が確認された。

なお、試掘調査の調査回数については、姫路バイパスの南側で昭和62年（1987）から平成8年（1996）にかけて実施した船場川東土地区画整理事業に伴う一連の（仮称）船場川東区整遺跡第6地点の発掘調査及びその後の発掘調査を踏まえて、畑田遺跡では第18次調査、竹の前遺跡では新規の発掘調査となるため、第1次調査として整理し報告する（図版3）。

本発掘調査 試掘調査の結果に基づき姫路市飯田手柄土地区画整理組合と協定書を締結し、区画道路部分を対象とした本発掘調査を平成18～23年度に実施した（図版4）。さらに、平成24～26年度にかけて出土品の整理作業をおこない、平成26年度に報告書を作成した。試掘調査を含む調査概要は以下のとおりである。

調査概要	平成14（2002）年度	試掘調査	調査面積80㎡	
		竹の前遺跡第1次調査・畑田遺跡第18次調査		調査担当：大谷輝彦
	平成18（2006）年度	本発掘調査	調査面積1,025㎡	
		畑田遺跡第19次調査		調査担当：福井優
	平成19（2007）年度	本発掘調査	調査面積4,146㎡	
		竹の前遺跡第2次調査・畑田遺跡第20次調査		調査担当：堀本裕二
	平成20（2008）年度	本発掘調査	調査面積1,659㎡	
		竹の前遺跡第3次調査・畑田遺跡第21次調査		調査担当：福井優・岩満聡
	平成21（2009）年度	本発掘調査	調査面積2,450㎡	
		竹の前遺跡第4次調査・畑田遺跡第22次調査		調査担当：福井優
	平成22（2010）年度	本発掘調査	調査面積737㎡	
		畑田遺跡第23次調査		調査担当：南憲和
	平成23（2011）年度	本発掘調査	調査面積133㎡	
		畑田遺跡第24次調査		調査担当：南憲和
	平成24（2012）年度	整理作業		担当：福井優
	平成25（2013）年度	整理作業		担当：福井優・南憲和
	平成26（2014）年度	整理作業・報告書作成		担当：福井優・南憲和

注1 このほか竹の前遺跡では、平成25年度に兵庫県教育委員会が（二）船場川水系船場川流域治水対策事業に伴う本発掘調査を実施している（兵庫県教育委員会 2012「探検・長城遺跡探査」）。

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

遺跡の位置 姫路市は兵庫県南西部、播磨平野のほぼ中央に位置し、市域は東西約35.7km、南北約55.5km、面積534.43km²におよぶ（図版1）。市街地中央部の姫山には日本で初の世界文化遺産の登録を受けた姫路城が位置し、城周辺は国指定特別史跡となっている。市街地は近世城下町から発達したもので、海岸部の港町であった飾磨・網干と連続した市街を形成するに至っている。市域の東部は高砂市・加古川市・加西市、北部は神崎郡福崎町・市川町・神河町、西部はたつの市・宍粟市・揖保郡太子町に接する。

姫路平野は播但高原から西に続く中国山地に水源をもつ数条の河川が形成した沖積平野で、なかでも市川によって形成された扇状地・三角州が市内の中心部を占め、市街地はその上に広がっている。

竹の前遺跡・畑田遺跡の西側を流れる船場川は保城で市川から分岐し、姫路城の西を流れ播磨灘に注いでいる。しかし、『播磨国風土記』には市川は小川と記され、西側に大川が存在しており、大野里の条の「砥堀」の由来にみえる「大川」が船場川のことで、古くは市川の本流であったというのが通説である。その後、天正4年（1576）の播磨府中めぐり（『播磨万宝智恵袋』）に「いもせ川と云、今わずかに残る」とあり、中世には細々とした流れになっていたとされる。船場川流域には当遺跡のほか弥生時代から古墳時代にかけて多くの遺跡が分布している（図版2）。

旧石器時代 姫路平野では、手柄山の北丘陵からナイフ形石器、御着城跡から小型ナイフ形石器や角錐状石器などが出土しているが、調査例は少ない。

縄文時代 丁・柳ヶ瀬遺跡、今宿丁田遺跡などで中期から後期にかけての遺物が出土しているが、竪穴建物跡などの生活痕跡の遺構は明瞭でない。昭和14年（1939）に発見された辻井遺跡では、その後の調査で壮年男子の仰臥屈葬の人骨・甕棺墓・土坑・ピットなどがみつきり、5基発見された甕棺墓は縄文晩期前半のものとみられている。また、同遺跡から出土した後期から晩期の土器・土製品・石器などの出土品は豊富で、播磨における縄文時代研究の基礎資料として重要な位置を占めている。これらのほか、堂田遺跡（23）の貝層中から石椁、小山遺跡（16）などから突帯文土器が出土している。

弥生時代 弥生時代になると遺跡数が増加する。船場川に近い南畝町遺跡（4）や豆腐町遺跡（5）は中期からの遺跡で溝・土坑が検出されている。手柄山周辺には、上流から村淵遺跡（13）、橋詰遺跡（14）、黒表遺跡（15）、小山遺跡、生矢神社裏遺跡（17）が存在し、竹の前遺跡（1）、畑田遺跡（2）と続く。畑田遺跡（姫路バイパスより南側）は中期からの集落で、長越遺跡（21）と同時期に大規模なムラを形成している。後期から庄内期には方形竪穴建物跡や大型の円形周溝墓も築かれている。竪穴建物跡からは無茎銅鏃が出土している。橋詰遺跡からも庄内式土器の出土が知られており、当該期の集落とされる。小山遺跡も早くから調査され前期から庄内期の土器が出土している。長越遺跡は、船場川の西側の微高地に存在する。姫路バイパス建設時に発掘調査がおこなわれ、大溝から多量の庄内期から古墳時代前期の土器が出土した。このように船場川流域では庄内式土器が多数出土することが大きな特徴と

いえる。

- 古墳時代** 長越遺跡では庄内期から古墳時代前期初頭の6棟前後の竪穴建物跡が中央に空間を有し、そこに1棟の掘立柱高床建物(倉庫)が建つ状態で検出された。前述の大溝には橋脚とみられる遺構が存在し、その周囲では石製模造品(剣形・有孔門板・双穴門板・勾玉)を使った祭祀が行われていた。石製模造品祭祀の最も古い事例とされている。また、出土土器に吉備・讃岐・山陰地方などからの搬入品が一定量含まれることは注目される。畑田遺跡(姫路バイパスより南側)では中期の竪穴建物跡から軟質多孔式甎、コンパス文須恵器などの渡来系遺物が出土している。このほかの渡来系遺物としては斜格子タタキが施された軟質の平底鉢やコップ形須恵器なども出土している。集落としては後期まで存続する。船場川を挟んで北西に位置する手柄山は早くに開発されたが、工事中に小型の内行花文鏡が出土している。
- 古 代** 奈良時代には播磨国飾磨郡に播磨国府が置かれたことが『和名類聚抄』の記述から知られる。国庁等の所在地は不明であるが、本町遺跡や豆腐町遺跡が国府に関連すると考えられている。豆腐町遺跡からは墨書土器や漆の付着した土器、漆紙文書、輪の羽口、鉄滓などが出土しており、国府に関係した工房として機能していたようである。当遺跡周辺は『播磨国風土記』の飾磨郡伊和里とされており、宍粟郡より伊和君らが移住してきたことによるという。当遺跡の東方700mに所在する三宅遺跡(20)では平成25年度に発掘調査がおこなわれ、多量の布目瓦が出土するなど寺院関連の遺構がみつかっており、その法灯は10世紀代まで維持されたと考えられている。
- 中 世** この段階の遺跡はあまり知られていない。『播磨鑑』に大永年間(1521~28)頃に手柄山構居に三和外記次郎(法泉)という領主がいたことが記されている。
- 近 世** 慶長5年(1600)、池田輝政は関ヶ原合戦の功により播磨一国52万石を与えられ入封した。輝政は翌年から8年を要して姫路城の大改修をおこない、現存する五層の大天守と3棟の小天守をもつ連郭式の城郭を建設した。また城下町の町割を行い、城郭を中心に内・中・外の三重の堀をめぐらし、中曲輪に武家屋敷を、外曲輪には町屋・社寺地・下級武士の屋敷地を配置した。さらに、山陽道を城下に引込み、北へ通ずる生野街道と南の飾万津へ通ずる飾磨街道を山陽道と結び、播磨の中心としての町の形成をはかった。飾磨街道は当遺跡の東側を南北に通っている。

第3章 竹の前遺跡の調査成果

第1節 調査概要 (図版7)

検出遺構 基本層序は、現地表から耕作土、床土、旧耕土、旧床土、暗黄灰色シルトが存在し、黄褐色粘質細砂～中砂（基盤層）に至る。遺構は弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代以降の大きく3時期に分かれる。弥生時代の遺構としては、竪穴建物跡2棟（SH1・2）、土坑2基（SK1・2）、旧河道2条（SR1・2）がある。古墳時代まで継続する遺構としては、旧河道1条（SR2）がある。奈良・平安時代以降の遺構としては、掘立柱建物跡3棟（SB1～3）、溝1条（SD1）がある。

第2節 弥生・古墳時代の遺構・遺物

竪穴建物跡

SH1 (図版8・18、写真図版1)

検出状況 調査区の南東側で検出した。

形状・規模 長辺約2.6m、短辺約2.2mで、平面隅丸方形を呈する。深さは最大で10cmである。埋土には地山等の土壌をブロック状には含んでおらず、埋没過程の復元は困難である。また、遺物の出土時に周壁溝がすでに検出されていたことを勘案すると、2層は貼床である可能性がある。床面は約4.5㎡で、周壁溝周辺に高床部の痕跡も確認できなかったようであることから、比較的小型の部屋に入る。

屋内施設 主柱穴を4基確認した。いずれも土層断面から、柱根が残存した状態で住居が埋没したことは明らかである。いずれも掘方径が約30cm、深さは約20cmを測る。屋内には燃焼施設はみられなかった。また、北西隅を除く四辺には幅約10cm、深さ約6cmの周壁溝が巡っている。

出土遺物 弥生土器長頸壺(1)・広口壺(2)・細頸壺(3)・甕(5～9)・高杯(10～12)・鉢(14・15)などが出土した。このうち3の胴部は器形と加飾が特徴である。具体的には、扁球な胴部の上下端に断面方形に近いしっかりとした突帯をめぐらし、その間を断面三角形の棒状浮文で充填している。当該地方では通有な形式ではなく、管見の限りでは古備や畿内等で散見される。

時期 出土遺物から弥生時代後期前半に埋没したと考えられる。

SH2 (図版9・18-19、写真図版1)

検出状況 調査区のほぼ中央、SH1の西方約43mに位置する。

形状・規模 長辺約5.4m、短辺約2.9mで、平面隅丸長方形を呈する。深さは約5cmと浅い。埋土はほとんど残存していなかったが、大小の土器片を大量に含んでいた。床面積は約13.8㎡を測る。

屋内施設 主柱穴と思われるピットを2基確認した。掘方平面はやや不整形な円形で、掘方径は約30cm、深さは約30cmで、柱根が観察できた。両者は対向しているが、建物中心からやや北側にずれているように思われる。貼床や燃焼施設としての土坑はみられなかったが、床面と考えられる地山上で、被熱によると思われる平面不整形な硬化部分を2箇所検出した。色調も最も堅い中心部分が赤橙色系を呈し、その周囲に色調や硬度こそ劣るものの、硬化

部分が広がっていた。屋内炉の可能性を指摘できよう。周壁溝は南半分のみに残存し、幅10cm、深さ約3cmを測る。

- 出土遺物** 弥生土器長頸壺(16～22)・広口壺(23・25)・壺底部(24)・甕(26～36)・有孔鉢(37)・高杯(38～40)などが出土した。長頸壺には頸部が比較的短いもの(16・17)と長いもの(19・20)がみられる。甕のうち26と27は当該地のものとしてはやや異質な印象を受ける。高杯の脚部(39)には小型のものもみられる。これらの遺物のほとんどは床面から遊離した状態で出土した。
- 時期** 柱痕のあるピットや床面直上での出土はなかったため、当建物の使用時期は不明であるが、出土遺物の様相は総じてSH1よりも新相を呈する。おおむね弥生時代後期後半に埋没したと考えられる。

土坑

SK1 (図版10・19・20、写真図版2)

- 検出状況** 調査区の北端で検出した。
- 形状・規模** 長軸約1.8m、短軸約1.2m、平面楕円形を呈する。深さは約25cmを測る。埋土はほぼ水平に堆積していたが、1・2層はともに粗砂をブロック状に含むため、人為的な埋戻しの可能性が高い。
- 出土遺物** 弥生土器広口壺(41)・細頸壺(42)・甕(43～49)・水差(50)などが出土した。42の胴部上半には、櫛歯上の工具による2条の直線文とその間を充填するように斜格子文が施されており、最終的に円形浮文で仕上げている。この器形は東播磨ではよくみかけるが、当該地域ではさほど多くはない。甕のうち、全容がわかる個体(44・45・48)の内面のケズリは胴部中程までしか達していない。また、容量も大型のもの(46)、中型のもの(44・45・47)、小型のもの(48)と分化がみられる。45の胴部上半にはヘラ状工具による刺突がみられ、東部瀬戸内との関連を窺わせる。50は畿内で通有な型式の影響を受けたものと思われる。
- 時期** 出土した土器の様相から弥生時代中期後半に埋没したと考えられる。

SK2 (図版11・20、写真図版2)

- 検出状況** 調査区の北西端で検出した。遺構の大半は調査区外へと広がっている。
- 形状・規模** 調査区内における長軸約3.3m以上、短軸約1.3m以上、深さ最深部で約60cmを測る。断面は2段掘り状になっており、埋土のうち3・4層からは土器とともに炭化粒や焼土塊が出土した。これらのことから、本遺構については、高床部を持つ堅穴建物跡の可能性もあるものの、検出範囲の狭さから断定する材料に乏しく、ここでは土坑状の遺構として取り扱うことにした。
- 出土遺物** 弥生土器長頸壺(51)・高杯(53～56)などが出土した。有稜高杯(53)の底部は粘土円盤の充填によるものである。
- 時期** 出土した土器の様相から弥生時代後期後半に埋没したと考えられる。

旧河道

SR1 (図版12～14・20・21、写真図版2・3)

- 検出状況** 調査区の南西側で検出した。北東から南西方向に流下する自然流路で、埋没後にSR2に切られる。

形状・規模 幅約10m、深さ約70cm、断面逆台形を呈する。土層断面にもみられるように流路のほぼ中央に中洲状の高まりがあり、複雑な水流であったことを窺わせる。

堆積状況 埋土の分層については、その埋没過程を考慮しながら、可能な限り大別しに努めた。その結果、4層に大別することができ、以下に各土層についてふれておきたい(図1)。

上層 本調査区において確認しうる最終埋土で、湿地状堆積。遺物はほとんどなかったものの、地形のややたわんだ部分に水流による摩滅や風化が著しい弥生土器の細片が出土した(写真図版3-1)。

中層 上層とは異なり、水流を伴う埋土である。遺物は出土しなかった。

下層 SR1の最初期の埋土である。水流の下刻によって生じた大小の起伏に部分的に堆積しており、木製品を含む大量の有機質とともに縄文土器・弥生土器が出土した(図版14)。

最下層 下層堆積以前の、本来ならばSR1の前身というべき旧河道である。埋土は極めて均質で遺物は出土しなかった。

出土遺物 遺物の出土数はさほどなかったものの、縄文土器(57・58)、突帯文土器(59・60)、弥生土器(62~75)、木製品(W1~W5)などが出土した。

縄文土器深鉢(57・58)はいずれも口縁部である。57は外面に粗い削りを多用し、58は僅かな屈曲部分に棒状工具による刺突がみられる。

突帯文土器(59・60)はいずれも口縁部からやや下がった位置に断面三角形の突帯を貼り付けている。突帯上の刻目は両者ともにD字形で、60は端部にも刻目を有する。61は底部である。胎土や焼成は60・61に近い。

弥生土器の広口壺(62)は外面の細密なミガキが良好に残る。3条のヘラ描き沈線は断続的に施文具を止めている様子がよくわかる。広口壺(67・68)は62より新相を呈する。70~75は先述の最終埋土である上層から比較的にまとまった状態で出土した。いずれも状態は良くないものの、器種認定とおおまかな時期の比定は可能である。

上記の土器に伴い出土した木製品は、匙(W1)、板材(W2・W3)、刀形木製品(W4)、不明木製品(W5)である。W1は大量の有機質に紛れて出土したために正確な出土位置は把握できなかった。幅約5cm、身の長さ約6.5cm、身の深さ約1cmを測る。柄の付け根で折損している。使用木材はツバキ科サカキ属サカキである(図2)。W2は残存幅約5cm、残存長53cm、厚さ約2cmの板材で、長方形のホゾ穴を6箇所穿っている。うち、左端のホゾ穴は他のものに比して一回り大きい。使用木材はヒノキ科アスナロ属である。W3は残存幅約11cm、残存長約69cm、残存厚さ約3cmで、挟り込みが2箇所みられる。使用木材はW2と同じである。W4は幅約4cm、残存長約67cmで、厚さ約1~2cmである。切先に当たる部分は潰れている。生きている形状から刀形と呼称したが、伴出した土器が57~69であるために、実際に鉄刀を模したものかについては、積極的に断定する材料になお乏しい。使用木材はW2と同じである。W5は最大幅約3.5cm、最小幅約1.5cm、残存長約36cmを測る。身幅の広い部分には部分的に挟りのような加工がみられる。使用木材はW2と同じである。

時期 下層から出土した57~69は縄文時代晩期から弥生時代前期に、上層出土の70~75につい

ては概ね弥生時代中期後半に比定できる。したがって、SR1は遅くとも縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて流下を始め、弥生時代中期後半にはほぼ完全に埋没し、湿地状を呈していたと考えられる。

SR2 (図版12・15・22～25、写真図版4)

検出状況 調査区の南西側に検出し、SR1とはほぼ並行しており、SR1の埋没後に形成された。

形状・規模 幅約13m、深さ約2.2m、断面逆台形を呈する。

堆積状況 本河道の延長は最大で約60mに達するため、その埋土には複数の不連続面が認められ、堆積状況は極めて複雑であった。埋土の分層についてはSR1と同じように努め、各土層を堆積状況の類似をもとに4層に大別した。出土遺物については、可能な限り層別に取り上げたが、土層の不連続性や層位の境界付近における帰属層の判断の困難さから、厳密な意味では分別できなかつたものもあることを予め断っておく。以下、各土層の概要について触れておく(図1)。

上層 SR2埋没後の地形の窪地に広がる湿地状堆積。平安時代後期以降、中世にかけての遺物を極少量含む。

中層 上層とは異なり、水流を伴う埋土である。細砂が複雑にレンズ状堆積をみせる。

下層 黒褐色粘土が主体で、おそらくは滞水時における堆積層と思われる。遺物の多くは中下層から出土した。

最下層 最初期の埋土である。細砂や粘土が細かく複雑なレンズ状堆積をみせる。

出土遺物 コンテナ(天昇電気工業製テンパコP18、約18ℓ)に約20箱分の遺物が出土した。そのうち図化したものは、弥生土器(76～113)、古式土師器(114～135)、土師器(136～142)、須恵器(143～150)の75個体と木製平盃(W6)である。いずれも残存状態はよく、ごく付近からの流入と考えられる。

76～92は壺である。76～78は広口壺である。口縁端部に擬凹線を施すもの(76・78)と丁寧なヨコナデで仕上げるものがある。79は直口壺である。80は長頸壺で、頸部と肩部でハケメの原体が異なる。81・82は無形壺である。81は突帯や半截竹管文で加飾するのに対し、82はクシ描き直線文と波状文を施す。83～86は広口壺の胴部である。施文のパターンや方法にバリエーションがみられる。87は底部である。89・90は広口壺である。両者はともに河内に通有な器形を呈するが、胎土が異なる点が興味深い。あくまで肉眼観察ではあるが、89は当該地帯で一般的のものであるが、90は褐色を呈し角閃石や雲母を含むことから河内からの搬入品であることは明らかである。外来系の土器が在地化する好例といえよう。91は口縁端部に竹管文による連続渦文がみられる。92も90と同様特徴的な胎土を持ち、その器形から河内からの搬入品の可能性が極めて高い。

93・94は突帯文土器である。いずれも口縁部付近の小片で、口縁端部から下がった位置に突帯を貼り付けている。95は胎土や焼成の様相から前二者との関連が深いと判断した。

96～101は甕である。96は口縁部を逆L字に近い状態まで屈曲させている。97は内面のケズリが胴部上半にまで達している。101は底部を小さな粘土円盤で充填している。

102～105は高杯である。102は鋸歯状の施文、104は異なる施文具による波状もしくは山形の施文がみられる。103は2次調整であるミガキが粗いために、1次調整が特に裾部にお

いては残存している。底部は粘土円盤による充填である。105は透し孔の配置と胎土にやや違和感を覚える。外来系、もしくはその影響下にあるものの可能性が高い。

106～109は器台である。107のみに僅かに施文がみえる。

110・111は鉢である。いずれも大型で、111は口縁部の屈曲が一定せず、注ぎ口のようにみえる箇所もある。

112・113は蓋である。112は甕蓋で内面外側には円形にススが付着している。113は紐孔があり壺蓋と思われる。

114・115は壺である。114は直口壺、115は広口壺で、外面タタキの後に粗いミガキを施す。116・117は底部である。

118～128は甕である。118・119は庄内形の甕である。118は上方に僅かに積み上げて成形した口縁端部に沈線を施す。123から128は底部で、断面観察が可能な123～125の底部は粘土円盤を充填して成形されている。129も甕の底部と思われるが、用途不明の穿孔がみえる。

130～135は高杯である。130は有稜の受部を有し、受部外面にミガキを施すがやや粗い。131～135は脚部であるが、杯部と脚部の接合方法に違いがある。131・132は粘土円盤充填、133～135挿入付加法による。

136は直口壺である。137は布留式の甕で口縁部は内湾し、端部に内傾する面を持つ。138は丸胴にゆるやかに開く口縁部を有する。口縁端部に布留式の特徴はみられない。139は長胴甕もしくは長胴傾向の強い甕である。140は138と同じ系統、もしくはその影響下にある個体で、平底を呈する。

141は高杯である。浅い椀形の杯部を持ち脚裾部に円孔を有する。

143は壺の口縁部である。144は短頸壺、145は大甕の底部で、成形方法がよく分かる。146～150は蓋杯で、148を除けば、おおむね型式はまとまっているように思われる。

W6は一本鑿である。把手幅は復元で約13cm、身幅も復元で約17cm、身の厚みは約1cm、全長は残存している部分で約130cmを測る。把手の形状は逆三角形を呈し、把手上端の横木を太く作り出している。身の肩部はしっかりと角を持ち、身の断面はゆるやかに湾曲している。使用木材はブナ科コナラ属アカガシ亜属で、イチイガシやアカガシに当たるといふ。

時 期 先述のように遺物の取り上げに際しては慎重を期したが、各土層と出土遺物の時期については特に相関性は認められなかった。出土量をもても特定の時期の遺物が多いという傾向もみられなかった。ただ、古墳時代の遺物については、その多くが完形もしくはそれに近い形であり、かつ水流による摩滅を受けていないものばかりであった点を考慮すると、SR2は弥生時代の後半から古墳時代初頭、そして古墳時代後期という非常に長期間にわたり機能していたと考えることができよう(図1)。

註1 本河道の埋土の分層については、立命館大学青木哲哉氏に現地を観察していただき、ご教示を得た。

註2 木製品の図化、保存処理、樹種同定については株式会社古田生物研究所に委託した。以下同じ。

第3節 奈良・平安時代以降の遺構・遺物

1. 奈良・平安時代以降の概要（図版7）

検出遺構 掘立柱建物跡3棟（SB1～3）^(図1)、溝1条（SD1）などがある。

当該期の遺構を検討するにあたり、周辺地域で現在にみることのできる条里地割の阡陌線がN-20°-E偏する^(図2)ことを前提とし、遺構の主軸方位がこれに概ね一致するものについては、基本的に条里地割に規制されたものと認識した。ここでいう「条里地割に規制された」ものとは、最終段階の条里地割の原景観の成立に伴うものとの意味で使用する^(図3)。

建物跡（柵を含む）の場合、飛鳥・奈良時代と考えられるものを除き、寸法表記において1尺=0.303mとする尺貫法に換算した数値を参考までに併記した。長方形平面と認識できる建物の場合、長軸方向を桁行、短軸方向を梁間とし、主軸方位は桁行の方位によって表記した。

2. 遺構・遺物

掘立柱建物跡

SB1（図版16、写真図版5）

検出状況 2次調査で調査区の東端部で検出した。

形状・規模 東西（桁行）4間×南北（梁間）2間の側柱建物である。規模は、東西（桁行）6.98m（23尺）、南北（梁間）3.03m（10尺）を測り、面積は21.15㎡である。主軸方位はN-76°-Wである。個々の柱間の芯々距離は、南・北辺が西端から1.67m（5尺5寸）、1.82m（6尺）、1.70m（5尺6寸）、1.79m（5尺9寸）を測り、東・西辺（桁行）が1.515m（5尺）、1.515m（5尺）を測り、対応する柱間の芯々距離が一致する。また、桁行は2間で11尺5寸となる計画寸法が読み取れる。柱穴の掘方は径0.20～0.30mの円形を呈し、柱穴は径0.13～0.16mであった。

出土遺物 柱穴から遺物は出土しなかった。

時期 時期を比定できる遺物は出土しなかったため不明である。

SB2（図版16、写真図版5）

検出状況 2次調査で調査区の中央部で検出した。

形状・規模 側柱建物として復元した。東西（桁行）2間分を検出したが、西側及び東側の延長部分が調査区外へ続くと思定される。検出した範囲の規模は、東西（桁行）8.92m、南北（梁間）3.48mを測り、面積は31.04㎡である。主軸方位はN-65°-Eである。個々の柱間の芯々距離は、北辺（桁行）が西端から3.64m（12尺）、3.79m（12尺5寸）、南辺（桁行）が西端から3.64m（12尺）、3.64m（12尺）を測り、東・西辺（梁間）は3.48m（11尺5寸）と推測される。柱穴の掘方は径0.23～0.30mの円形を呈し、柱穴は径0.10～0.16mであった。通常の建物より1間の寸法が長く、南・北辺で柱穴が対応しないため柵の可能性もあるが、梁間に11尺5寸の計画寸法が採用されていることと、柱穴の深さが浅く本来存在した半間の柱穴が失われている可能性も考慮に入れてここでは側柱建物として扱った。

出土遺物 柱穴から遺物は出土しなかった。

時期 時期を比定できる遺物は出土しなかったため不明である。

SB3 (図版17、写真図版5)

検出状況 調査区の北西端部で検出した。SD1を切る。

形状・規模 総柱建物で南北(桁行)5間分×南北(梁間)3間分を検出した。北西部及び南側の延長部分は調査区外へ続いている。検出した範囲の規模は南北(桁行)13.14m、東西(梁間)8.79m(29尺)を測り、面積は115.50㎡である。主軸方位はN-15.5°-Eである。個々の柱間の芯々距離は、桁行が北端から2.24m(7尺4寸)、2.22m(7尺3寸)、2.39m(7尺9寸)、2.15m(7尺1寸)、2.30m(7尺6寸)で、梁間が西端から3.03m(10尺)、2.76(9尺1寸)、3.00m(9尺9寸)を測る。柱穴の掘方は径0.24~0.36mの円形を呈し、柱穴は径0.14~0.19mであった。

出土遺物 柱穴から遺物は出土しなかった。

時期 SD1より後出するが、時期を比定できる遺物は出土しなかったため不明である。

溝

SD1 (図版17)

検出状況 SB3の中央部で検出した、SB3に切られる。

形状・規模 幅0.8m、検出面からの深さ22cmを測る。直線方向に延び南端は調査区内で終息する。北側の延長部分は調査区外へ続いている。主軸方位は概ねN-24.5°-Eである。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

時期 時期を比定できる遺物が出土しなかったため不明である。主軸方位から条里地割に規制された形とみることもできるかもしれないが、検出範囲だけの言及は避けたい。

注1 掘立柱建物については、「建物の柱穴から時期を決定する手がかりとなる遺物が充分出土するとは限らない。実情はむしろ逆であって少ない場合が普通である。そのため同時期に存在した建物群の復原には、いきおい柱穴の重複関係や建物方位を重要な手がかりとせざるをえない」(小笠原好彦 1979「畿内および周辺地域における掘立柱建物集落の展開」『考古学研究』第25巻第4号)とあり、時期比定等の方法論については、小笠原氏の手続きを参考にした。また、今回検出した掘立柱建物の中で条里地割成立以前と推測される建物については、奈良・平安時代以前のものを含む可能性を否定できるものではない。

注2 鉾野郡の条里地割の経緯については、N-約21°-E(山中敏史 1984「本町遺跡の性格について」『本町遺跡』郡路市教育委員会)、N-22°-E(谷岡武康 1964「平野の開発-近畿を中心として-」古今書院)、N-23°-E(木下良 1984「駅路との関係を中心とする横濱国府跡の想定-本町遺跡を早上駅跡と見て-」『本町遺跡』郡路市教育委員会)などの認識があるが、手前山南部の平地及び船場川両岸ではN-20°-E(渡辺久雄 1978「長城遺跡の地理的環境」『播磨-長城遺跡-本文編-』兵庫県教育委員会)を示すとされる。本稿では竹の前遺跡及び畑田遺跡の周辺に限った条里地割を対象とするため、N-20°-Eを基本とした。

注3 条里(制)地割については、広瀬和雄氏が第1~3段階の前期を設定し、第1を「7世紀代の大開発を前提として律令的収取方式に不可欠な条里地割が成立した段階、第2を「10世紀後半における条里地割内部の開発と再開発の広汎な進行」をみた段階、第3を「(13世紀代)条里地割内部の耕地化が一応の完成を(中略)、現在にみることのできる条里地割の原景観が成立した」段階としている(広瀬和雄 1986「中世の船動」『岩波講座 日本考古学6』)。鉾野郡の条里地割の成立時期の問題については筆者の力量の及ぶところではなく、本稿の「条里地割に規制されたもの」とは、広瀬氏の設定した第3段階、つまり、最終段階の条里地割の原景観の成立に伴うものとの意味で使用する。また、調査地が船場川岸に近く、地割も低位段丘などによる自然地形の影響を受けていることも考慮に入れ、N-20°-Eに一定の振り幅をもたす必要があると考え、これに近い主軸方位をもつ遺構についても条里地割の規制を念頭に置いた。

第4章 畑田遺跡の調査成果

第1節 調査概要 (図版26・31・50)

検出遺構 基本層序は、現地表(耕作土)、床土、旧耕土、旧床土、暗黄灰色シルトが存在し、黄褐色粘質細砂～中砂(基盤層)に至る。遺構は弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代以降の大きく3時期に分かれる。弥生時代の遺構としては、竪穴建物跡2棟(SH1・2)、土坑1基(SK1)、溝1条(SD1)、旧河道2条(SR1・2)がある。古墳時代の遺構としては、竪穴建物跡8棟(SH3～10)、土坑3基(SK2～4)、旧河道10条(SR3～12)がある。奈良・平安時代以降の遺構は第4節で詳述する。

第2節 弥生時代の遺構・遺物

竪穴建物跡

SH1 (図版27・65、写真図版6)

検出状況 調査地の北東部、20次調査で検出した。
形状・規模 本遺構のほとんどが調査区外へ広がっている。復元値で、径約7.2mで平面円形を呈する。深さは約20cmである。埋土の観察から埋没過程の復元は困難である。床面積は復元値約38㎡を測る。
屋内施設 主柱穴を1基確認した。径は約40cm、深さは約52cmである。土層断面の観察から、本建物廃棄時に主柱は抜かれていた可能性が高い。調査区内には燃焼施設はみられなかった。また、床面外周には幅約15cm、深さ約10cmの周壁溝が巡っている。土層断面から部分的に貼床が残存していたようであるが詳細は不明である。
出土遺物 弥生土器壺(1)・甕(2・3)・脚台(4)・鉢(5・6)などが出土した。
時期 出土遺物から弥生時代後期に埋没したと考えられる。

SH2 (図版27・65、写真図版6)

検出状況 調査地の西部、23次調査で検出した。西側はSD5に切られる。
形状・規模 平面形が直径5.3mの円形を呈す。検出面からの深さは約20cmを測る。床面は基盤層の削平面をそのまま利用しており、南側では焼土が部分的に認められた。主柱穴は1基検出され、床面から底までは約60cmを測る。
出土遺物 弥生土器甕(7～10)・高杯(11)・鉢(12～14)・器台(15)などが出土した。これらの土器は床面から僅かに遊離しており、廃絶時の埋め戻しの際に廃棄されたとみられる。主柱穴の際から出土した器台(15)も一部が柱穴上に載っており、柱の抜き取り後に残置されたものとみられる。
時期 出土遺物から弥生時代後期と考えられる。

土坑

SK1 (図版28・65、写真図版6)

検出状況 調査地の中央部、19次調査で検出した。
形状・規模 長軸約1.9m、短軸約1.6m、深さ約40cmを測る。本土坑の北側約1/3は一段高くなっている。遺物は床面からは遊離していたが、3～9層から出土した。なかには炭化粒や灰、

焼土を含む土層もあり、土坑の埋没と土器群の廃棄に際して何らかの行為があったことは間違いない。また、土坑床面と土器の間に堆積していた土層にはブロック状の地山が含まれており、土器廃棄に先行して若干の埋戻しがあったことをうかがわせる。

- 出土遺物** 弥生土器長頸壺 (16・17)・広口壺 (18)・無頸壺 (21)・甕 (19・20)・器種不明 (22) などが出土した。長頸壺は比較的大型で、17の頸部にはV字状に粘土紐を貼付けている。22は口縁部である可能性が高いが、器種は不明である。内面には半截竹管文が2段みえる。
- 時期** 出土した土器の様相から弥生時代後期後半に埋没したと考えられる。

溝

SD1 (図版29・66、写真図版6)

- 検出状況** 調査区の南東部、23・24次調査で検出した。
- 形状・規模** 延長18m以上、幅20m、検出面からの深さは30cmを測る。直線的に伸び、両端は調査区外に続いていた。断面形は椀状を呈す。埋土の状態から洪水等が要因で一時期に埋まったとみられる。
- 出土遺物** 弥生土器広口壺 (23～25) が出土した。
- 時期** 出土遺物から弥生時代前期後半と考えられる。

旧河道

SR1 (図版30・66～70、写真図版7・8)

- 検出状況** 調査区の北東部、20～22次調査に跨って検出した。概ね北東から南西方向に流下する自然流路である。
- 形状・規模** 幅約2.8m、深さ約0.9m、断面逆台形を呈する。延長約93mを調査した。その西端部分で、流路は南へ向きを変えているが、これは調査当時に視認できた段丘崖の位置とほぼ一致する。この段丘崖のラインは調査当初に、中世末から近世前半頃の簡単な石組み護岸の残骸であることがわかったが、その護岸を形成するに至った旧地形自体が既に本流路形成時に完成していたと考える。
- 堆積状況** 埋土は、4層に大別することができた。以下に各土層についてふれておきたい。
- 上層 本流路の最終埋土で湿地状堆積。遺物は少なく、中世の土器細片が出土した。
- 中層 上層とは異なり、水流を伴う埋土である。弥生土器が出土した。
- 下層 SR1の最初期の埋土である。滞水時に繁茂していた植物等の有機質の腐食により黒褐色を呈する。弥生土器が多く出土した。
- 最下層 下層以前の、本来ならばSR1の前身というべき流路である。埋土は極めて均質で遺物は出土しなかった。おそらく、この埋没過程において洪水により新しい流路が発生したと考えられる。
- 出土遺物** コンテナP18に約64箱分が出土した。そのほとんどが弥生土器 (26～60) である。26～36は壺である。28～33は長頸壺で、器形の他に器壁の厚みにもバリエーションがみられる。底部の製作技法が確認できたものは、胴部をある程度成形した後に粘土塊を詰めるタイプである。なかでも30・31には龍をモチーフにしたと思われる線刻がみられる。これらは直接接合しないが、出土位置や胎土・焼成の特徴から29と同一個体の可能性が高い。34は頸部と胴部の境界が不明瞭で、当該地ではあまり一般的な器種ではなさそうである。大きさはやや異なるが、周土入相違跡 (赤穂市)の土壌9に類例が知られる (甲斐編1990)。35と36は褐色を呈する胎土に角四石粒や雲母片を含むことが特徴で、一見して搬入品と判る個体である。35は胴部の調整によって胴部

の段を成形している。36は中部瀬戸内北岸の上東式の長頸壺に器形は類似するが、頸部下半のハケメ原体によると思われる瓦痕文はむしろその南岸で通有の施文パターンである。

37～47は甕である。37～39・45は1次調整の叩き締め痕跡を残さないか、もしくは行っていないものである。43は最終調整のハケメを比較的丁寧に行っているにも関わらずタタキが僅かに残る。41はやや長い胴部が特徴であるが、片吹遺跡（たつの市）と東有年沖田遺跡（赤穂市）に類例が求められるのみで、在地の器形かどうかは判然としない。また、38・42・43は肩部が比較的直線的で、胴部最大径がやや低い位置にあるのが特徴であるが、当該期の在地の甕の一般的な器形が肩部は丸みを帯び、胴部最大径がやや高い位置にあるのとは趣を異にする。あくまで想定は出ないが、上天神遺跡（香川県高松市）に代表される中部瀬戸内南岸一帯との関連をうかがわせる資料である。45は受口状口縁が特徴で、加飾こそみられないが近江地域に特有の属性である。46は小型品で被熱によると思われる器壁の破裂が著しい。

48～55は高杯である。有稜の杯部をもつもの（48～53）と碗形の杯部をもつもの（54・55）がある。杯部と脚部の接合方法には、別造り（48・49・50・51・54）と一体造りの可能性が高いもの（52）があり、杯底部は粘土円盤充填によるものがほとんどである。53の胎土は一見すると35・36と類似するよう思えるが、器形や透し孔の配置、杯底部の成形等から河内からの搬入品と考えられる。

56は脚付きの鉢である。57～59は鉢である。57は口縁部がやや折れるタイプで、58・59は直行する口縁部をもつ。

60は加飾の著しい、いわゆる装飾高杯である。口径37.1cm、器高28.0cm、底径21.4cmの大型品である。口縁端部には右下がりの鋸歯文、その上端には覆輪を模したような刻み、脚柱部には数条のヘラ描き文線とヘラ状工具による刺突の組み合わせがみえる。また、脚柱部には2段に屈曲し、円孔と棒状浮文様の装飾を施す。器形・分量ともに近いのは原・田中遺跡（赤穂市）、雄町遺跡（岡山県岡山市）、原尾島遺跡（岡山市）等に見られる。

時 期 遺物のほとんどが下層からの出土であった。なかには、39・43・44・46・51・53・56・59・60のように比較的まとまった出土状況を呈している例もあり（写真図版8）、そういったまとまりは複数箇所で見られた。いずれの土器も概ね弥生時代後期前半に比定できる。遺構の性格上、厳密には同時期性の担保はかなわないものの、当該地周辺で希薄な当該期の良好な資料といえよう。

SR2（図版30、写真図版7）

検出状況 先述のSR1の北側で、ほぼ並走している。

形状・規模 幅約2.1m、深さ約0.6m、断面逆台形を呈する。

堆積状況 土層の堆積状況は、SR1とはほぼ同じである。

上層 本流路の最終埋土で湿地状堆積。遺物は少なく、中世須恵器・土師器の細片が出土した。

中層 上層とは異なり、水流を伴う埋土である。

下層 SR2の最初期の埋土である。滞水時に繁茂していた植物等の有機質の腐食により黒褐色を呈する。弥生土器の小片が出土した。

最下層 本来SR2の前身というべき流路の埋土。

出土遺物 遺物はSR1とは違いコンテナP18に約2箱分しか出土せず、小片のみであった。

時 期 弥生時代後期に埋没したと考えられる。

第3節 古墳時代の遺構・遺物

竪穴建物跡

SH3 (図版32・70、写真図版8・10)

- 検出状況** 調査区の南東部、23次調査で検出した。SH4及びP10に切られる。
- 形状・規模** 東西20m以上、南北17m以上の方形ないし長方形プランに復元される。検出面からの深さは約15cmを測る。床面は基盤層の剖面をそのまま利用していた。南壁際に土器片が集積しており、南東隅に土坑(SH3内土坑)が存在する。土器集積は床面直上から、床面から僅かに遊離したレベルに位置しており、廃絶時に一括して遺棄されたものとみられる。SH3内土坑は長軸1.5m、短軸0.9mの楕円形を呈し、床面からの深さは20cmを測る。断面形は椀状を呈し、竪穴建物の壁面と比べて立ち上がる角度が緩い。坑内からは弥生土器の細片が出土したのみであった。
- 出土遺物** 須恵器甕(61)・杯蓋(62・63)・杯身(64~66)・器台の杯部(69)、土師器高杯(70)、斜格子タタキが施された軟質系土器(71~74)のほか、須恵器の高杯脚部(67)・杯蓋(68)が出土した。
- 時期** 出土遺物から古墳時代中期と考えられる。67・68は7世紀後半から8世紀初頭の所産とみられ、後出するP10からの混入であろう。

SH4 (図版32・71、写真図版9・10)

- 検出状況** SH3の北側で検出した。SH3を切りSH5に切られる。
- 形状・規模** 東西1.5m以上、南北1.8m以上の方形ないし長方形プランに復元される。検出面からの深さは約15cmを測る。南壁際の一部に壁溝がみられる。
- 出土遺物** 床面から僅かに遊離した位置で土師器甕(75)が出土した。
- 時期** 出土遺物から古墳時代中期と考えられる。

SH5 (図版32・33・71、写真図版9・10)

- 検出状況** SH4の北側で検出した。SH4に後出する。東側はSD4に切られる。
- 形状・規模** 東西5.3m以上、南北3.4m以上の方形ないし長方形プランに復元される。床面の一部は貼床になっており、検出面から床面までの深さは20cmを測る。北面には造り付けのカマドが構築されていた。カマド部分を除く北面及び西面には壁溝が掘られており、溝の底面に小ピットがみられた。カマドの掛口には土師器甕(79)が遺存しており、その周囲の土は被熱し赤変していた。焚口付近には炭が広がっており、その脇から須恵器杯身(78)が出土した。主柱穴は調査区東壁でみつかった柱穴がそれに相当する可能性があり、床面からの深さは17cmを測る。
- 出土遺物** 須恵器杯蓋(76・77)・杯身(78)、土師器甕(79)が出土した。
- 時期** 出土遺物から古墳時代中期と考えられる。

SH6 (図版34・71、写真図版10)

- 検出状況** SH3の南側で検出した。SH7に切られる。東側はSD4に切られる。
- 形状・規模** 東西4.0m、南北1.8m以上の方形ないし長方形プランに復元される。床面の一部は貼床になっており、検出面からの深さは約20cmを測る。主柱穴は調査区西壁でみつかった柱穴がそれに相当する可能性があり、床面からの深さが22cmを測る。
- 出土遺物** 須恵器杯蓋(80)・杯身(81)、土師器高杯(83)・甕(84~86)、斜格子タタキが施された軟質系土器(87~89)が出土した。82は縄文をもつ須恵器片である。

時期 出土遺物から古墳時代中期と考えられる。

SH7 (図版34、写真図版10)

検出状況 SH6の北側で検出した。土坑の可能性もあるが、底部が平坦であることから竪穴建物跡とした。
 形状・規模 東西0.6m以上、南北3.1m以上を測り平面形は不明である。検出面からの深さは約10cmを測る。
 出土遺物 須恵器細片が出土したが図化に耐えうるものではなかった。
 時期 出土遺物から古墳時代中期と推測される。

SH8 (図版35・71、写真図版11)

検出状況 調査地の南東端部、23・24次調査で検出した。
 形状・規模 東西4.5m以上、南北2.3m以上の方形ないし長方形プランに復元される。検出面からの深さは約5cmを測る。北東部に焼土がみられ、その直上から須恵器杯身(90)が出土した。これを図版35-1図の断面c-c'と照合すると、9層が焼土に相当する。9層直下の11層と13・14層の層界には薄い黒色化した層が介在していた。13・14層は基盤層を攪拌したような土質で、断面a-a'における2層、断面b-b'における1層に対応するとみられた。これらの下層で周壁溝が検出された。このため、基盤層直上を利用した段階と、11層を床面とする段階の2段階の変遷が考えられる。しかし、11層を床面とする段階は検出面とはほぼ同レベルに位置するため、形状・規模は判然としなかった。

出土遺物 焼土直上から須恵器杯身(90)が出土した。

時期 最終段階としては古墳時代後期と考えられる。

SH9 (図版35・36・71、写真図版11・12)

検出状況 調査地の中央部、22次調査で検出した。SR8の左岸に位置しSH10及びSB2に切られる。
 形状・規模 あくまで復元値ではあるが、一辺約5.7mで、平面方形を呈する。深さは10cm程度しかなく、埋土のうち2層にはブロック状の地山が含まれることから本建物は廃棄時に埋め戻された可能性が高い。床面積は約31m²と推定できる。

屋内施設 主柱穴を2基とその内側に非常に浅いくぼみ状の小穴を4基確認した。主柱穴の径は約40cm、深さは約30cmである。土層断面の観察から、本建物廃棄時に主柱は抜かれていた可能性が高い。屋内には燃焼施設はみられなかったが、本建物の北側の未調査部分にあるのかもしれない。また、床面外周には断続的に幅約10~20cm、深さ約15cmの周壁溝が巡っている。

出土遺物 土師器甕(91)・高杯(92・93)などが床面から遊離した状態で出土した。

時期 概ね古墳時代後期に埋没したと考えられる。

SH10 (図版35・37・71、写真図版11・12)

検出状況 調査地の中央部、22次調査で検出した。SR8の左岸に位置しSH9を切り、SB2に切られる。
 形状・規模 一辺約5.7m、平面方形を呈する。深さは10cmにも満たないほど後世の削平を受けている。そのため、埋土の状況から埋没過程の復元は困難である。床面積は約30m²と推定できる。

屋内施設 主柱穴の可能性が高いピットを3基とその内側に非常に浅いくぼみ上ではあるが小穴を4基確認した。主柱穴と思われるピットの径は約30~40cm、深さは約10cmである。ピット内には柱の当たりと思われるくぼみが確認できた。また、土層断面の観察から、本建物廃棄時に主柱は抜かれていた可能性が高いと思われる。屋内には燃焼施設はみられなかったが、本建物の北側の未調査部分にあると思われる。また、床面外周には断続的に幅約10cm、深

さ約10cmの周壁溝が巡っている。

出土遺物 須恵器甕 (96) は床面直上から、杯蓋 (94) が床面から遊離した状態で、杯身 (95) は主柱穴内側の小穴からそれぞれ出土した。96のクシ描き波状文を施す頸部は外方向へとやや長く伸びる。頸部と胴部の境界は比較的しっかりとしている。

時期 96の特徴から古墳時代後期 (MT15段階) に埋没したと考えられる。

SH11 (図版37)

検出状況 調査地の中央部、19次調査で検出した。SR7の右岸に位置しSB17に切られる。

形状・規模 方形平面の一角以外は調査区外に広がっているため、詳細は不明である。遺構の深さは約10cmあり、埋土の断面観察から貼床を行っていたことが判る。貼床を構成していた4・5層には地山がブロック状に含まれていた。

屋内施設 確認できた内部の施設は、床面外周の周壁溝のみである。幅約15cm、深さ約8cmを測る。

出土遺物 土師器の板小片が出土したのみで、器種等詳細は不明である。

時期 遺物からの時期の推定は困難であるが、今回検出した他の遺構や、近接するSR7の存在から古墳時代後期と推定する。

土坑

SK2 (図版38・72、写真図版13)

検出状況 調査地の中央部、19次調査で検出した。SR12に隣接する。

形状・規模 径約1.3mの平面円形で、深さ約1.0mを測る。本土坑は下端付近がオーバーハング気味になっており、また、旧河道脇の斜面に位置していることから、井戸の可能性はあるが、積極的に断定する材料に欠ける。遺物は主に1層から出土しているが、その土層からは炭化したイネ科と思われる草本類や器種不明の木製品、もしくは燻材が伴出している。

出土遺物 須恵器甕 (97)、土師器鉢 (98)・高杯 (100・101)・甕 (99) などが出土した。97は口縁部で、縦方向のハケメの後にクシ描き波状文を2条施している。98の底部はオサエによって僅かだが平底状を呈する部分がある。100は杯部に完成した脚部を挿入している可能性が高い。

時期 出土した土器の様相から古墳時代後期 (TK23・47段階) に埋没したと考えられる。

SK3 (図版38)

検出状況 SK2の北側で検出した。

形状・規模 径約0.8mの平面円形で、深さ約10cmを測る。本土坑からは遺物は出土しなかったが、埋土がSK2の1層に類似していることから、古墳時代の遺構と判断した。

時期 遺物は出土していないが、概ねSK2と近い時期のものと思われる。

SK4 (図版38)

検出状況 SK3の北東側で検出した。

形状・規模 長軸約1.3m、短軸約0.8mの平面楕円形で、深さ約20cmを測る。SK3同様、埋土がSK2の1層に類似している。

時期 須恵器甕の胴部片が出土したのみではあるが、概ねSK2と近い時期のものと思われる。

旧河道

SR3 (図版39～41・72～74、写真図版13)

検出状況 22次調査で検出した。概ね北東から南方向にSR4と並行して流下する自然流路である。

- 形状・規模** 上端の最大幅は約8mにも及ぶが、流路本体としては幅約4m、深さ約1.1mを測り、断面逆台形を呈する。延長約64mを調査した。
- 堆積状況** 埋土は、4層に大別することができた。以下に各土層についてふれておきたい。
- 上層 本流路がほぼ埋没した後の湿地状堆積。遺物は少なく、中世土器の細片が出土した。
- 中層 本流路の最終埋土。水流を伴うため、細分層可能。古墳時代前・中期の土器が出土した。
- 下層 本流路の滞水時に繁茂していた植物等有機質の腐食により黒褐色を呈する。多くの古墳時代前・中期の土器、木製品とともに大量の植物遺存体が出土した。
- 最下層 本流路の最初期の埋土。粗砂や小円礫が主体。弥生土器が出土した。
- 出土遺物** コンテナP18に約35箱分が出土した。出土遺物は古式土師器(102~133)、古墳時代前期の土師器(134~139)、古墳時代中期の須恵器(140)、古墳時代中期の土師器(141~164)、木製品(W1~W4)である。
- 102~105は壺である。102は直口壺で、頸部は比較的丁寧なヨコナデ、胴部上半には右上がりのタタキが微細に残存する。103・104は広口壺で、器壁は粗く調整は不明である。105の胎土は在地のものとしてはやや異質な印象を受ける。
- 106~122は甕である。106~108の頸・肩部に右上がりの微細なタタキが残る。口縁端部について、106はごく僅かに面取りがあり、107は面取り、108は外上方に強いヨコナデを施すことでしっかりと面取りをそれぞれ成形している。109は右上がりのタタキの後に縦方向のハケメ、外面は全面にスガが付着。110は口縁叩き出しにより口縁部をやや強く折り曲げる。111は褐色系の胎土に角閃石粒を含む搬入品。112は小片ではあるが、吉備地域からの搬入品の可能性が高い。113・114は庄内形の甕で、外面右上がりの微細なタタキと内面ケズリが特徴で在地産である。115は比較的精良な胎土である。116はやや不整形な器形と口縁端部のタタキが特徴で、最近一定の認識が得られるようになった淡路型甕(森岡2003、的崎2003、池田2013)の影響を受けた個体である可能性が高い。117~122は底部で、平底(117)、タタキ仕上げ(118)、小さな平底(119)、上げ底状(120~122)がある。
- 123・125・126は高杯である。123は有稜の杯部をもつ。125は裾部を強く折り曲げている。126は杯底部を粘土円盤で充填している。
- 124・127~132は器台である。124は丹波・但馬地方の影響を受けたもの。128・129・131は小型器台の脚部で、131以外は受け部底部に粘土塊を充填している。130は中空である。
- 134は直口壺の口縁部。135・137は内湾する口縁部に内傾する端部をもつ布留式甕の特徴を有する。138は僅かな平底である。
- 140は須恵器壺である。胴部中程を沈線で区画し、その上部にヘラ描き波状文を施す。
- 141は直口壺である。比較的精良な胎土を用い、胴部下半にはスガが付着している。
- 142~146は甕である。142・143は布留式甕の系譜を引くものである。143の内面には噴水線が残る。144・145は長胴甕かその傾向が強い一群である。146・147は長胴甕である。
- 148~158は高杯である。149・150は有稜の杯部を、151~154は椀形の杯部を有する。杯部と脚部の接合方法が判るものは全て挿入付加法を採用している。152は杯部外面に、接合時に生じたと思われる捻りの痕跡がみえる。153は杯部内面にスガが付着しており、外面には被熱に伴うと思われるタール状の付着物が残る。

159は杯である。口縁部にやや強いヨコナデを施すことで、内傾させている。底部は平底である。胎土に含まれる鉱物粒については在地のものとはほとんど変わらないものの、発色等においてやや違和感を覚える。

161は多孔式甗である。丸底状の底部に蒸気孔が4孔残存している。外面は縦方向のごく微細なハケメを切る細かい沈線を引く。把手は牛角形で、口縁部付近の外面に接触黒斑がみえる。胎土に含まれる鉱物粒については在地のものとは違いはみられないが、発色と焼成によると思われる質感が在地の土師器とは一線を画すように思われる。なお、本資料については、市之郷遺跡出土軟質系土器（山田2005）とともに土師器直口壺（141）とSR4出土の土師器長胴甗（236・写真図版47）の胎土分析を行なっている（白石・福井・山田2012）。その結果、目視によって認識する器形や製作技法、質感の印象といった差異は、蛍光X線分析や実体顕微鏡観察においては特段の偏差としては現れなかった。162・163は甗の把手、164は手捏ね土器である。

W1は槽で、全長約45cm、残存する身幅約17cm、深さは約7cmを測る。内面の立ち上がりはゆるやかにカーブを描く。底部外面もやや丸味を帯び、脚台が2つ残存している。使用木材はヒノキ科アスナロ属である（図13）。

W2・W3は一方に加工痕のある棒状製品である。径は約2cm、残存長はW2が約11m、W3が約12mを測る。W2の加工痕は先端を一回り細く削り込み、W3については紐状のものを引っ掛ける、もしくは括りつけるために削り込んであるようにも見える。W2についてはホゾ穴に差し込む格子窓等の縦木の、W3については反りこそないものの弓の可能性をそれぞれ考えたが、具体的な機能については不明と言わざるをえない。これらの使用木材はスギ科スギ属スギである。

W4は板状の部材で、残存幅約13cm、残存長約93cm、厚さ約2cmを測る。並行しない位置に3cm×6cmの貫穴が4箇所残存している。部位は不明だが、建築部材の可能性を指摘しておきたい。使用木材はW1と同じである。

時期 少量の弥生土器を除く出土遺物の多くが下層（滞水時の埋土）からの出土であった。既に見てきたように、古式土師器や古墳時代前期の土師器、同中期の須恵器・土師器がみられることから、古墳時代初頭に流下し始め、古墳時代中期に埋没したと考えられる。

SR4（図版39～41・75、写真図版14）

検出状況 先述のSR3と並行して流下する自然流路である。

形状・規模 上端の最大幅は約7mにも及ぶが、流路本体としては幅約3m、深さ約0.9mを測り、断面逆台形を呈する。この本流に対する伏流のように幅約1m、深さ約30cmの細い小溝状の流路も並走している。延長約38mを調査した。

堆積状況 埋没の過程はSR3と酷似しており、4層に大別できた。

上層 本流路がほぼ埋没した後の湿地状堆積。遺物は少なく、中世土器の細片が出土した。

中層 本流路の最終埋土。水流を伴うため、細分層可能。古墳時代後期の土器が出土した。

下層 本流路の滞水時に繁茂していた植物等有機質の腐食により黒褐色を呈する。多くの古墳時代後期の土器、木製品とともに植物遺存体が出土した。

最下層 本流路の最初期の埋土。粗砂や小円礫が主体。僅かに弥生土器が出土した。

出土遺物 遺物の出土量はコンテナ約19箱分と、SR3よりもかなり少ない。出土遺物は、古墳時代の須恵器（165～169）、土師器（170～179）、木製品（W5・W6）である。

165・166は壺である。165は頸部の突帯を境にクシ描き波状文を2段、166は1段施している。167は甕である。胴部内外面にタタキが残る。168は杯蓋で、169よりはやや新相を呈する。169は口縁部端面がごく僅かに内傾している。168よりもやや古層を呈する。

170・171は直口壺である。170は胴部下半にごく微細なタタキの圧痕が残る。171は胎土も比較的精良で稜線も明瞭なため、170よりもシャープな印象を受ける。両者の外面にはススが付着している。

172は甕の底部である。内面に炭化穀粒痕がみえる。

173は台付の甕である。胴部下半にはススが付着しており、底部内面には炭化穀粒痕がみえる(写真図版46)。175はやや長胴傾向の強い甕である。胴部は縦からやや左上がり方向のハケメ、内面は1次調整のケズリが残る。外面のススは胴部中程まで付着している。部分的ではあるが、外面の円形スス酸化と内面のドーナツ状コゲの位置が対応していることから、炊飯の蒸らし段階における側面加熱の痕跡である可能性がある(小林編2011)。ただ明確な吹きこぼれ痕跡は確認できなかった。

174は高杯である。器壁の風化が著しいために外面の調整は不明で、脚部内面には反時計回りのケズリがみえる。

176・177は瓶の把手である。

178は脚付きの甕である。頸部と脚部は折損しているが、胴部は完存で上半に円孔がある。鉾物粒も少なく比較的精良な胎土をもち、焼成は良好でやや堅緻であることから須恵器の焼成不良品ではなく、当初から土師質焼成を狙ったものであると判断した。179は杯である。器壁が粗く調整等は不明である。なお、178と隣接して長胴甕(236・写真図版47)も出土している。口径22.1cm、底径6.7cm、器高42.7cmを測る。先述のように141・161とともに胎土分析を行なっている(白石・福井・山田2012)。

180は土錘である。断面楕円形で、上端に紐通しのためと思われる円孔がある。

W5は不明木製品である。残存長約36cm、厚さは1.0~1.5cmを測る。中央付近にある円形の貫穴を中心に反転すると、幅は約18cmと復元できる。その貫穴を円形の柄孔とすると、直柄平楸の身である可能性も指摘できる。使用木材はブナ科コナラ属アカガシ亜属である。

W6は残存長約12m、残存幅約12cm、厚さ約6cmのやや不整形な板材である。7×5cm程度の貫穴が1孔残る。使用木材はヒノキ科アスナロ属である。

時期 遺物量こそ少ないが、先述のSR3とはほぼ同時期と考えて差し支えなさそうである。しかし、SR3よりも須恵器の出土量が僅かではあるが多い点、出土須恵器のなかにやや新相を呈するものがある点から、SR3とはほぼ同時期かやや下る時期(TK43段階)としておきたい。

SR5 (図版42、写真図版14)

検出状況 調査地の北部、20次調査で検出した。竹の前遺跡SR2と連続する自然流路である。詳細は、竹の前遺跡SR2に譲る。

SR6 (図版42・76~78、写真図版14)

検出状況 調査地の北西部、20~22次調査で検出した。概ね東から西方向へと流下する自然流路である。

形状・規模 上端の最大幅は約6mにも及ぶが、流路本体としては幅約3m、深さ約1m、断面逆台形を呈する。

- 堆積状況** 埋土は、4層に大別することができた。以下に各土層についてふれておきたい。
- 上層 本流路がほぼ埋没した後の湿地状堆積。遺物は少なく、中世土器の細片が出土した。
- 中層 本流路の最終埋土。水流を伴うため、細分層可能。古墳時代後期の土器が出土した。
- 下層 本流路の滞水時に繁茂していた植物等有機質の腐食により黒褐色を呈する。多くの古墳時代後期の土器とともに木製品が出土した。
- 最下層 本流路の最初期の埋土。粗砂や小円礫が主体。弥生土器に混じって縄文土器等が出土した。

出土遺物 遺物はコンテナP18で約70箱分出土した。出土遺物は、古墳時代の須恵器（181～195）・土師器（196～230）、縄文土器（231～235）、木製品（W7～W11）である。

181～184は甕である。181は径約40cm、182は24cmと大型品である。181は尖帯で区画した中にクシ描き波状文と円形浮文を配置する。183・184についても施文原理・方法は同様である。

185～190は蓋杯である。相対的な新旧関係が存在する。

191は無蓋高杯である。

192は把手付鉢である。把手と底部を欠く。193は把手付杯である。この他にももう1個体（237・写真図版47）出土している。

194は器台である。受部と脚部で直接接しなかったものの、出土位置や胎土、焼成等から同一個体と判断し図上で復元した。195は裝飾付壺である。脚部上端の不整美な波状文が特徴的である。

196～198は直口壺である。196は小型ではあるが、布留式甕の特徴を有する。

199～203は甕である。199・200・202はゆるやかに「く」の字に折れる口縁部を、203はほぼ直口する口縁部をそれぞれ有する。204は長胴甕、もしくは長胴傾向の強い甕である。

205～220は高杯である。205～213は有稜の杯部を、215・216は椀形の杯部を、219・220は鉢形の杯部をそれぞれ有する。207はある程度乾燥させた脚部を杯部に挿入し接合している。その際、脚頂部に刻目を入れることで、接着面積を少しでも広く取ろうとする工夫が看取できる。

221・222は平底鉢である。軟質系土器の系譜を引くものであるが、外面調整は既にハケメ化しており、在地化をほぼ達成している。

223は三角形の把手である。224はイダゴ壺である。

225～227は軟質系土器である。器種は不明であるが、斜格子タタキがみえる。

228～230は多孔式甕である。

231～235は縄文土器である。231は口縁部が波状を呈し、筒状突起を有する。本資料の最大の特徴は磨消縄文手法（充填縄文）によって描かれる曲線的な文様である。口縁部区画文の下にJ字文が取り付き、その先端を巻き上げることで渦文となっている。232・233は波状を呈する口縁部で、沈線がみえる。いずれも中津式に比定できる^(註2)。

W7は曲柄平鋸CⅡ式に当たる（奈良国立文化財研究所編1993）。使用木材はブナ科コナラ属アカガシ亜属である。

W8は本流路東端付近で出土した。詳細は不明であるが、地山起源の盛土によって突き固められたと思われる小マウンドに打ち込んであったという。調査担当者の所見では橋脚とされていた。もしそうであれば、本調査地点から南西約500mに位置する長越遺跡で検出された橋脚との関連

も含めてより詳細な検討が必要であろう。使用木材はマキ科マキ属イヌマキである。

W9～W11は杭である。いずれも先端を鋭利に加工している。使用木材はヒノキ科アスナロ属である。

時期 出土遺物の様相から、概ね古墳時代後期（TK209段階）に埋没したと考えられる。

SR7（図版43・44、写真図版15）

検出状況 調査地の中央部、19次調査で検出した。概ね東から南西方向へと流下する自然流路、もしくは谷部である。

形状・規模 幅は確認できた部分で約28mにも及ぶ部分もあるが、調査区の制約上、全体の規模・形状について確認することができなかった。

堆積状況 埋土は、少なくとも4層に大別することができたが、河床については確認できなかった。
上層 本流路がほぼ埋没した後の湿地状堆積。古墳時代後期の土器が多く出土。
中層 本流路の埋土。湿地状堆積。弥生土器が散見される。
下層 本流路の埋土。湿地状堆積。部分的な調査にとまったためか、遺物は出土しなかった。

出土遺物 遺物はコンテナP18で約60箱分出土した。出土遺物のほとんどは古墳時代後期の須恵器壺・甕・蓋杯・高杯・器台・甕・横瓶・偏壺・捏鉢など（MT15・TK10段階）が占めていたが、その他に小片ではあったが初期須恵器の壺や把手付鉢、樽形甕等も散見できた。これらの遺物は、微高地の落ち際に大量に出土した。そのほとんどは水流による摩擦を受けていないので、湿地状の様相を呈していた際に、ごく近辺にある居住域から投棄されたものと考えられる。また、このうちの内面に漆が付着している杯身も1点（写真図版51）出土している（図31）。

時期 出土遺物の様相から、概ね古墳時代後期（MT15・TK10段階）に埋没したと考えられる。

SR8（図版44～47、写真図版15・16）

検出状況 調査地の中央部、19・22次調査で検出した。SR7の南西側に位置する。概ね北東から南西方向へと流下する自然流路、もしくは谷部である。

形状・規模 幅は概ね45mを測るが、調査区の制約上、全体の規模・形状について確認することができなかった。

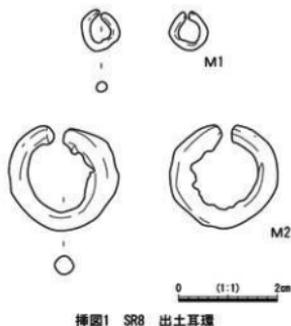
堆積状況 埋土は、少なくとも3層に大別することができたが、河床については必ずしも確認できなかった。
上層 本流路がほぼ埋没した後の湿地状堆積。古墳時代後期の土器が多く出土した。
中層 本流路の埋土。湿地状堆積。弥生土器が散見される。
下層 本流路の埋土。湿地状堆積。部分的な調査にとまったためか、遺物は出土しなかった。

出土遺物 遺物はコンテナP18で約60箱分出土した。出土遺物のほとんどは古墳時代後期の須恵器壺・甕・蓋杯・高杯・器台・甕、土師器甕・高杯・角付杯等（MT15・TK10段階）であった。これらの遺物は、微高地の落ち際の滞水性堆積（図版47-2・3）や水流を伴う堆積土中（図版46・47-1）から出土した。そのほとんどは水流による摩擦を受けていないので、ごく近辺にある居住域から投棄されたものと考えられる。また、SR8左岸側で検出した土器群3の遺物を取り上げ中に耳環が1点出土した（M2・挿図1）。転石に貼り付いていたため、詳細な出土位置については不明と言わざるをえない。そして、その出土地点周辺の排土を篩にかけたところ、もう一点が出土した（M1・挿図1）。両者についてX線撮影を行ったところ内部に腐食はみられず、

また蛍光X線分析を実施したところ、成分のピークがM2については銅に、M1については錫と銀にそれぞれあることから、前者は銅地、後者は錫地に鍍銀を施していること判った(註4)。

SR8右岸の滞水性の堆積土中からは土器群(図版47・2・3)とともに滑石製勾玉が出土した。これらのほか、内面に漆が付着した須恵器杯蓋・杯身も出土している。

時期 出土遺物の様相から、概ね古墳時代後期(MT15・TK10段階)に埋没したと考えられる。



SR9 (図版48・49、写真図版17)

検出状況 調査地の東端部、24次調査で検出した。

形状・規模 幅6.7m、検出面からの深さ80cmを測る。SR11と同一遺構になる可能性もある。

出土遺物 上層から内面に放射状の暗文のみられる土師器杯Cのほか須恵器杯蓋・高杯等が出土した。

時期 古墳時代中期から後期の遺物を多く含むが、最終的に埋没したのは7世紀以降と考えられる。

SR10 (図版48・49、写真図版17)

検出状況 SR9の西側で検出した。

形状・規模 幅5.4m、検出面からの深さ60cmを測る。調査区内を東から北に振りながら南西に抜けている。

出土遺物 上層から土師器埴の把手、須恵器蓋杯・高杯等が出土した。中層からは須恵器・土師器細片、下層からは須恵器細片が僅かに出土した。出土量的には上層が最も多い。

時期 古墳時代中期から後期の遺物を多く含むが、最終的に埋没したのは7～8世紀代と考えられる。

SR11 (図版48・49、写真図版17)

検出状況 SR10の南側で検出した。

形状・規模 幅4.6m、検出面からの深さ90cmを測る。調査区内を北東から南西に抜けている。SR9と同一遺構になる可能性もある。

出土遺物 上層から土師器埴の把手、須恵器杯蓋・杯身等が出土した。中層からは須恵器杯蓋・杯身等、下層からは須恵器・弥生土器壺が少量出土した。出土量的には上層から中層が多い。

時期 古墳時代中期から後期の遺物を多く含むが、最終的に埋没したのは7～8世紀代と考えられる。

SR12 (図版44・45、写真図版17)

検出状況 調査地の中央部、19次調査で検出した。

形状・規模 幅6m以上、検出面からの深さは55cm以上を測り、調査区内を北東から南西に抜けている。

時期 出土遺物から古墳時代後期と考えられる。

註1 木製品の固化、保存処理、樹種特定については株式会社吉田生物研究所に委託した。以下同じ。

註2 縄文土器については京都大学文学部 千葉豊氏にご教示を得た。

註3 SR7・8から出土した漆付着須恵器については株式会社パリオサーベイに分析を委託し、その結果を後述する。

註4 本資料のX線撮影、蛍光X線分析については奈良大学文学部文化財学科 魚島純一氏にご高配を賜り、また資料の評価については同科 豊島直博氏にご教示をいただいた。

第4節 奈良・平安時代以降の遺構・遺物

1. 奈良・平安時代以降の概要 (図版50)

検出遺構 遺構の種類としては、掘立柱建物跡17棟 (SB1～17)、柵3条 (SA1～3)、溝4条 (SD2～5)、土坑4基 (SK5～8) などがある。一部は奈良時代以前に遡る遺構もあるが、この章で扱うこととする。当該期の遺構は一定の範囲 (便宜的にA～D地区と呼称する) にまとまって検出されたものと、単独のものがあり、先に前者を地区別に記述した上で後者についても述べることとする (図版50)。

A地区ではSB1・2、B地区ではSB4～8、C地区ではSB10～12、D地区ではSB13～17からなる掘立柱建物群 (一部に主軸方位が異方向のものを含む) が存在し、ある時期に建物群として集落を構成していたと考えられる。当該期の遺構を検討する前提条件は第3章第3節に記述したため、ここでは割愛する。

時期比定 なお、時期比定の根拠となる土器編年が当地域において確立していない現状で、須恵器についても神出・魚住から加古川流域にわたる、いわゆる「東播系」須恵器の編年と相生・龍野古窯跡群の様相が異なることが知られており、古代以降の播磨国内では地域的な特徴が顕在化するとされている (図11)。しかし、実際の消費地遺跡での分析作業において、例えば須恵器碗の一つをとってみても、形態など肉眼観察によって東播系か、相生・龍野古窯跡群か、さらには備前 (伊部) 産、美作 (勝間田) 産などその全てを識別することは極めて困難である。このため、ここでは須恵器碗の形態変化の大きな流れは地域間を越えて共通するとみなした上で、相生・龍野古窯跡群の編年 (図2) を軸に検討を進めることとする (図31)。

2. A地区の遺構・遺物

掘立柱建物跡

SB1 (図版51・79、写真図版18)

検出状況 22次調査の調査区東半の中央部で検出した。SB2の西側に位置する。

形状・規模 側柱建物で東西2間分×南北1間分を検出したが、北側及び東側の延長部分は調査区外へ続くと思定される。検出した範囲の規模は東西5.36m、南北3.64mを測り、面積は19.51㎡である。主軸方位はN-77.5°-Eである。個々の柱間の芯々距離は、西辺が2.17m、南辺が2.12m、2.02mを測る。柱穴の掘方は径0.48～0.62mの隅丸方形を呈し、柱穴は径0.18～0.31mであった。柱穴の断面から立柱に際し幾重にも土砂を突き固めたことが観察された。

出土遺物 P1掘方から須恵器壺 (242) が出土した。

時期 出土遺物から7～8世紀代と考えられる。

SB2 (図版51・79、写真図版18)

検出状況 22次調査の調査区東半の中央部で検出した。SH9・SH10と重複する。SB1の東側に位置する。

形状・規模 側柱建物で東西 (桁行) 3間分×南北 (梁間) 1間を検出したが、西側の延長部分は調査区外へ続くと思定される。検出した範囲の規模は東西 (桁行) 7.94m、南北 (梁間) 3.82mを測り、面積は30.33㎡である。主軸方位はN-68°-Eである。個々の柱間の芯々距離は、北辺 (桁行) が東端から2.23m、1.86m、2.14m、東辺 (梁間) が3.82mを測る。柱穴の掘方

は径0.54~0.77mの隅丸方形を呈し、柱穴は径0.20~0.26mであった。柱穴の断面から立柱に際し幾重にも土砂を突き固めたことが観察された。

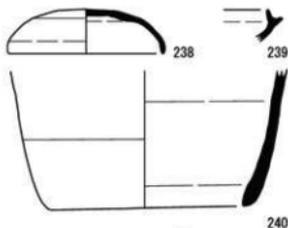
出土遺物 P2から土師器甕(243)、須恵器杯A(244)が出土した。243は口径20.5cmと小型の甕で、体部の外面はタテハケ、内面は縦方向のケズリを施す。口縁部は「く」の字に屈曲しヨコナデにより仕上げている。244は内面が回転ナデ、外面は丁寧な回転ケズリで仕上げている。

時期 出土遺物から7世紀前半から8世紀代前半頃と考えられる。

土坑

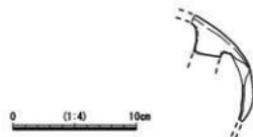
SK5 (図版51、写真図版18)

検出状況 SB1のP1の東側で検出したが切り合わない。
形状・規模 長軸1.2m以上、短軸44cm、検出面からの深さ9cmを測る。溝状を呈し、北端は後出の遺構に切られる。断面は台形状を呈す。
出土遺物 須恵器杯蓋(238)・杯身(239)・甕(240)が出土した(挿図2)。
時期 遺物から6世紀後半から7世紀前半頃と考えられる。



SK6 (図版51)

検出状況 SB1の南側で検出した。
形状・規模 長軸1.3m、短軸88cm、検出面からの深さ55cmを測る。平面形は楕円形、断面はU字形を呈す。堆積状況から幾度となく掘り返されたことが判るが、ある時期には開口していたとみられる。
出土遺物 遺物は出土しなかった。
時期 時期を比定できる遺物は出土しなかったため不明である。



挿図2 SK5 出土土器

3. B地区の遺構・遺物 (図版52・53、写真図版19)

掘立柱建物跡

SB3 (図版54、写真図版19)

検出状況 SD4-3に切られる。
形状・規模 側柱建物で東西(桁行)2間分×南北(梁間)2間を検出したが、西側の延長部分は調査区外へ続くと思定される。検出した範囲の規模は東西(桁行)4.87m、南北(梁間)3.80m(12尺5寸)を測り、面積は18.51㎡である。主軸方位はN-54°-Wである。個々の柱間の芯々距離は、北辺(桁行)が西端から1.90m(6尺3寸)、2.08m(6尺9寸)、南辺(桁行)が2.08m(6尺9寸)、東辺(梁間)が北端から1.86m(6尺1寸)、1.94m(6尺4寸)を測る。柱穴の掘方は径0.41~0.5mの隅丸方形を呈し、柱穴は径0.22~0.33mであった。埋土は黒褐色を呈す。柱穴の断面から立柱に際し幾重にも土砂を突き固めたことが観察された。
出土遺物 柱穴から遺物は出土しなかった。
時期 遺物は出土しなかったが、主軸方位が条里地割と一致するSD4-3に切られることや、掘方の形状及び埋土から条里地割の成立以前と推測される。

SB4 (図版54、写真図版19)

検出状況 SD4-2の南側で検出した。

形状・規模 側柱建物で南北(桁行)3間×東西(梁間)1間分を検出したが、東側の延長部分は調査区外へ続くと想定される。検出した範囲の規模は東西(桁行)2.67m、南北(梁間)4.97m(16尺4寸)を測り、面積は13.27㎡である。主軸方位はN-14.5°-Wである。個々の柱間の芯々距離は、北辺(梁間)が1.68m(5尺5寸)、南辺(梁間)が1.90m(6尺3寸)、西辺(桁行)が北端から1.74m(5尺7寸)、1.62m(5尺3寸)、1.61m(5尺3寸)を測る。柱穴の掘方は径0.47~0.60mの隅丸方形を呈し、柱穴は径0.16~0.28mであった。埋土は黒褐色を呈す。

出土遺物 柱穴から遺物は出土しなかった。

時期 掘方の形状及び埋土がSB3と酷似することから条里地割の成立以前と推測される。

SB5 (図版54)

検出状況 SD4-1の西側で検出しSK8を切る。

形状・規模 側柱建物で東西(桁行)2間分×南北(梁間)3間分を検出したが、西側の延長部分は調査区外へ続くと想定される。検出した範囲の規模は、東西6.35m、南北6.36m(21尺)を測り、面積は40.39㎡である。主軸方位はN-17.5°-Eである。個々の柱間の芯々距離は、東辺(梁間)が北端から2.00m(6尺6寸)、2.21m(7尺3寸)、2.15m(7尺1寸)、北辺(桁行)が2.73m(9尺)、南辺(桁行)が東端から2.48m(8尺2寸)、1.82m(6尺)を測る。柱穴の掘方は径0.19~0.29mの円形を呈し、柱穴は径0.1~0.2mであった。

出土遺物 柱穴から遺物は出土しなかった。

時期 時期を比定できる遺物は出土しなかったが、後述するSK8に後出することから10~11世紀前半頃以降と考えられる。

SB6 (図版55、写真図版19)

検出状況 SD4-1の東側で検出した。SB7とは建替えの先後関係があり、一部の柱穴がSB7に切られるためSB6が先出する。

形状・規模 南北(桁行)4間×東西(梁間)2間の総柱建物である。規模は、南北(桁行)6.82m(22尺5寸)、東西(梁間)5.15m(17尺)を測り、面積は35.12㎡である。主軸方位はN-19.5°-Eである。個々の柱間の芯々距離は、東・西辺(桁行)が北端から1.66m(5尺5寸)、1.73m(5尺7寸)、1.73m(5尺7寸)、1.70m(5尺6寸)、南・北辺(梁間)が西端から2.575m(8尺5寸)、2.575m(8尺5寸)を測る。柱穴の掘方は径0.20~0.33mの円形を呈し、柱穴は径0.12~0.19mであった。

出土遺物 柱穴から遺物は出土しなかった。

時期 時期を比定できる遺物は出土しなかったが、主軸方位が後述するSD4-1と平行することから概ね12~13世紀代と考えられる。

SB7 (図版55・79、写真図版19)

検出状況 SD4-1の東側で検出した。SB6とは建替えの先後関係があり、一部の柱穴がSB6を切るためSB7が後出する。

形状・規模 南北(桁行)4間×東西(梁間)2間の総柱建物である。規模は、南北(桁行)6.51m(21尺5寸)、東西(梁間)4.42m(14尺6寸)を測り、面積は28.77㎡である。主軸方位は

N-17°-Eである。個々の柱間の芯々距離は、東・西辺（桁行）が北端から1.61m（5尺3寸）、1.755m（5尺8寸）、1.755m（5尺8寸）、1.39m（4尺6寸）、南・北辺（梁間）が西端から2.15m（7尺1寸）、2.27m（7尺5寸）を測る。柱穴の掘方は径0.20~0.28mの円形を呈し、柱穴は径0.09~0.19mであった。

- 出土遺物** P55から手捏ねの土師器皿（245）が出土した。245は口径8.4cm、器高1.4cmを測る。
時期 時期を比定できるほどの遺物は出土しなかったが、SB6の建替えとみられることから概ね12~13世紀代と考えられる。

SB8（図版55、写真図版19）

- 検出状況** SD4-1の東側で検出した。
形状・規模 側柱建物で東西（桁行）2間分×南北（梁間）1間を検出したが、東側の延長部分は調査区外へ続くと想定される。検出した範囲の規模は、東西（桁行）4.06m、南北（梁間）1.97m（6尺5寸）を測り、面積は8.00㎡である。主軸方位はN-71.5°-Wである。個々の柱間の芯々距離は、北辺（桁行）が西端から1.78m（5尺9寸）、2.12m（7尺）、南辺（桁行）が西端から1.78m（5尺9寸）、1.36m（4尺5寸）、西辺（梁間）が1.97m（6尺5寸）を測る。柱穴の掘方は径0.20~0.41mの円形を呈し、柱穴は径0.14~0.18mであった。
出土遺物 柱穴から遺物は出土しなかった。
時期 時期を比定できる遺物は出土しなかったが、主軸方位がSB6・7の直交方向と一致することからこれらのどちらかの建物と併存していた可能性が高く、12~13世紀代と推測される。

SB9（図版55）

- 検出状況** SB6・7の東側で検出した。
形状・規模 南北3間分を検出したが、東側の延長部分が調査区外へ続くと想定される。検出した範囲の規模は、南北5.15m（17尺）、東西1.20mを測り、面積は6.18㎡である。主軸方位はN-22°-Eである。個々の柱間の芯々距離は、北端から1.88m（6尺2寸）、1.82m（6尺）、1.45m（4尺8寸）を測る。柱穴の掘方は径0.22~0.31mの円形を呈し、柱穴は径0.13~0.16mであった。
出土遺物 柱穴から遺物は出土しなかった。
時期 時期を比定できる遺物は出土しなかった。

柵

SA1（図版54・79）

- 検出状況** SD4-1に切られる。
形状・規模 南北3間で全長6.48m（21尺4寸）である。主軸方位はN-13.5°-Eである。個々の柱間の芯々距離は北端から2.18m（7尺2寸）、2.18m（7尺2寸）、2.12m（7尺）を測る。柱穴の掘方は径0.2~0.3mの円形を呈し、柱穴は径0.12~0.16mであった。北端の柱穴には根石が置かれていた。
出土遺物 P89から須恵器椀（247）が出土した。247は平高台から直線的に立ち上がり、見込み部に凹みがある。底部は糸切りである。10~11世紀前半頃の個体とみられる。
時期 時期比定には困難をとまうが、SD4-1に先行することからも10~11世紀前半頃と考えられる。

SA2（図版54）

- 検出状況** SK8に後出する。
形状・規模 南北3間で全長6.57m（21尺7寸）である。主軸方位はN-16°-Eである。個々の柱間の

芯々距離は北端から2.12m（7尺）、2.39m（7尺9寸）、2.06m（6尺8寸）を測る。柱穴の掘方は径0.19～0.25mの円形を呈し、柱穴は径0.09～0.15mであった。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

時期 時期を比定できる遺物は出土しなかったが、SK 8に後出することから、10～11世紀後半頃と考えられる。

SA3（図版55）

検出状況 SB6・7とSB9との間で検出した。

形状・規模 南北3間で全長5.15m（17尺）である。主軸方位はN-19.5°-Eである。個々の柱間の芯々距離は北端から1.88m（6尺2寸）、1.73m（5尺7寸）、1.54m（5尺1寸）を測る。柱穴の掘方は径0.18～0.21mの円形を呈し、柱穴は径0.10～0.13mであった。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

時期 時期を比定できる遺物は出土しなかったが、主軸方位がSB6に平行することから概ね12～13世紀代と考えられる。

溝

SD4（図版53・80、写真図版19・20）

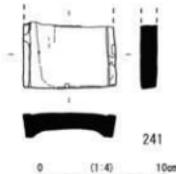
検出状況 20次・22次の調査区に跨って検出した。

形状・規模 南北方向のSD4-1は南北45.5m、幅72cm、検出面からの深さ28cmを測る。その南端から東西に分岐する溝のうち、東に延びるSD4-2は、幅はSD4-1と変わらないが、深さを8cmに減じ調査区外へ続いている。西に分岐するSD4-3は、深さはSD4-2と変わらないが、幅を25～30cmに減じ調査区外へ続いている。一方、北端は22次調査の西壁からさらに調査区外に続くようであるが、東側に直交方向にSD4-4が延び、調査区外に続くと思われる。埋土の状態から一定の期間機能していたとみられる。主軸方位はN-20°～20.5°-Eである。

出土遺物 土師器皿（270）・埴（277）・羽釜（278）、須恵器椀（271～274）、瓦器椀（275）・皿（276）・羽釜（279）のほか、須恵器製の陶硯（241・挿図3）が出土した。遺物の多くはB地区内から出土した。

270は手捏ねである。口径11.2cm、器高2.5cmを測る。271は見込み部に凹みもち、底部はわずかに平高台を成す程度である。底部は糸切りである。11世紀後半頃とみられる。272は高台側面をへら調整し、底・体部の境界が明瞭である。底径4.4cmと小さな底部から大きく横に膨らんで立ち上がる。底部は糸切りである。276は口径9.2cm、器高1.5cmを測る。器表が全体的に摩滅していたが、口縁部内面に僅かにミガキが確認される。277は口径32.0cmで、直線的な体部と外方向に屈曲する受口状の口縁をもつ、いわゆる鉄鍋形タイプ（長谷川2007）である。12世紀代の京都周辺産の瓦器埴を模倣したものであろうか。278は口径29.2cmで、内傾直立する口縁部もち、細長い鐔をめぐらす。内面は粗いヨコハケで仕上げる（図4）。279は口径25.8cmで、内傾する口縁部を有し球形の体部の肩部に短い鐔をめぐらす。241は両面を陸部に使用している。SD4-2・SD4-3から出土した。

時期 出土遺物は11世紀後半頃のものを含むが、一定の期間機能した後、最終的に13世紀代に入り完全に埋まったと考えられる。



挿図3 SD4 出土陶硯

土坑

SK7 (図版53・80)

検出状況 SD4-1の西側で検出した。

形状・規模 長軸2.0m、短軸1.5m、検出面からの深さ10cmを測る。平面は楕円形で断面は浅い皿状を呈す。

出土遺物 須恵器碗(280)・壺(281)が出土した。280はわずかに平高台を留めており底部は糸切りである。11世紀後半頃とみられる。281は肩部に断面台形の突帯を2条めぐらす。相生市緑ヶ丘窯の製品と思われ、11世紀後半までは降らない個体とみられる。

時期 出土遺物の下限は11世紀後半頃と考えられる。

SK8 (図版53・80)

検出状況 SD4-1の西側で検出した。

形状・規模 長径3.2m、検出面からの深さ10cmを測る。平面は不定形で断面は浅い皿状を呈す。

出土遺物 底部へら切りの土師器皿(282)・甕(286)、須恵器碗(283-285)、が出土した。282は口径9.6cm、器高1.6cmを測る。283・284は底部から丸味をもって立ち上がり、口縁部の外反がほとんどみられない。285は高台側面の調整が省略されており10-11世紀前半頃の可能性がある。286は口径28.7cmで、やや長胴の胴部から頸部でありあまり屈曲せずに口縁部にいたる端部に面をもつ。胴部外面は上半がタテハケ、中位から下は不定方向のハケメがみられる。内面上半は概ねヨコハケである。7-8世紀代まで遡る可能性もある個体である。

時期 出土遺物に時期幅をもつが、下限は10-11世紀前半頃と考えられる。

ピット (図版53・79)

P124から土師器羽釜(269)が出土した。胎土に砂粒を多く含む。いわゆる摂津C型の羽釜で、淀川流域では10世紀代に盛行し11世紀代中頃以降に姿を消すとされる(福島2007・鏗柄1995)。

4. C地区の遺構・遺物 (図版52、写真図版20)

掘立柱建物跡

SB10 (図版56、写真図版20)

検出状況 22次調査の調査区の北部で検出した。

形状・規模 東西3間×南北4間の総柱建物に復元できるが、北端と南端の柱筋の柱穴は他の柱穴より掘り込みが浅く庇になる可能性がある。規模は、東西7.82-7.83m(25尺8寸)、南北8.93m(29尺5寸)を測り、面積は69.92㎡である。主軸方位はN-22°-Eである。庇の可能性がある両端2間を除くと南北4.69m(15尺5寸)が身舎の梁間となり、4間(桁行)×2間(梁間)で身舎の面積は36.72㎡となる。個々の柱間の芯々距離は、西辺が北端から2.27m(7尺5寸)、2.30m(7尺6寸)、2.39m(7尺9寸)、1.97m(6尺5寸)、身舎北辺(桁行)が西端から2.52m(8尺3寸)、2.73m(9尺)2.58m(8尺5寸)、身舎南辺(桁行)が西端から2.42m(8尺)、2.82m(9尺3寸)、2.58m(8尺5寸)、東辺の2間分は北から2.36m(7尺8寸)、2.33m(7尺7寸)を測る。柱穴の掘方は径0.20-0.30mの円形を呈し、柱穴は径0.1-0.17mであった。

出土遺物 柱穴から遺物は出土しなかった。

時期 遺物が出土しなかったため断定できないが、柱穴の形状や主軸方位が条里地割と近似することから、その成立後の可能性があると考えられる。

SB11 (図版56・79、写真図版20)

- 検出状況** SB10の南側で検出した。
- 形状・規模** 南北(桁行)2間×東西(梁間)1間の側柱建物である。規模は、南北(桁行)4.24m(14尺)、東西(梁間)2.21m(7尺3寸)を測り、面積は9.37㎡である。妻側(梁間)の北辺には半間の位置に柱穴を設けているが、南辺にはみられないため、南側が出入口であったと考えられる。主軸方位はN-20.5°-Eである。個々の柱間の芯々距離は、東・西辺(桁行)が北端から2.42m(8尺)、1.82m(6尺)を測る。柱穴の掘方は径0.21~0.29mの円形を呈す。
- 出土遺物** P13から須恵器椀(246)が出土した。246は高台側面のナデ調整により底・体部の境界が不明瞭である。見込みに凹みをもつ。底部は糸切りである。10~11世紀代の所産とみられる。
- 時期** 時期を比定できるほどの遺物が出土しなかったため断定できないが、柱穴の形状や主軸方位が条里地割と近似することから、その成立後の可能性があると推測される。

SB12 (図版56)

- 検出状況** SB11の東側で検出した。
- 形状・規模** 南北2間分を検出したが、南側及び東側の延長部分が調査区外へ続くと思定される。検出した範囲の規模は、南北3.76m、東西0.90mを測り、面積は3.38㎡である。主軸方位はN-23°-Eである。個々の柱間の芯々距離は、北端から1.70m(5尺6寸)、1.55m(5尺1寸)を測る。柱穴の掘方は径0.29~0.31mの円形を呈し、柱穴は径0.12~0.15mであった。
- 出土遺物** 柱穴から遺物は出土しなかった。
- 時期** 遺物が出土しなかったため断定できないが、柱穴の形状や主軸方位が条里地割と近似することから、その成立後の可能性があると推測される。

5. D地区の遺構・遺物 (図版57)

掘立柱建物跡

SB13 (図版58、写真図版21)

- 検出状況** SD3の北側に位置する。
- 形状・規模** 東西(桁行)3間×南北(梁間)2間の側柱建物である。規模は、東西(桁行)5.55m(18尺3寸)、南北(梁間)4.39m(14尺5寸)を測り、面積は24.31㎡である。主軸方位はN-82°-Eで、ほぼ磁北の直交方向と一致する。個々の柱間の芯々距離は、南・北辺(桁行)が西端から2.06m(6尺8寸)、1.70m(5尺6寸)、1.79m(7尺9寸)、東・西辺(梁間)が2.19m(7尺2寸5分)、2.19m(7尺2寸5分)を測り、対応する柱間の芯々距離が一致する。柱穴の掘方は径0.47~0.56mの円形を呈し、柱穴は径0.11~0.15mであった。
- 出土遺物** 柱穴から遺物は出土しなかった。
- 時期** 周囲の条里地割に平行する溝に先行することから、条里地割の成立以前と考えられる。主軸方位は後述するSB14と一致する。

SB14 (図版58、写真図版21)

- 検出状況** SR6の南側に位置する。
- 形状・規模** 周囲に擾乱が多く存在するが、南北(桁行)3間×東西(梁間)2間の側柱建物に復元でき、西面に庇が付随する。身舎の規模は、南北(桁行)6.05m(20尺)、東西(梁間)3.04m(10尺)

を測り、面積は18.39㎡である。庇を含めると面積は27.23㎡である。主軸方位はN-75°-Wで、ほぼ磁北と一致する。個々の柱間の芯々距離は、西辺(桁行)が北端から215m(7尺1寸)、1.95m(6尺4寸5分)、1.95m(6尺4寸5分)で、身舎の北辺(梁間)は東端から1.68m(5尺5寸)、1.36m(4尺5寸)、南辺(梁間)は東端から1.21m(4尺)、1.83(6尺)を測る。庇の部分の1間は1.46m(4尺8寸)である。柱穴の掘方は径0.42~0.60mを呈し、柱穴は径0.17~0.26mであった。

出土遺物 柱穴から遺物は出土しなかった。

時期 主軸方位がSB13と一致する。SB13と同様に条里地割の成立以前と考えられる。

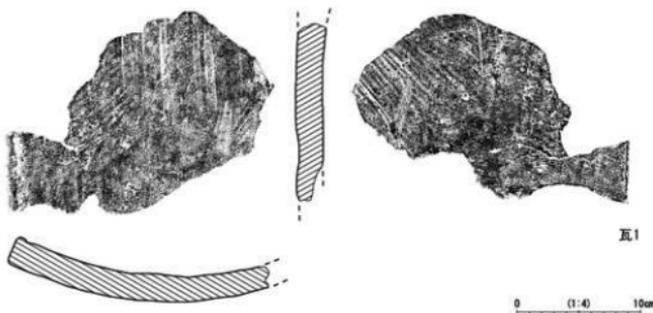
SB15 (図版59・60・79、写真図版21・22)

検出状況 SB16とは建替えの先後関係があり、一部の柱穴がSB16に切られるためSB15が先出する。

形状・規模 総柱建物で東西(桁行)5間×南北(梁間)3間分を検出した。北面には庇が付随する。南側の延長部分は調査区外へ続いている。検出した範囲の身舎の規模は東西(桁行)12.11m(40尺)、南北(梁間)7.08mを測り、面積は85.73㎡である。庇を含めると面積は98.58㎡である。主軸方位はN-69°-Wである。個々の柱間の芯々距離は、北辺(桁行)が西端から2.42m(8尺)、2.15m(7尺1寸)、2.39m(7尺9寸)、2.39m(7尺9寸)、2.76(9尺1寸)、西辺(梁間)が北端から1.06m(3尺5寸)、1.97m(6尺5寸)、2.12m(7尺)、2.12m(7尺)を測り、北端の半間が庇になる。P3、P7、P55、P58には根石又は根固め石が認められた。柱穴の掘方は径0.24~0.39mの円形を呈し、柱穴は径0.11~0.21mであった。

出土遺物 土師器皿(248~254)・甕(255)・塙(256・257)、須恵器椀(258・259)、平瓦(瓦1・挿図4)がある。P3から248・249・257(図版62)、P4から251、P5から250、P6から258、P7から255・256・257(図版62)、P8付近から253、P9から254、P14から252が出土した。

土師器皿は248~252は底部がへら切りで、253・254は手捏ねである。法量は248が口径8.0cm、器高1.6cmと最も小さく、254が口径13.8cm、器高2.2cmと最も大きい。その他は口径8.5~9.0cm、器高は1.1~1.7cmに収まる。255は口径26.6cmで球形の体部をもち、外面に右上がりの平行タタキ痕を残し、頸部直下に強いヨコナデを施すことが特徴的な個体で、体部最大径と口径がほぼ一致する。12世紀代とみられる(長谷川2007) (図5)。256は口径33.0cmで、いわゆる鉄鍋形タイプである(同左)。257は褐灰色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。258は平高台を僅かに残すタイプである。底部は糸切りである。259は口径15.9cm、器高4.3cmを測り、平高台をほとんど



挿図4 SB15P6 出土瓦

消失したタイプで底部は糸切りである。神出・魚住産とみられ、森田編年第1期第2段階（森田1995）にあたる。瓦1は凸型成形台によるもので凸面に平行タキキ痕が残る。凹面には1cm×1cm当りの縦糸・横糸が7本と密な布目圧痕がみられ、それを縦方向のケズリにより大半を消している。焼成は甘く土師質を呈す（挿図4）。

時期 出土遺物から11世紀末から12世紀前半と考えられる。

SB16（図版59・61・79、写真図版21・22）

検出状況 SB15とは建替えの先後関係があり、一部の柱穴がSB15を切るためSB16が後出する。

形状・規模 総柱建物で東西（桁行）5間×南北（梁間）3間分を検出した。西・北・東面の外周の1間分とその内側で柱筋が食い違うため、周囲1間分が縁又は広庇風になる可能性がある。南側の延長部分は調査区外へ続いている。検出した範囲での規模は東西（桁行）12.42m（41尺）、南北（梁間）7.29mを測り、面積は90.61㎡である。主軸方位はN-70°-Wである。個々の柱間の芯々距離は、北辺（桁行）が西端から2.09m（6尺9寸）、2.91m（9尺6寸）、2.58m（7尺9寸）、2.15m（7尺1寸）、2.70m（8尺9寸）、西辺（梁間）が北端から2.19m（7尺2寸）、1.88m（6尺2寸）2.10m（6尺9寸）、東辺（桁行）が2.12m（7尺）で、身舎北辺（桁行）が西端から2.73m（9尺）、2.46m（8尺1寸）、2.39m（7尺9寸）、身舎西辺（梁間）の2間分は2.12m（7尺）、1.97m（6尺5寸）を測る。このことから身舎の桁行の計画寸法は7.58m（25尺）であったと推測される。柱穴の掘方は径0.20～0.40mの円形を呈し、柱穴は径0.09～0.22mであった。

出土遺物 土師器皿（260・261）、須恵器椀（262）、白磁碗（263）がある。P20から263、P29から261、P32から260、P36から262が出土した。

260は底部へら切りで、261は手捏ねである。260は口径8.0cm、器高1.1cm、261は口径8.7cm、器高1.5cmを測る。263は口径15.2cmで、大宰府分類のIV1a類の碗である（横田・森田1978）。

時期 出土遺物及びSB15の建替えであることからしても12世紀前半頃と考えられる。

SB17（図版59・62、写真図版22）

検出状況 SB16の北東部に位置する。

形状・規模 総柱建物で東西3間×南北1間分を検出したが、北側の延長部分は調査区外へ続くと想定される。検出した範囲の規模は東西6.36m、南北3.12mを測り、面積は19.84㎡である。主軸方位はN-70°-Wである。個々の柱間の芯々距離は、南辺が西端から2.12m（7尺）、1.88m（6尺2寸）、2.36m（7尺8寸）で、東辺は2.00m（6尺6寸）を測る。柱穴の掘方は径0.18～0.25mの円形を呈し、柱穴は径0.09mであった。

出土遺物 柱穴から遺物は出土しなかった。

時期 主軸方位がSB16と一致することから12世紀前半頃と考えられる。ただし、SB16とはかなり近接するため、同時期に併存していたかどうかは不明である。

溝

SD3（図版57、写真図版21）

検出状況 SB13の南側で検出した。SB15・16に切られる。

形状・規模 幅0.8m、検出面からの深さ10cmを測る。直線方向に延び東端に向けて次第に浅くなり調査区内で終息する。西側の延長部分は調査区外へ続いている。主軸方位はN-82°-Eで、ほぼ磁北の直交方向と一致する。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

時期 遺物は出土しなかったが、主軸方位がSB13・SB14と一致することから、条里地割の成立以前と考えられる。

ピット (図版57・79)

P12から土師器皿(264)、P18から須恵器椀(266)、P26から白磁皿(267)、P37から土師器皿(268)、P48から土師器甕(265)がそれぞれ出土した。264・268は底部へラ切りである。264は口径8.8cm、器高1.2cmを測る。265はにぶい褐色を呈し胎土に砂粒を多く含む。266は僅かに突出する平高台をもち、底部は糸切りである。11世紀後半から12世紀前半頃とみられる。267は大宰府分類のIV 1a類の皿である(横田・森田1978)。

6. その他の遺構

溝

SD2 (図版32、写真図版10)

検出状況 SH3～6の東端で検出し、これらの遺構を全て切っている。

形状・規模 水路跡で幅1.1m以上、検出面からの深さ22cmを測る。直線方向に延び南北に延び、両端は調査区外へ続いている。南側は現代の水路と重複する。主軸方位はN-25°-Eである。

出土遺物 須恵器椀、丹波焼小壺等の遺物が出土した。

時期 出土遺物から近世段階まで使用されていた可能性がある。

SD5 (図版63、写真図版23)

検出状況 23次調査で検出した。

形状・規模 水路跡で幅2.14m以上、検出面からの深さ22cmを測り、両端は調査区外に続く。主軸方位は23次調査区内ではN-22.5°-25°-Eであり、22次調査区ではN-14.5°-Eとなる。23次調査区内では部分的に護岸の石組が構築されていた。底から多数の杭痕を検出した。

出土遺物 須恵器椀細片、青磁碗、備前焼播鉢、染付磁器、土師器等の細片が出土した。

時期 出土遺物から近世初頭頃まで機能していた可能性がある。

注1 森田 1986「東播系中世須恵器生産の成立と展開―神出古窯址群を中心に―」『神戸市立博物館研究紀要』第3号 神戸市立博物館

注2 相生・龍野古窯跡群の生産地遺跡からみた編年としては以下の文献を参考にした。

森内秀造 1986a「緑ヶ丘窯址群の須恵器の特徴と編年」『相生市・緑ヶ丘窯址群』兵庫県教育委員会

森内秀造 1986b「平安時代の農業生産―播磨地方の須恵器生産を中心に―」『歴史における政治と民衆』日本史論叢

森内秀造 1995「相生窯址群における平安期の遺物について」『相生市・緑ヶ丘窯址群Ⅱ』兵庫県教育委員会

野村展石 2001「相生・龍野古窯跡群について―採集資料の紹介から―」『ひょうご考古』第7号 兵庫県考古研究会

池田昭弘・服部章 2003「まとめ」『相生市・緑ヶ丘窯址群Ⅲ』兵庫県教育委員会

また、消費地遺跡からみた平安時代中期から後期の編年としては以下の文献を参考にした。

岸本道昭 1994「布勢製家伝地期の土器」『布勢製家Ⅱ』龍野市教育委員会

相生・龍野古窯跡群の終焉時期については、12世紀末から13世紀初頭とする見解(岸本道昭 1999「長尾・小畑遺跡群」龍野市教育委員会、岸本道昭 1999「西播系中世須恵器の終焉について」『竹園遺跡群』龍野市教育委員会)があり、従来の東播系須恵器の片貝跡の編年と齟齬が生じるなど、東播系編年のそのまま西播系に適用することへの問題が提起されている。なお、前掲の野村編年ではこれを受けて、終焉時期を引き下している。

注3 相生・龍野古窯跡群は、『最終段階での須恵器の生産地は旧赤穂郡の相生市と旧福原郡の龍野市および相生市東部の2つに分かれ、異なった様相をみせる。すなわち、旧赤穂郡の緑ヶ丘地区や西後明地区などでは、糸切り輪は平高台をわずかに残し、杯4へラ切り手法を堅持したまま終焉する。これに対して、旧福原郡では糸切り輪は高台をわずかに残すものもあるが、高台を消失している輪も焼かれている。構成器種はへラ切り手法をもつ杯はなく、瓦、小椀・小皿・鉢等が含まれている』(時期差と考えるならば、旧赤穂郡のほうが早く衰退したと考えられる)(森内秀造 1987「相生系須恵器について」『宝林寺北遺跡』兵庫県教育委員会)との指摘がある。相生・龍野古窯跡群の製品あるいは東播系須恵器の製品であっても、須恵器の底部形態が11-12世紀にかけて突出する平高台から平底へと型式変化する流れに異論はなく、少なくともこの点においては、相生・龍野古窯跡群と東播系の両者の編年間に大きな齟齬はないものと思われる。

注4 このタイプの羽釜は、福田天神遺跡のSD01(市村高規・鈴木重治ほか1982「福田天神遺跡」龍野市教育委員会)や玉津田中遺跡(注5・居住地区)のSG8501(村上崇典・中田淳・森田淳・多賀茂治・鈴木聡二1995「玉津田中遺跡」第4分冊・注5・居住地区の調査)龍野市教育委員会)などでもみられ、玉津田中遺跡では12世紀末から13世紀初頭の土器群に含まれる。

注5 玉津田中遺跡SG8501の土器群(12世紀末から13世紀初頭)には255と似たタイプ5388が一定量含まれるが、5388は体部最大径の口径よりも大きく、255より新形と考えられる。

第5章 自然科学的分析

第1節 竹の前遺跡と畑田遺跡の地形環境

青木 哲哉 (立命館大学非常勤講師)

1. はじめに

人間は、自然環境に影響され、またそれを利用しながら活動してきた。中でも地形は、人間の生活舞台であり、活動の場となってきただけに、地形環境と人間生活との間には密接な関係が存在する。地形環境は、第四紀に変化を続け、現在に至っている。そのため、過去の人間生活を浮き彫りにするには、各時期の地形環境とその変化を明らかにすることが必要と考えられる。

人間生活の解明につながる地形環境は、数万年や数千年オーダーでの考察だけでなく、それより細かいオーダーで捉えなければならない。これには、考古遺跡の発掘調査区における地形・地質調査が有効な方法となる。調査区では、微地形とそれを構成する堆積物が直接観察され、堆積物については詳細な区分が行える。このため、堆積物ごとの細かいオーダーで地形環境を復元し、その変化を辿ることができる。しかも、堆積物には編年された考古遺物がしばしば含まれる。復元された地形環境の時期はそれを通して明確にすることが可能となる。他方で調査区においては、人間活動の痕跡である遺構が検出され、過去の人間生活が知られる。そこでは、地形環境と人間生活の係わりをも考察できるのである。

本稿では、竹の前遺跡と畑田遺跡における地形環境を明らかにし、それと人間生活との関係について考察したい。調査では、両遺跡の調査区付近における地形の分類と堆積物の把握を試みた。地形分類では、まず2万分の1空中写真の判読と現地踏査によって調査区周辺の地形面を区分し、ついで調査区付近における微地形の分類を5,000の1空中写真の判読にもとづいて行った。堆積物に関しては、主に調査区での地質断面を詳細に観察した。堆積物の観察は、遺構検出面より上位だけでなく、竹の前遺跡4次調査区において掘削したトレンチ断面で遺構検出面以下についても行った。こうして得られた地形と堆積物の調査結果に、遺構の分布や時期などの発掘調査成果を加えて、調査区付近における地形環境、及びそれと人間活動との係わりを考察した。

2. 調査区付近の地形分布

(1) 調査区周辺の地形について

本遺跡の調査区は主に市川によって形成された沖積低地に位置する。この沖積低地は瀬戸内海に面する播州平野の西部にみられる。周辺には標高150～300mの山地が分布し、丘陵や更新世段丘はほとんど存在しない。調査区は、こうした沖積低地の市川西岸に位置し、そこには船場川や水尾川などの小規模な河川がやや蛇行しながら南へ流れる。調査区周辺の沖積低地には、完新世段丘、現記氾原、及び支流性扇状地が認められ、小規模な独立丘陵が散在する(挿図5)。各地形の特徴は次のとおりである。

〔完新世段丘〕 この地形面が最もよく発達する。段丘面はほぼ平坦で南に向かって緩やかに傾斜し、そこでは市街地化以前に条里地割が認められた。段丘崖は、市川、船場川、ならびに水尾川沿いにみられ、50cm前後の比高をもつ。竹の前遺跡と畑田遺跡の調査区はこのような完新世段丘上に位置する。

〔現記氾原〕 これは、最も低い地形面で、洪水の際に冠水する危険性が最も大きい。この地形面は、市川、船場川、及び水尾川に沿って分布する。市川沿いでの現記氾原は最大およそ1.1kmの幅で連続してみられ、船場川と水尾川に沿っては150m以下の幅で断続的に認められる。



挿図5 調査区周辺の地形分類図 (S=1:15,000)

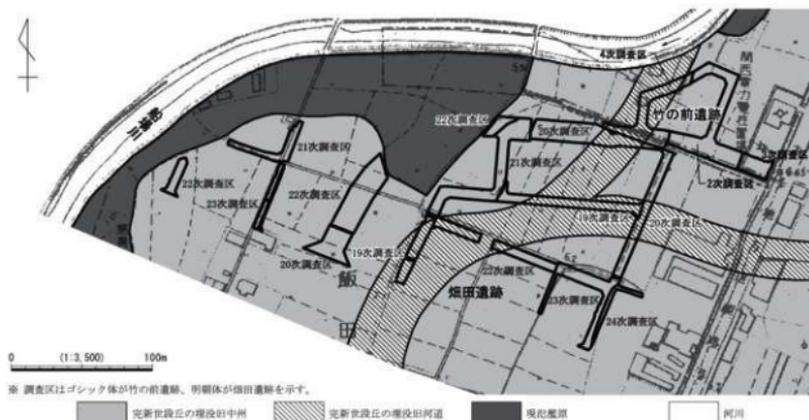
〔支流性扇状地〕 この扇状地は山麓に点在する。これは、背後の山地から堆積物が供給されてきたもので、複合扇状地をなすことがある。地表は10%前後の急傾斜で高度を下げ、完新世段丘と傾斜変換線と接する。支流性扇状地は沖積低地に分布する独立丘陵の麓にも小規模ながらみられる。

(2) 調査区付近の微地形について

竹の前遺跡と畑田遺跡の調査区は完新世段丘上に位置し、その北側から西側には船場川が蛇行して流れる。船場川沿いには、幅15～70mの現況蓋原が断続的に分布し、これと完新世段丘との境界には30～50cmの比高をもつ段丘崖がみられる。調査区が位置する完新世段丘は埋没した扇状地が段丘化したもので、その付近には扇状地の微地形である旧中州と旧河道が埋没した状態で認められる（挿図6）。

埋没旧中州は調査区全体の西部、北東部、及び南東部の3ヶ所にみられる。これらはそれぞれ北東から南西へ長く延びる。埋没旧中州上には、主に竪穴建物跡や掘立柱建物跡が分布する。調査区西部の埋没旧中州上では、弥生時代後期の竪穴建物跡（畑田遺跡23次調査区）や、11世紀末から12世紀前半と12世紀から13世紀の掘立柱建物跡（畑田遺跡19・20次調査区）などが検出されている。他方、調査区北東部の埋没旧中州上では弥生時代中期後半の土坑（竹の前遺跡2次調査区）や弥生時代後期の竪穴建物跡（竹の前遺跡2・4次調査区、畑田遺跡20次調査区）などが認められ、調査区南東部のそれには弥生時代前期後半の溝（畑田遺跡23・24次調査区）、古墳時代中期と後期の竪穴建物跡（畑田遺跡22・23・24次調査区）、及び7世紀から8世紀の掘立柱建物跡（畑田遺跡22次調査区）などが分布する。

また、調査区西部と南東部の埋没旧中州末端上では流路跡が検出されている。調査区西部に位置する埋没旧中州東部の末端上では、弥生時代後期や古墳時代初頭から中期、古墳時代後期の流路跡（畑田遺跡SR1～4・6）が約5本認められ、調査区南東部にみられる埋没旧中州北西部の末端上には、古墳時代中期から後期の流路跡（畑田遺跡SR9～11）が分布する。これらは、幅が数mの小規模なもので、おおむね北東から南西方向へ延びる。調査区西部の埋没旧中州末端上では、こうした流路跡に12世紀から13世紀に建てられた掘立柱建物跡の一部が立地する。

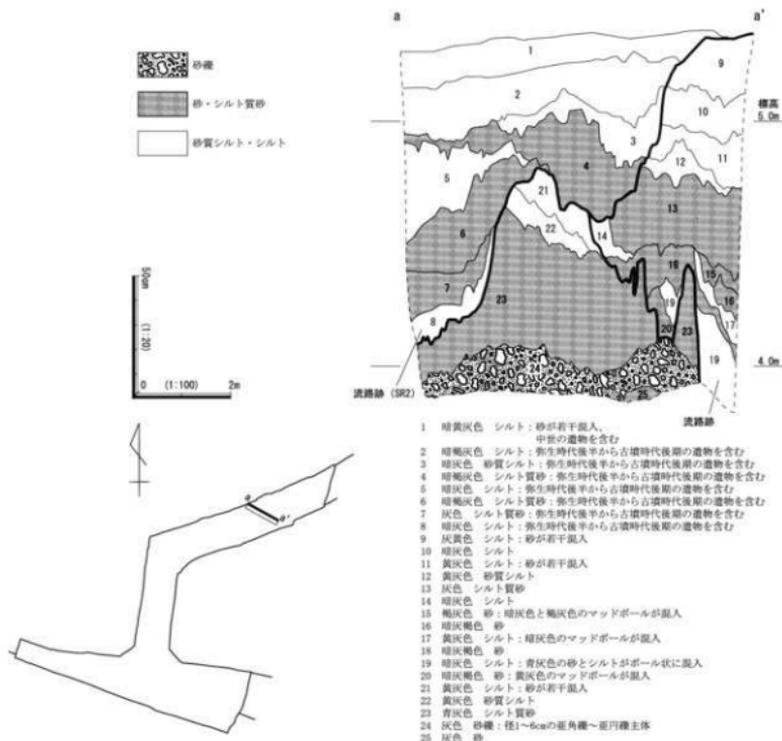


挿図6 調査区付近における微地形の分布 (S=1:3,500)

一方、埋没旧河道は2本認められる。ひとつは北東から延びる旧河道で、他の一つは東からのものである。これらは調査区中央付近で合わさり、その後南西に向かって延びる。いずれも、やや蛇行しており、船場川または市川分流の流路跡と考えられる。これらの埋没旧河道上では、主に流路跡が検出されている。北東から延びる埋没旧河道上では4本前後の流路跡がみられ、それらの形成・埋積時期は縄文時代晩期から弥生時代中期後半（竹の前遺跡SR1）、弥生時代後半から古墳時代後期（竹の前遺跡SR2）、ならびに古墳時代後期（畑田遺跡SR8・12）である。また、東からの埋没旧河道上では古墳時代後期の流路跡（畑田遺跡SR7）が検出されている。調査区で認められる流路跡は多くが小規模であるものの、埋没旧河道上に分布する流路跡には比較的大規模なものがみられる。これらは、縄文時代晩期から弥生時代中期後半の流路跡（竹の前遺跡SR1）、弥生時代後半から古墳時代後期のもの（竹の前遺跡SR2）、及び古墳時代後期のもの（畑田遺跡SR7・8）で、それぞれ10m以上の幅をもつ。

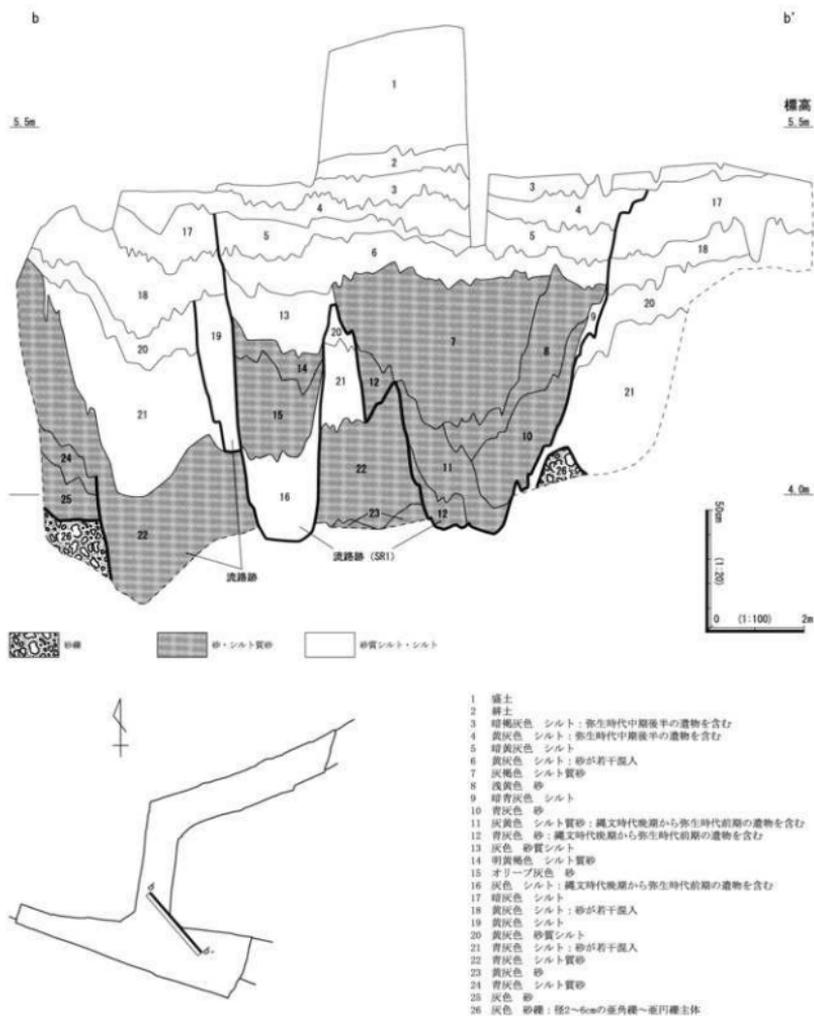
3. 調査区における堆積物の特徴

竹の前遺跡と畑田遺跡の調査区では、下位から扇状地堆積物、細粒堆積物、耕土、及び盛土が認められる（挿



挿図7 竹の前遺跡4次調査区のa-a' 地質断面図

図7・8)。この基本層序は調査区周辺のボーリング資料^(註3)や調査区より約1.6km西方に位置する池ノ下遺跡^(註2)でも確認でき、調査区一帯に広がる完新世段丘の上部はこれらの堆積物からなることが知られる。竹の前遺跡4次調査区での扇状地堆積物は最下位で観察される灰色の砂礫(挿図7の堆積物24、挿図8の堆積物26)である。これは付近のボーリング資料^(註3)によると6~9.5mの厚さをもつ。竹の前遺跡4次調査区では、この砂礫が現地



挿図8 竹の前遺跡4次調査区のb-b' 地質断面図

表下15~2m以深に堆積し、礫は径1~6cmの亜角礫~亜円礫を主体とする。これは扇状地の旧河道堆積物にあたり、上面は埋没旧中州が分布する東と西へ高度を上げると推定される。

扇状地堆積物の上位に位置する細粒堆積物は調査区の埋没旧中州と埋没旧河道を覆う。竹の前遺跡4次調査区では、その層相が下部と中部から上部とで異なる。下部には、青灰色や灰色などを呈する砂とシルト質砂（挿図7の堆積物23、挿図8の堆積物22~25）がみられる。これらは、50cm~1.1mの厚さをもち、3層前後に細分されることがある。中部から上部にかけては、黄灰色や暗灰色などの砂質シルトとシルト（挿図7の堆積物21・22、挿図8の堆積物3・4・17・18・20・21）が認められる。これらは、およそ7層に分けられ、それぞれは10~50cmの厚さでほぼ水平に堆積している。中でも、中部にみられる暗灰色のシルト（挿図8の堆積物17）と最上部に位置する暗褐色のシルト（挿図8の堆積物3）は土壌化した旧表土にあたり、後者には弥生時代中期後半の遺物が混入する。調査区全体をみると、この暗褐色シルトとほぼ同じ層位に褐色やにぶい黄褐色などを呈するシルトが認められる。これには弥生時代から中世にかけての遺物が含まれており、その下面からは各時期の遺物が検出される。このシルトは、弥生時代以降の流路形成に伴って侵食され、また人為的に削り取られたため、連続性があまりよくない。

竹の前遺跡4次調査区では、このような細粒堆積物を切る流路跡が少なくとも4本認められる。最も下位で観察される流路跡は、細粒堆積物の下部に位置する青灰色のシルト質砂（挿図8の堆積物24）を切る。これは、幅が約6mで深さが50cm以上あり、青灰色のシルト質砂（挿図8の堆積物22）に埋積されている。

中位の流路跡は、2本観察され、それぞれ細粒堆積物の中部にみられる黄灰色の砂質シルト（挿図8の堆積物20）と暗灰色のシルト（挿図8の堆積物17）を切る。黄灰色の砂質シルトを切る流路跡は、小規模なもので、50cm~3mの幅と約60cmの深さをもつ。流路を埋積する堆積物は黄灰色のシルト（挿図8の堆積物19）である。また暗灰色のシルトを切る流路跡（竹の前遺跡SR1）は、幅10m前後、深さおよそ15mを数え、比較的大規模な流路跡に相当する。その下部から中部にかけては2本に分流した状態であり、東の流路は青灰色や灰黄色などの砂とシルト質砂（挿図8の堆積物7~12）、西のそれは主に灰色や明黄褐色の砂とシルト（挿図8の堆積物13~16）に埋積されている。流路跡の上部にみられる堆積物は黄灰色と暗灰色のシルト（挿図8の堆積物5・6）で、下部から中部にみられる2本の流路跡はこれらに被覆される。このような堆積物のうち、最下部にみられる青灰色の砂（挿図8の堆積物12）、灰黄色のシルト質砂（挿図8の堆積物11）、及び灰色のシルト（挿図8の堆積物16）には、縄文時代晩期から弥生時代前期の遺物が含まれる。

上位の流路跡（竹の前遺跡SR2）は、細粒堆積物の最上部にみられる暗褐色のシルト（挿図8の堆積物3）を切る。この流路跡は、約13mの幅とおよそ22mの深さを有し、規模が比較的大きい。流路を埋積する堆積物は暗灰色や暗褐色などのシルト質砂、砂質シルト、ならびにシルト（挿図7の堆積物2~8）である。これらは弥生時代後半から古墳時代後期の遺物を含む。

調査区全体では、上位の流路跡と同じ層位から10本前後の流路跡が認められる。これらは主に細粒堆積物によって埋積されている。堆積物に含まれる遺物の時期は、それぞれ異なるものの、おおむね弥生時代後期から古墳時代後期ころまでに収まる。このような流路跡の多くは小規模である。ただし、埋没旧河道上では規模の大きい流路跡（畑田遺跡SR7・8）が検出されている。これらは30~40mの幅と1.75m以上の深さをもち、流路跡の堆積物には主に古墳時代後期の遺物が含まれる。こうした大小の流路跡を埋積する堆積物の上には、暗褐色のシルトが局所的にみられる。竹の前遺跡4次調査区や畑田遺跡22次調査区などでは、この堆積物（挿図7の堆積物1など）に12世紀以降（中世）の遺物が混入する。

4. 調査区付近における地形環境の変遷

調査区付近の地形環境は、これまで述べた事柄から次のように考察される。

〔ステージ1〕 縄文海進頂期以降、調査区付近では市川や船場川などによって砂礫が堆積し、扇状地が発達した。その際、調査区の西部、北東部、及び南東部に中州が形成され、これらの間には北東や東から南西に向かってやや蛇行する河川が流れた。

〔ステージ2〕 河川の流路が埋積された後、扇状地上には数度の洪水が及び、砂とシルト質砂が堆積した。埋没旧河道上ではこの過程で再び流路が形成され、その後流路は砂やシルト質砂によって埋積された。

〔ステージ3〕 扇状地上では、さらに砂質シルトとシルトが洪水に伴って堆積した。わずかに低い埋没旧河道上では、この時期にも流路の形成と埋積がみられた。扇状地はこうした細粒堆積物の被覆によって全体的に埋没していった。

〔ステージ4〕 縄文時代晩期ころになると、北東から延びる埋没旧河道上では比較的大規模な流路（竹の前遺跡SR1）が形成された。竹の前遺跡4次調査区では、この流路が2本に分流しており、その流れは少なくとも弥生時代前期まで継続した。このころ、調査区南東部の埋没旧中州上では人間活動がみられ、弥生時代前期後半に溝がつくられた。その後、埋没旧河道上にできた流路は砂やシルトなどによって埋積された。

〔ステージ5〕 流路が埋積されてから弥生時代中期後半ころまでに洪水が発生した。これに伴ってシルトの堆積がみられ、シルトの上部はその後土壌化していった。

〔ステージ6〕 弥生時代後半には、北東から延びる埋没旧河道上を河川（竹の前遺跡SR2）が流下した。また調査区西部の埋没旧中州末端上では、弥生時代後期に流路（畑田遺跡SR1・2）が形成・埋積された。弥生時代後期には、広い範囲に及ぶ洪水がみられず、調査区西部と北東部の埋没旧中州上に数棟の竪穴建物が建てられた。

〔ステージ7〕 古墳時代に入っても、埋没旧河道上と埋没旧中州末端上では流路の形成と埋積が繰り返された。埋没旧河道上では、弥生時代後半につくられた流路（竹の前遺跡SR2）が古墳時代後期までに埋積されたほか、古墳時代後期にも大規模な流路（畑田遺跡SR7・8）の形成と埋積がみられた。また、調査区西部の埋没旧中州末端上では古墳時代初頭から中期（畑田遺跡SR3・4）と古墳時代後期（畑田遺跡SR6）に流路が形成・埋積され、調査区南東部の埋没旧中州末端上ではそれぞれ古墳時代中期から後期ころ（畑田遺跡SR9～11）に行われた。このような状況下で、調査区南東部の埋没旧中州上では古墳時代中期と後期に竪穴建物が築造された。

〔ステージ8〕 古墳時代後期以降は洪水のほとんど起こらない比較的安定した環境が続いた。このころは、1～2度の洪水が12世紀までに発生し、ほぼ埋積された流路の上にシルトが局所的に堆積するのみであった。こうした環境の下、7世紀から8世紀には調査区南東部の埋没旧中州上で掘立柱建物が建てられた。なお、調査区付近の沖積低地は、古墳時代後期以降に発生した洪水後のある時期に、市川や船場川などの下方侵食によって段丘化した。

〔ステージ9〕 遅くとも12世紀以降は、環境がさらに安定し、洪水は及ばなくなった。この環境下で、調査区西部の埋没旧中州上では11世紀末から13世紀に掘立柱建物が数棟建てられ、中には埋没旧中州末端上の流路跡に一部が立地する掘立柱建物がみられた。

5. おわりに

竹の前遺跡と畑田遺跡の調査区は市川下流部の沖積低地に位置する。調査区付近は埋没した扇状地が段丘化した完新世段丘にあたり、その段丘化は古墳時代後期以降のことと考えられる。調査区付近には、扇状地の形成期につくられた旧中州と旧河道が埋没した状態で認められる。埋没旧中州は調査区西部、北東部、及び南東部に分布する。埋没旧河道は北東と東からのものが調査区中央付近で合わさって南西へ延びる。これらの微地形は、縄文時代晩期以前に形成され、その後砂やシルトなどの細粒堆積物に覆われたものである。微地形の埋没過程には、縄文時代晩期以降少なくとも十数本の流路が埋没旧河道上と埋没旧中州末端上に形成された。これらには、弥生時代後期から古墳時代後期にかけて形成・埋積されたものが多い。中でも、比較的大規模な流路跡は埋没旧河道上にみられ、その形成と埋積は縄文時代晩期から弥生時代中期後半、弥生時代後半から古墳時代後期、ならびに古墳時代後期になされた。

このような地形変化がみられた調査区付近では、縄文時代晩期から人間が活動するようになった。埋没旧中州上では、人間の居住がみられ、弥生時代後期及び古墳時代中期と後期に堅穴建物、また7世紀から8世紀と11世紀末から13世紀には掘立柱建物が建てられた。これには、当時の環境が深く関与したと考えられる。調査区付近では、遅くとも弥生時代後期から古墳時代後期にかけて広範囲にわたる洪水堆積がみられず、主に流路の形成と埋積が埋没旧河道上と埋没旧中州末端上で繰り返された。さらに、古墳時代後期以降は洪水のほとんど発生しない比較的安定した環境が続いた。これらの時期には、末端を除く埋没旧中州上で水害の危険性が小さく、これは人間の居住が弥生時代後期以降に盛んになった主因のひとつに挙げられる。加えて、居住域となった埋没旧中州上は、わずかに高く、比較的高燥で排水の便がよい。そのため、そこは基本的に人間の居住に適していたのである。人間は以上のように調査区付近の地形環境を考慮して自らの生活を営んだと考えられるのである。

註1 成瀬敏郎 1998「第3章 地形 3節 姫路平野の構成層」姫路市史編集専門委員会編『姫路市史』第7巻上

註2 掛橋 2012「池ノ下遺跡の地形環境」『池ノ下遺跡』兵庫県教育委員会

註3 前掲註1に同じ

第2節 畑田遺跡SR7出土須恵器附着物の自然科学分析

パリーノ・サーヴェイ株式会社

今回の分析調査では、畑田遺跡SR7から出土した須恵器附着物に関する情報を得ることを目的とし、科学的調査を実施する。なお、本報告では、附着物が塗膜状に附着する状況から漆の可能性が高いことが予想されたことより、有機化合物としての特性を調査する手法である赤外分光分析（フーリエ変換赤外線吸収スペクトル法、FT-IR）を実施し、材質を検証する。

1. 試料

試料は、土器から剥離した塗膜状の黒褐色附着物の1点である（挿図9）。FT-IR分析には、附着物の端部から微小片を採取して供試試料とした。

2. 分析方法

(1)赤外線分光分析の原理

有機物を構成している分子は、炭素や酸素、水素などの原子が様々な形で結合している。この結合した原子間は絶えず振動しているが、電磁波のようなエネルギーを受けることにより、その振動の振幅は増大する。この振幅の増大は、その結合の種類によって、ある特定の波長の電磁波を受けたときに突然大きくなる性質がある。この時に、電磁波のエネルギーは結合の振動に使われて（すなわち吸収されて）、その物質を透過した後の電磁波の強度は弱くなる。

有機物を構成している分子における結合の場合は、電磁波の中でも赤外線の領域に入る波長を吸収する性質を有するものが多い。そこで、赤外線の波長領域において波長を連続的に変えながら物質を透過させた場合、さまざまな結合を有する分子では、様々な波長において、赤外線の吸収が発生し、いわゆる赤外線吸収スペクトルを得ることができる。通常、このスペクトルは、横軸に波数（波長の逆数 cm^{-1} で示す）、縦軸に強度を取った曲線で表されることが多い。したがって、既知の物質において、どの波長でどの程度の吸収が起こるかを調べ、その赤外線吸収スペクトルのパターンを定性的に標準化し、これと未知物質の赤外線吸収スペクトルのパターンとを定性的に比較することにより、未知物質の同定をすることもできる（山田1986）。

(2)赤外線吸収スペクトルの測定

微量採取した附着物をダイヤモンドエクスプレッスにより加圧成型した後、顕微FT-IR装置（サーモエレクトロン（株）製Nicolet Avatar 370、Nicolet Centaurus）を利用し、測定を実施した。なお、赤外線吸収スペクトルの測定は、作成した試料を鏡下で観察しながら測定位置を絞り込み、アパーチャでマスキングした後、透過法で測定した。得られたスペクトルはベースライン補正などのデータ処理を施した後、吸光度（ABS）で表示している。測定条件及び各種補正処理の詳細については、FT-IRスペクトルと共に図中に併記している。

3. 結果

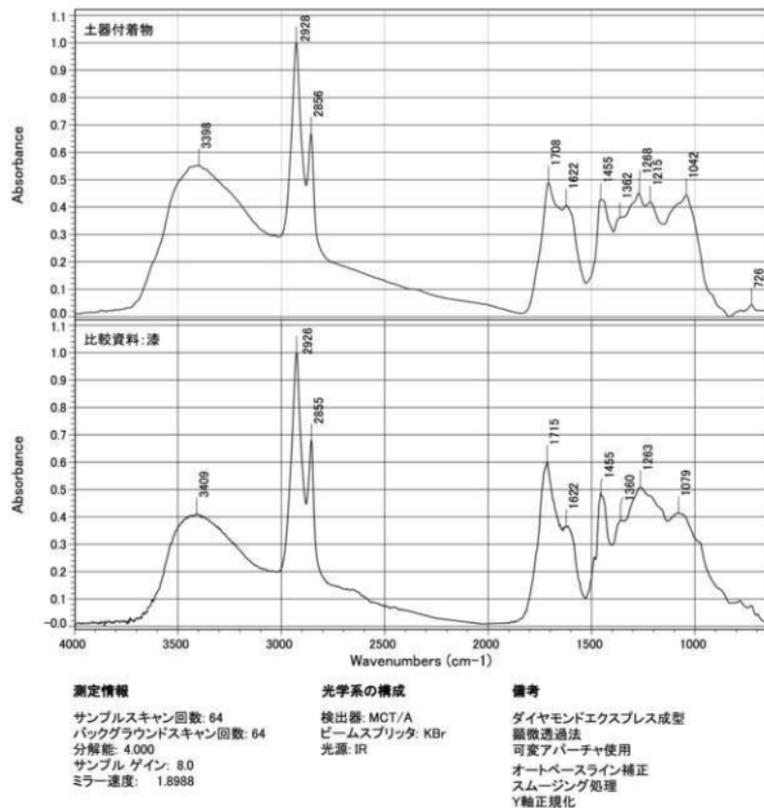
土器附着物のFT-IRスペクトルを挿図10に示す。なお、比較資料として実測した漆のFT-IRスペクトルを図中に併記している。

土器附着物の赤外線吸収特性は、 3400cm^{-1} 付近の幅広い吸収帯のほか、 2930cm^{-1} 、 2860cm^{-1} 、 1710cm^{-1} 、 1620cm^{-1} 、 1460cm^{-1} 、 1270cm^{-1} 付近の強い吸収帯や 1360cm^{-1} 、 1220cm^{-1} 、 1040cm^{-1} 付近の吸収帯によって特徴付けられる。なお、 3400cm^{-1} 付近の吸収帯はO-H基の伸縮振動、 2930cm^{-1} 、 2860cm^{-1} 付近の吸



挿図9 試料写真

取帯はメチル基およびメチレン基のC-H伸縮振動、1710 cm^{-1} 付近の吸収帯はカルボン酸のC=O伸縮振動、1620 cm^{-1} 付近の吸収帯はC=C伸縮振動、1460 cm^{-1} 、1360 cm^{-1} 、1270 cm^{-1} 、1220 cm^{-1} 、1040 cm^{-1} 付近の吸収帯はメチル基およびメチレン基の対称変角振動やC-O伸縮振動あるいはO-H変角振動と予想される。



挿図10 FT-IRベクトル

4. 考察

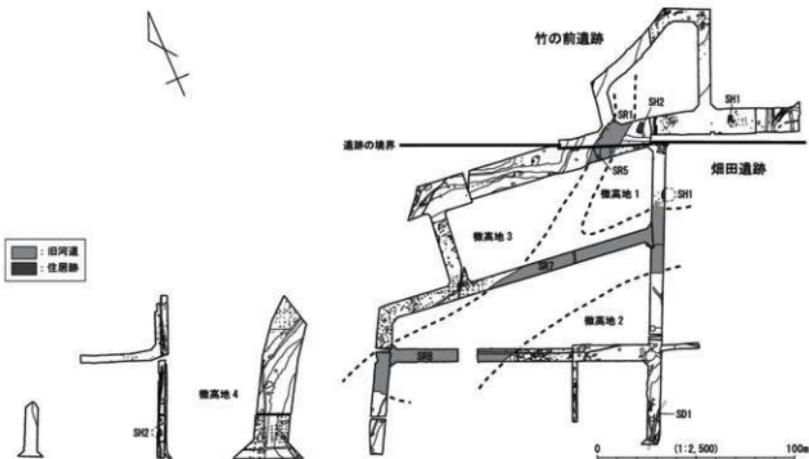
今回のような土器付着物は肉眼観察から有機質由来のものであることが推定された。遺跡で検出される有機質遺物の代表としては、漆、天然アスファルト、松脂、動植物油、炭化物などがある。これらの赤外線吸収スペクトルは、いずれも固有の吸収帯があり、漆については3400 cm^{-1} 付近の幅広い吸収帯と2930 cm^{-1} 、12860 cm^{-1} 、1720 cm^{-1} 、1620 cm^{-1} 、1460 cm^{-1} 、1260 cm^{-1} 付近の吸収帯によって特徴づけられる。今回の土器内面の付着物の赤外線吸収特性には、比較資料の漆において確認される3400、2930、2860、1720、1620、1460、1260 cm^{-1} 付近の脂肪族飽和炭化水素に帰属する吸収帯が認められ、漆と類似したスペクトルパターンを示している。従って、土器内面に付着していた物質の材質は、漆であることが確認される。

引用文献 山田富貴子,1986,赤外線吸収スペクトル法,機器分析のてびき第1集,化学同人,1-18.

第6章 まとめ

第1節 弥生時代の遺構・遺物の検討

- 検出遺構** 今回の調査では、竪穴建物跡4棟、土坑3基、溝1条、旧河道4条を検出した(図版7・26)。それらの旧河道は網の目状に走行しており、その間には少なくとも4つの微高地が存在していたと想定できる(挿図11)。まずは、竹の前遺跡SR1・畑田遺跡SR5と畑田遺跡SR7に囲まれた微高地1、その南に畑田遺跡SR7を挟んで微高地2、そして微高地1と竹の前遺跡SR1を挟んだ西に微高地3、最後に西端の微高地4と仮称してみる。
- 時期** 出土遺物からそれぞれの遺構の埋没時期をみると、前期後半の畑田遺跡SD1を除けば、概ね後期の範疇に収まっている。今回7次にわたる調査において中期の遺物はほとんど出土していないことから、後期に入って別の場所から居住域が移動してきたと考えることができよう。これと似たような状況で、畑田・竹の前遺跡から北へ約500mに所在する小山遺跡において想定したことがある(福井2009)。
- 集落規模** ここで、各微高地上の居住域の規模について考えてみたい。これまでみてきたように今回の調査は居住域の中心部に及んでいない。しかし、微高地3の北側を流れる畑田遺跡SR1では後期前半の土器が大量に出土している。畑田遺跡SR1以北は段丘崖があることから、微高地3の未調査部分に竪穴建物を含む比較的多量な居住域が眠っている可能性が高くなる。
- 出土遺物** 今回の調査で出土した弥生土器のうち、畑田遺跡SR1で出土した土器群が最もよくまとまっている。西播磨で後期の基準資料となる土器群を比較すると、周世入相遺跡(赤穂市)の土坑22が最も近い印象を受ける。また外来系の土器(36)を参照すると、讃岐地域の後期前半の基準資料である上天神遺跡(香川県高松市)例との関連性も伺える。当該遺構の概要でも述べたように、出土状況から抽出したまとまりをもって詳細に検討するべきではあるが、それは今後の課題としたい。いずれにせよ、畑田遺跡SR1出土土器群はこれまで希薄であった後期前半の基準資料となりうる可能性を有しているといえる。



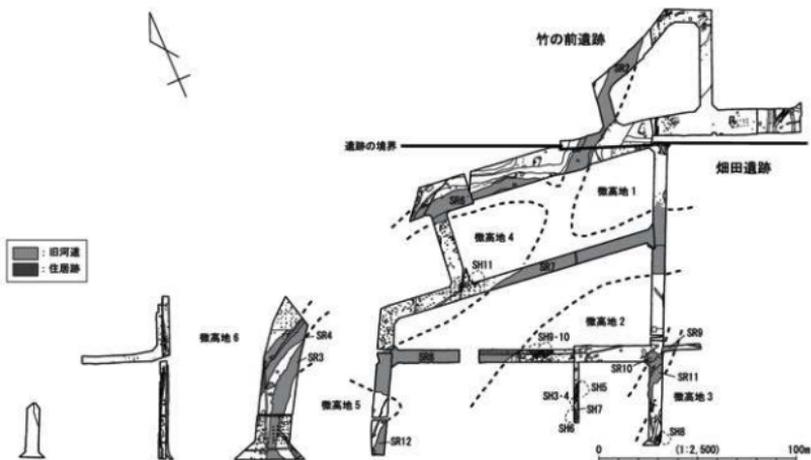
挿図11 弥生時代の住居域想定図 (S=1:2,500)

第2節 古墳時代の遺構・遺物の検討

検出遺構 今回の調査では、堅穴建物跡9棟、土坑3基、旧河道8条を検出した(図版7・31)。弥生時代よりもより複雑に網の目状に走行する流路をもとに、6つの微高地の存在を想定できる(挿図12)。そのうち、規模がある程度わかる微高地2については、幅約50m、長さ約130mと想定できる。長さについては不明であるが、微高地3・5についても幅は約50mと想定でき、いずれも長軸方向を北東から南西方向に向けている。

時期 ここで、出土遺物からそれぞれの遺構の埋没時期をみてみると、微高地2で中期の建物を5棟検出した以外は、全て後期のものばかりである。そして、後期の建物である畑田遺跡SH9・10に近接した畑田遺跡SR8からは、図示こそ叶わなかったが、ほぼ同時期(MT15・TK10段階)の須恵器が大量に出土している。この状況と類似しているのが微高地4である。この微高地では畑田遺跡SH11を検出したにとどまらず、微高地北側の畑田遺跡SR6、南側のSR7でSR8とほぼ同時期の須恵器が大量に出土している。微高地2はもとより、微高地4においても当該地域では稀有な存在である古墳時代後期の集落が未調査部分に残存している蓋然性が高いといえる。ちなみに、中期の建物である畑田遺跡SH6からは縄文をもつ須恵器(82)や軟質系土器(87~89)が出土しているが、これとはほぼ同時期の建物は南へ約100mの地点で確認されている(大谷2010, 福井2003)。中期の居住域の中心はもう少し南に所在し、今回確認した畑田遺跡SH3~6はその北端に当たると考えられる。ちなみに畑田・竹の前遺跡から約500m北に所在する小山遺跡でも軟質系土器の出土が知られる(福井2009)。

出土遺物 今回の調査では、旧河道を中心に中期と後期の須恵器や土師器が大量に出土し、不十分ではあるが、極力資料化に努めた。叶わなかった部分については今後の課題としたい。また、その旧河道からは耳環(M1・M2)や漆附着須恵器(写真図版51)が出土した。市内でもほとんど例のない後期の集落について多少なりとも資料の蓄積ができたとすれば、不足感が拭えないが一定の成果を果たせたことにしたい。



挿図12 古墳時代の住居域想定図 (S=1:2,500)

第3節 平安時代から鎌倉時代の遺構の検討

遺構の検討 奈良・平安時代以降の遺構を周辺の条里地割と合成したのが図版64である。これによると、畑田遺跡SD2・5は坪間に位置し、同SD4-1は坪内を東西に半折する位置に設けられていることが判る。SD2・5は水路として中世以降も存続していた。SD4-1は坪の北辺中央から南下し畑田遺跡B地区のSB6～8の建物群からなる屋敷地の南西部で東西(SD4-2・4-3)に分岐する。ちょうど屋敷地の西辺をSD4-1、南辺をSD4-2が区画する形で取り巻いており、その一部を区画する施設でもあったとみられる。ただし、北辺には区画施設がみられないことから、屋敷地を周囲と完全に区画する形にはなっていない。SD4-2・4-3を起点とするとSD4-4の北側2mに位置する東西方向の段差までが約50m(半町)を測ることから、B地区の屋敷地は坪(一町区画)の中央部に占地していたとみられる。

竹の前遺跡SB3、畑田遺跡B地区SB6～8、同C地区SB10、同D地区SB15～17などの建物群は屋敷地として、同時期に併存していたかどうかは別として、隣接する坪内にそれぞれ存在していたことが看取される。調査範囲が限られるため、屋敷地の存在が一坪内に一字なのか、それ以上なのかは現時点では不明といわざるをえないが、少なくとも屋敷地が坪内で隣接する状況ではなく、散在していたことが想起される。このような景観を散村形態または疎塊村的形態と呼ぶには、もう少し広域的な調査成果に基づいて検討するべきであろうが、これらのうち畑田遺跡B地区のSB6～8の建物群の時期は12～13世紀であり、同D地区のSB15～17の建物群の時期が11世紀末から12世紀前半であることを把握できたことは、古代末から中世初頭の村落形態として重要と思われる。しかも、同じ場所で何度も建替えられた状況ではなく、建替えは多くとも2回で、その後は他所に移ったのか比較的短期間で廃絶していることを付言しておきたい。

次に、現在にみることのできる条里地割の原景観が成立した時期は、条里方向と主軸方位が一致する遺構の出現時期などから11世紀末から12世紀代と考えられる。当地から東方約700mに所在する三宅遺跡で昨年度におこなわれた発掘調査でみつかったSB01(2間×4間三面底付36㎡前後)は10世紀後半から11世紀前半頃とされ、それが調査区域での最終段階の生活関連遺構でもあり、主軸方位が正方位にのる(註1)ことは注目される。今回の調査でも11世紀後半以前とみられる遺構の主軸方位はいずれも条里方向とずれており、調査成果に矛盾は認められなかった。従って、少なくとも飯田手柄地区周辺において現在にみることのできる条里地割の原景観の成立は、畑田遺跡B・D地区などでみられる屋敷地の出現とともに11世紀末から12世紀代が画期となった可能性が考えられる(註2)。

註1 中川編 2013『三宅遺跡発掘調査報告書』郡庁教育委員会

註2 原正三氏は考古学における集落研究の視点について「①建坪(圍の有無は注意)、②棟敷、③敷地などは、階層差を見出す目安になる。しかし、最も重視すべきは、(1)共同労働の場としての庭、(2)日常生活の拠所としての井戸、(3)共同労働の集積と管理に直結する倉などは集落の性格をみる視点であろう。このほかに屋敷内の墓や共同墓地なども追加すべき項目である」(原正三 1977『古代・中世の集落』『考古学研究』第23巻第4号 考古学研究会)としている。今回の調査での検出遺構と照合すると、検討材料の不足は否めない。

また、畿内の中世村落は、「集約性のない一時期の居住で、『11世紀後半代以降集約化の傾向をもつ』とされ、『しかもその屋敷地が鎌倉時代以降へと引き継がれていく点で、中世村落の型をこの時期からみることができるとはなからうか』とする指摘がある(佐久間貴志 1985『畿内の中世村落と屋敷地』『ヒストリア』第109号 大阪歴史学会)。今回の調査例は、佐久間氏の見解に基づくと集約化以前の種相と異なる。畿内周辺地域にあたる郡野野野の集約化傾向をいつと捉えるのか、今後の課題と考える。

今回の調査において、畑田遺跡D地区でみつかったSB13、SB14、SD3は南北に主軸方位をもつ遺構であり、検討の結果、その下層は11世紀後半以前と推測される。このため、主軸方位が南北から現在みることのできる条里地割の方向軸(N-約20°-EまたはN-約70°-W)に11世紀末から12世紀代に変更した可能性も考えられるが、SB13、SB14、SD3から時期を比定できる遺構が出土しなかったこともあり、この点の結論は保留しておきたい。

第4節 平安時代後期から鎌倉時代初頭の建物遺構の検討

柱間の検討 今回検出した掘立柱建物跡のうち時期が比定できるものとしては、畑田遺跡D地区のSB15・16、SB17からなる建物群と同B地区のSB6・7、SB8からなる建物群がある。前者は11世紀末から12世紀前半で、後者は12～13世紀代と考えられる。まずD地区の建物からみていくと、SB15（5間×3間以上85.73㎡以上）はSB16（5間×3間以上90.61㎡以上）に建替えられている。SB15の梁間は6尺5寸と7尺の2種類の尺度を用いているが、SB16では7尺2寸、6尺2寸、6尺9寸とバラつきがみられる。桁行は計画寸法としてみるとSB15では7尺、8尺、9尺の尺単位で柱割りしているのに対し、SB16では7尺、8尺5寸、9尺、9尺5寸と使用する尺度が増えている。次にB地区のSB6（4間×2間35.12㎡）はSB7（4間×2間28.77㎡）に建替えられている。SB6の梁間は8尺5寸の等間隔であったが、SB7では7尺1寸と7尺5寸になっている。桁行はSB6では中央2間が5尺7寸で、両端が5尺5寸と5尺6寸であったのに対し、SB7では中央2間が5尺8寸で、両端が5尺3寸と4尺6寸になりバラつきが大きくなっている。

一方、D地区の条里地割成立以前とされたSB13・SB14は前節の分析の結果、下限が11世紀後半と推測される。SB13（3間×2間24.31㎡）は桁行が6尺8寸、5尺6寸、7尺9寸と揃わないが、梁間は7尺2寸5分の等間隔である。SB14（3間×2間一面底付27.23㎡）は桁行・梁間とも個々の柱間の間隔は一定しないが、全体では桁行20尺、梁間10尺で計画していることが判る。

他の遺跡に目を向けてみると、掛保郡太子町に所在する立岡遺跡の建物跡IV（5間×4間131.6㎡）は12世紀後半から13世紀初頭頃とされ、一部の柱筋にずれが認められるなど、複雑な間取りをもつ建物とされる^(註1)。たつの市に所在する福田天神遺跡のSB02（6間×5間138.45㎡）やSB06（4間×5間82.64㎡）は13世紀頃とされ、柱筋の食い違いや柱間の省略が認められている^(註2)。また、神戸市北区に所在する二郎・宮ノ前遺跡のSB3（4間×4間88㎡）は13世紀中頃とされ、総柱建物の一部の柱が省略される、いわゆる「中抜け総柱建物」とされている^(註3)。こうした中抜け総柱建物は近畿地方では13世紀中頃以降に出現するとされる^(註4)。一方で、京都府福知山市に所在する大内城跡の調査ではI～IV期の4時期に分類されているが、このうちII期（13世紀中葉）ではSB22（6間×4間160㎡前後）、SB237B（4間×4間90㎡前後）、SB46（6間×4間145㎡前後）の3棟の総柱建物が整然と並ぶ形で建っており、梁間・桁行ともほとんど8尺で揃うとされている^(註5)。

柱間寸法の尺度については、一般的に多少の誤差を含むとはいえ1尺=0.303…mが使用されるのは概ね鎌倉時代頃とされる。しかし、当然のことながら全ての建物がこの基準で建てられたわけではない。この点については、調査事例を検証することにより1尺=0.303…mとする尺貫法が導入された時期の差や地域差、建物の規模・性格の違い、工人差など様々な検討を行うことが可能になってくると思われる。今回の調査成果を、古代末から中世初頭の建物の一例としてあげ、今後の研究の進展に期待したい。

註1・2 堀内明博 1982「中世の建築址」『福田天神遺跡』熊野市教育委員会、熊本誠一ほか1971「川島・立岡遺跡」太子町教育委員会

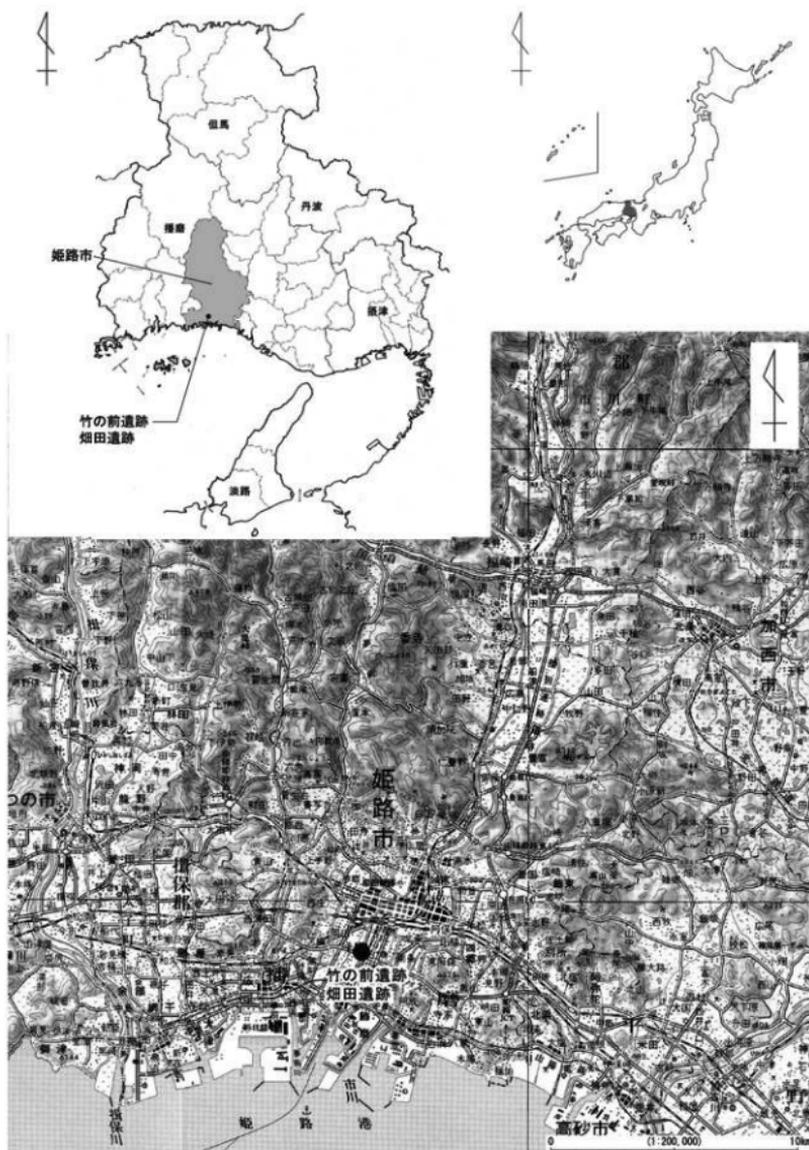
註3 山上雅弘 2014「掘立柱建物」萩原三雄・中井均編『中世城館の考古学』高志書院

註4・5 前掲註4に同じ

参考文献

- 秋山浩三 2006 「古備・近畿の交流と土器」『古式土器の年代学』（附）大阪府文化財センター
- 浅川道明編 2008 『先史日本の住居とその周辺』同成社
- 池田毅 2013 「淡路型要の類型—調整手法の差異とその特殊性—」『弥生研究の群像—七田忠昭・森岡秀人・松本岩雄・深沢芳樹さん追悼記念—』みずほ別冊 大和弥生文化の会
- 今里幾次 1980 『播磨考古学研究』今里幾次論文集行方
- 大谷輝彦 2010 『船場川東遺跡群』『姫路市史 第7巻下 資料編 考古』姫路市
- 岡田朝和・今城愛・木村夢 2008 『2007年 とっとり「知の財産」活用推進事業調査研究 山陰地域の弥生時代建築に関する実証的復元研究』鳥取環境大学浅川研究室
- 小笠原好彦 1988 「古墳時代末期の土器」『季刊 考古学』第24号 葦山園
- 甲斐昭光編 1990 『国史入道遺跡』兵庫県教育委員会
- 香芝市二上山博物館編 2006 『シンボジウム「邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和」資料集』ふたかみ邪馬台国シンポジウム6 香芝市教育委員会
- 香芝市二上山博物館編 2011 『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』学生社
- 織持重裕 1991 「中世村落をいかに把握するか」『争点日本の歴史』第4巻 新人物往來社
- 佐原真・春成秀爾 1997 『原始絵画』歴史発掘 講談社
- 鎌宮正 2007 「2東播磨地域の編年」長友朋子編『弥生土器集成と編年—播磨編—』六一書房
- 高田次郎 1967 『荘園村落の展開』『岩波講座日本歴史 中世2』岩波書店
- 菅原康夫・梅本謙一編 2000 『弥生時代の様式と編年 四国編』木耳社
- 藤村俊夫 1995 「各地の瓦質土器」『概説 中世土器・陶磁器』真陽社
- 白石雄・福井優・山田清朝 2012 『姫路市市之郷遺跡出土陶土器土器軟質土器の胎土分析』『兵庫県考古博物館研究紀要』第5号 兵庫県考古博物館
- 田中元浩 2005 『畿内地域における古墳時代初頭土器群の成立と展開』『日本考古学』第20号 有限責任中間法人日本考古学協会
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
- 谷岡武謙 1964 『平野の開墾—近畿を中心として—』古今書院
- 次山洋 1993 「布疋式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』第40巻第2号 考古学研究会
- 寺沢薫・森岡秀人編 1990 『弥生土器の様式と編年 近畿Ⅱ』木耳社
- 長友朋子・田中元浩 2007 「3. 西播磨地域の土器編年」大手前大学史学研究所編『弥生土器集成と編年—播磨編—』六一書房
- 橋本久和 1974 「中世村落の考古学的研究—高槻における二・三の遺跡調査から—」『大阪文化誌』季刊1巻2号 大阪文化財センター
- 橋本久和 1990 「中世成立期の土器様相—畿内を中心として—」『日本史研究』330 日本史研究会
- 橋本久和 1992 『中世土器研究序論』真陽社
- 長谷川眞 2007 『播磨における土製煮炊具の様相』『中近世土器の基礎研究2』日本中世土器研究会
- 春成秀爾 1991 「紀元から記号へ—弥生時代における農耕儀礼の盛衰—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第25巻 国立歴史民俗博物館
- 橋本謙一編 1981 『川島・立岡遺跡（本文編）』太子町教育委員会
- 広瀬和謙 1978 「古墳時代の集落類型—西日本を中心として—」『考古学研究』第25巻第1号 考古学研究会
- 広瀬和謙 1986 「中世の振動」『岩波講座 日本考古学6』岩波書店
- 福井優 2003 「古墳時代中播磨における渡来文化受容の様相—市川中・下流域を中心として—」『渡来系文物からみた古墳時代の播磨』第5回播磨考古学研究会 資料集 第5回播磨考古学研究会実行委員会
- 福井優編 2009 『小山遺跡 第6次発掘調査報告書』姫路市教育委員会
- 高島正和 2007 「古代末から中世初期の煮炊具—摂津地域における粟・羽釜・鍋」『中近世土器の基礎研究2』日本中世土器研究会
- 正岡隆夫・松本岩雄編 1992 『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社
- 松下那帆 1976 『播磨・長尾遺跡—本分編—』兵庫県教育委員会
- 森田稔 1995 「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 山田清朝編 2005 『姫路市 市之郷遺跡』兵庫県教育委員会
- 横田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集』4
- 第10回播磨考古学研究会実行委員会編 2009 『播磨の弥生時代型穴建物を探る』第10回播磨考古学研究会 資料集
- 第10回播磨考古学研究会実行委員会編 2010 『播磨の弥生時代型穴建物を探る』第10回播磨考古学研究会 記録集

圖 版



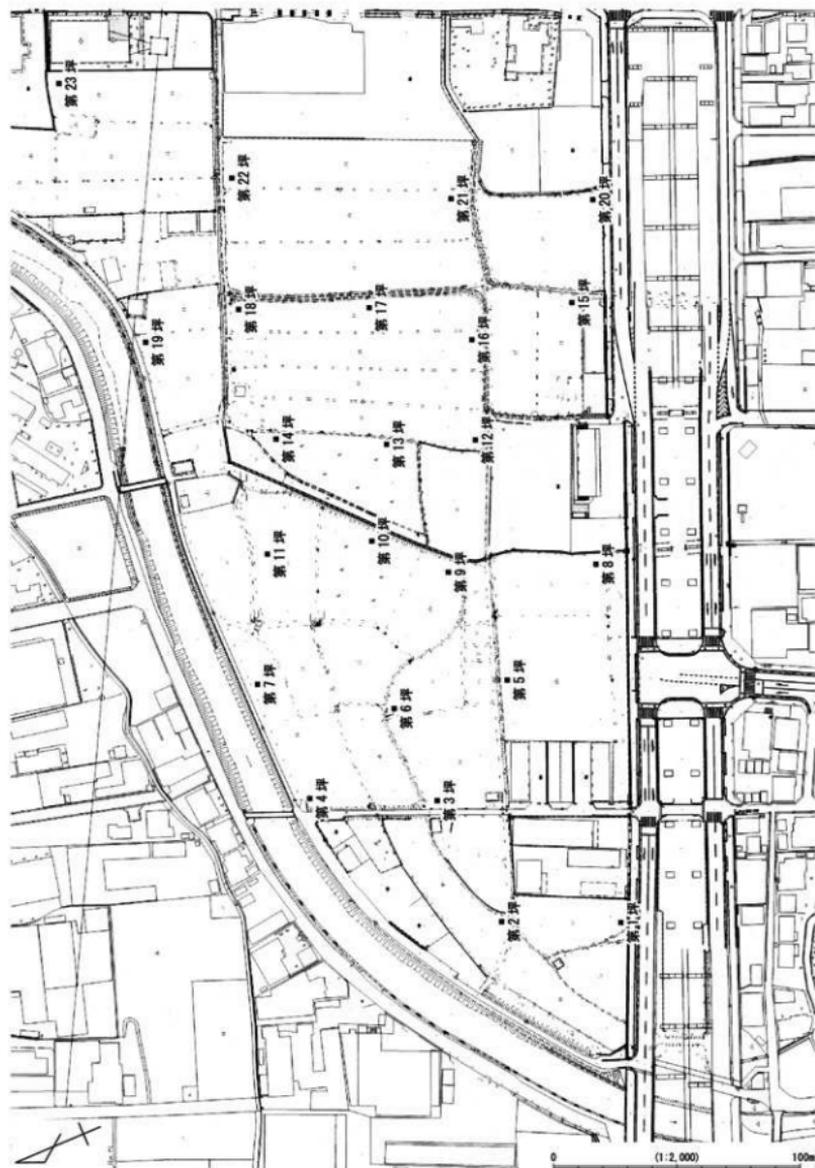
遺跡の位置 (S=1 : 200, 000)



1. 竹の跡遺跡 2. 畑田遺跡 3. 姫路城地下町跡 4. 南畝町遺跡 5. 豆腐町遺跡 6. 千代田遺跡 7. 土山遺跡 8. 町田遺跡
 9. 八反長遺跡 10. 山崎遺跡 11. 君田遺跡 12. 豊沢遺跡 13. 村瀬遺跡 14. 橋詰遺跡 15. 黒衣遺跡 16. 小山遺跡
 17. 生矢神社裏遺跡 18. 古屋敷遺跡 19. 浜田遺跡 20. 三宅遺跡 21. 長越遺跡 22. 湯田遺跡 23. 堂田遺跡 24. 村前遺跡
 25. 法輪寺山遺跡 26. 豆田遺跡 27. 丁田遺跡 28. 都東遺跡 29. 手柄山北丘群集墳3～12号墳 30. 手柄山北丘遺跡
 31. 手柄山南丘遺跡、手柄山南丘群集墳1～4号墳 32. 大淨口遺跡 33. 辻堂遺跡 34. 中ノ町遺跡 35. 西久保遺跡
 36. 大石橋遺跡 37. 中地天神遺跡 38. 東久保遺跡 39. 大町遺跡 40. 大塚遺跡 41. 権現遺跡 42. 鹿谷遺跡
 43. 出手遺跡 44. 横枕遺跡 45. 東川遺跡 46. 石田遺跡 47. 真福寺遺跡 48. カスカエ遺跡 49. 善慶田遺跡
 50. 飯田カスカエ遺跡 51. 構遺跡 52. 南雲遺跡 53. 笹山田遺跡 54. 石ヶ坪遺跡 55. 大鳥遺跡 56. 坂川遺跡
 57. タテノカエ 58. 今在家平塚遺跡 59. 石ヤ田遺跡 60. 加茂遺跡 61. 構石田遺跡



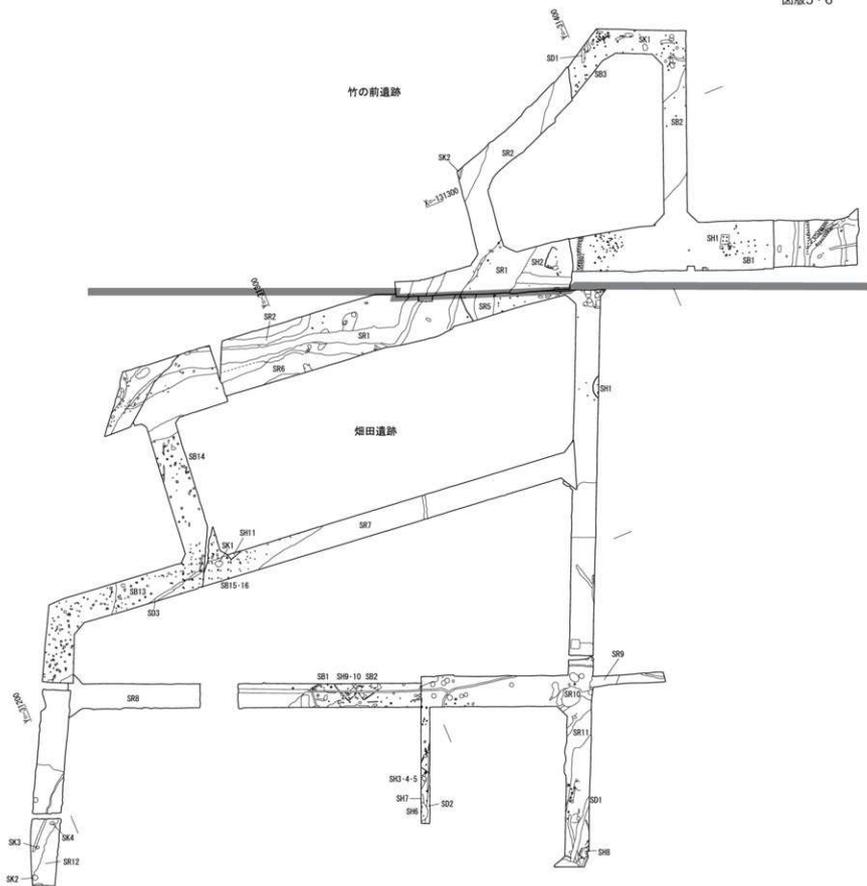
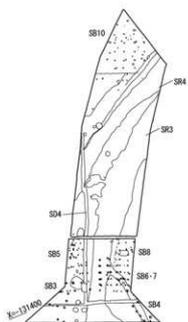
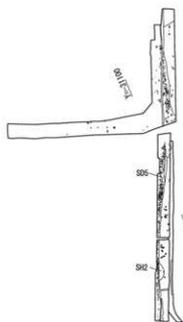
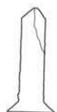
周辺の遺跡 (S-1 : 20,000)



竹の前遺跡第1次調査・畑田遺跡第18次調査の調査区配置図 (S=1:2,000)

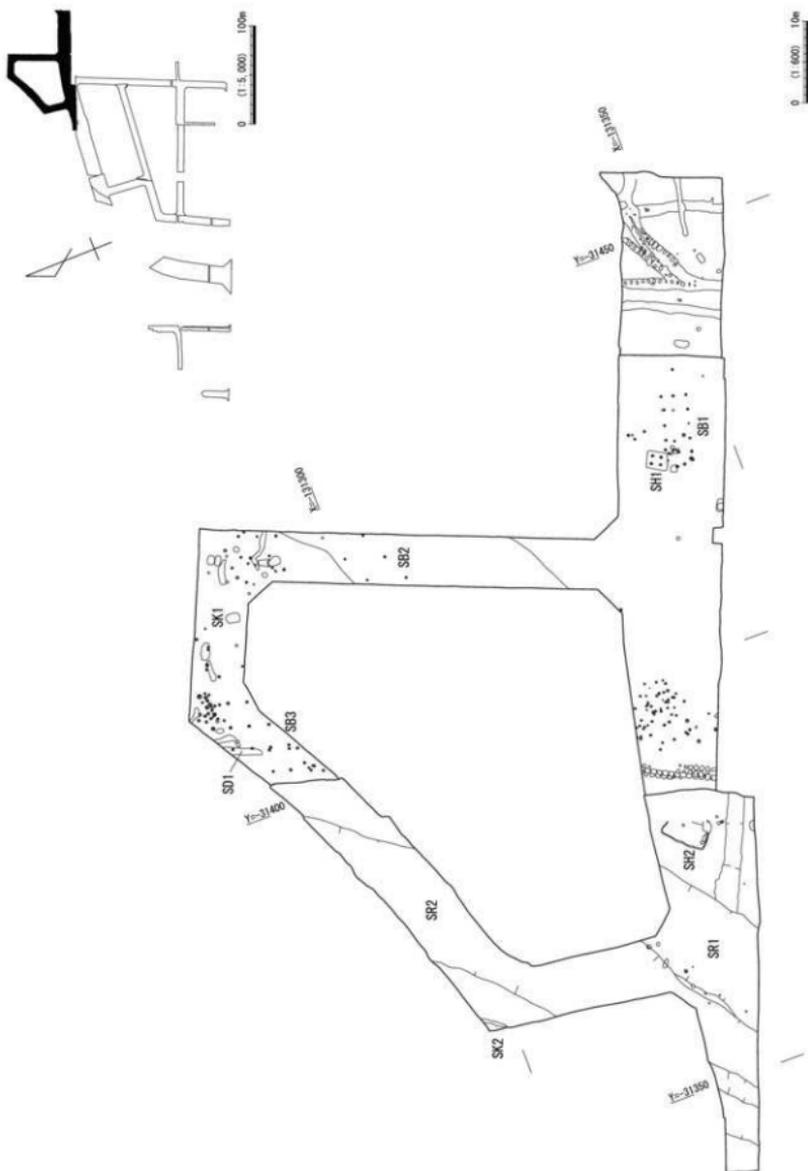


調査次数別調査区配置図 (S=1:2,000)



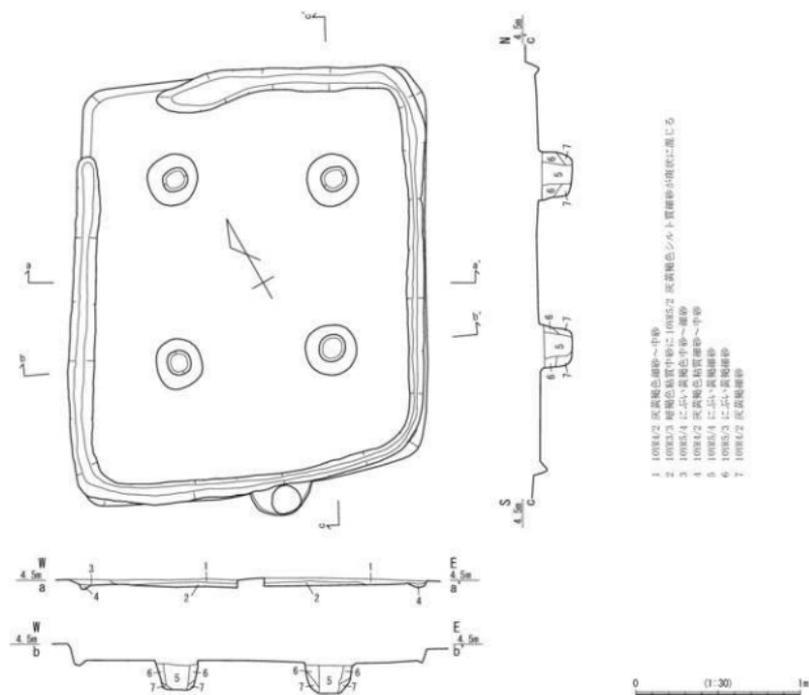
竹の前遺跡・畑田遺跡調査区全体図 (1 : 1,000)

図版7 竹の前遺跡



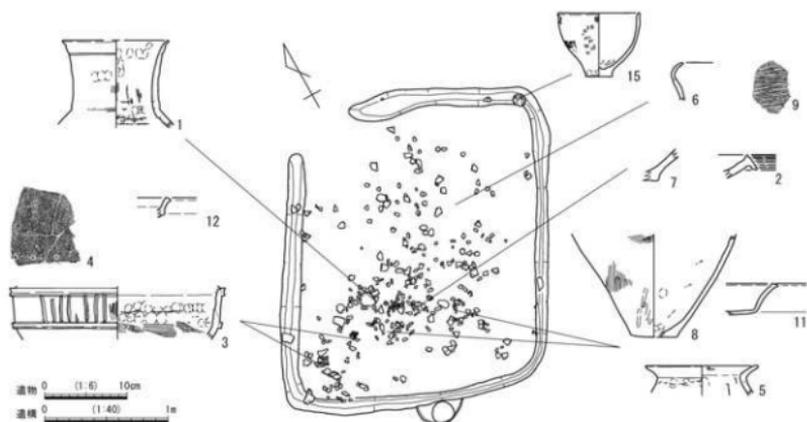
竹の前遺跡調査区全体図 (S=1:600)

図版8 竹の前遺跡



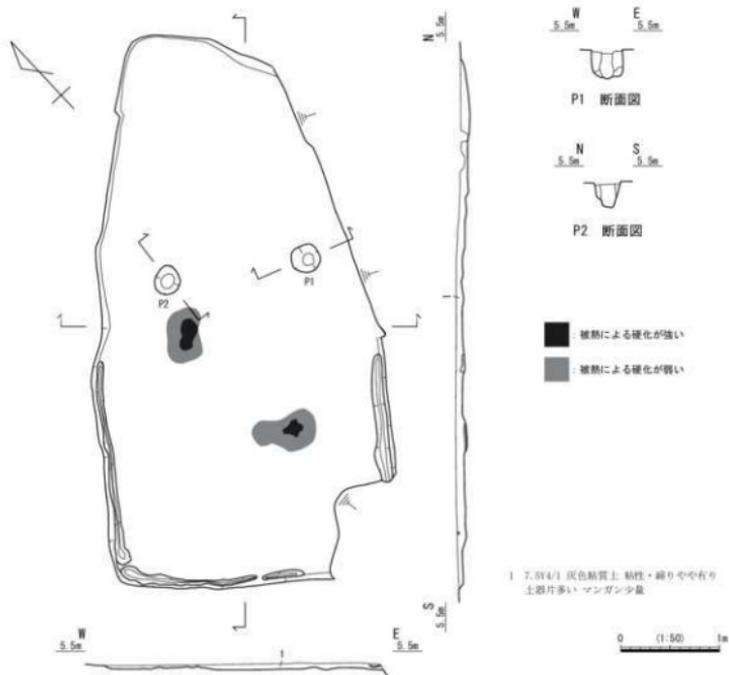
1 SH1 平・断面図 (S=1:30)

- 1 10085.2 灰褐色土層(一部)
- 2 10085.4 灰褐色土層(一部)
- 3 10085.4 土(5) 灰褐色土層(一部)
- 4 10085.2 灰褐色土層(一部)
- 5 10085.4 土(5) 灰褐色土層(一部)
- 6 10085.3 土(5) 灰褐色土層
- 7 10085.2 灰褐色土層

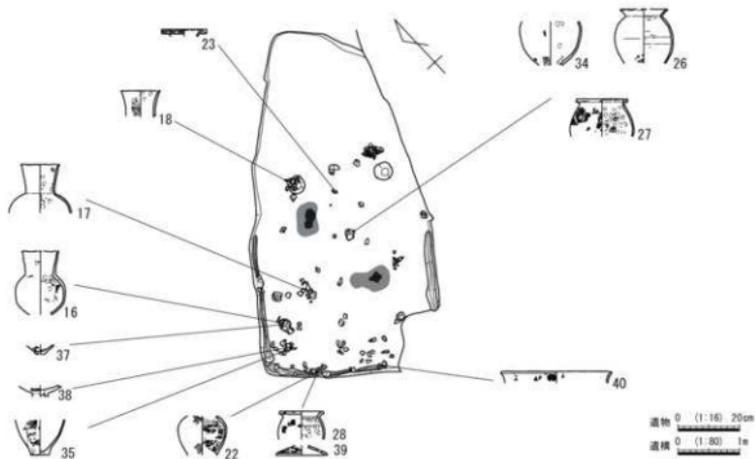


2 SH1 遺物出土状況図 (遺構 : S=1:40、遺物S=1:6)

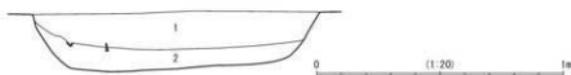
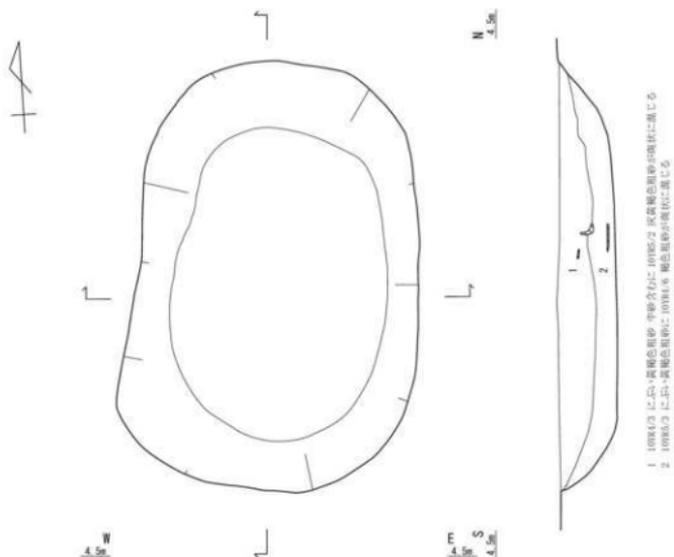
図版9 竹の前遺跡



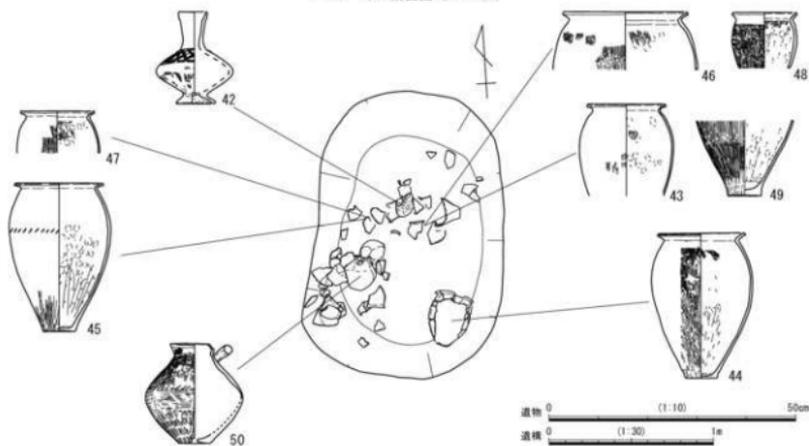
1 SH2 平・断面図・ピット断面図 (S=1:50)



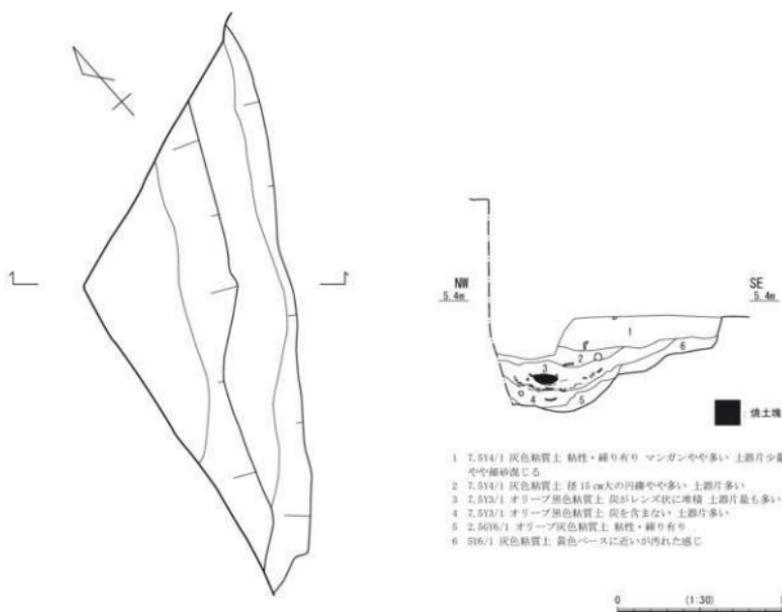
2 SH2 遺物出土状況図 (遺構S=1:80、遺物S=1:16)



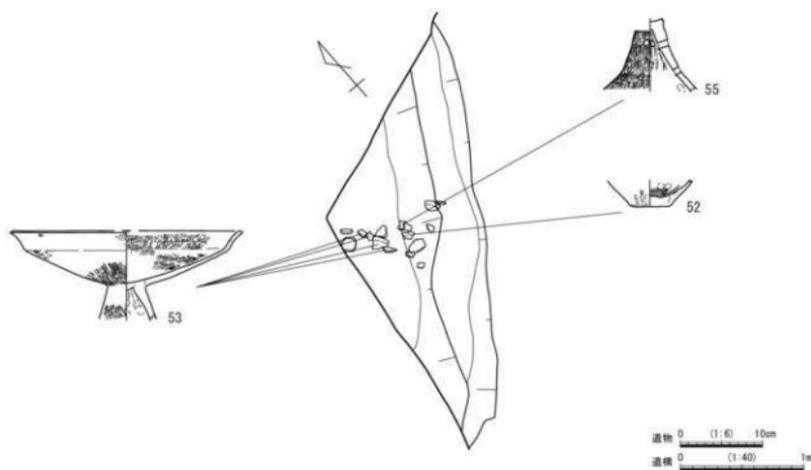
1 SK1 平・断面図 (S=1:20)



2 SK1 遺物出土状況図 (遺構S=1:30, 遺物S=1:10)

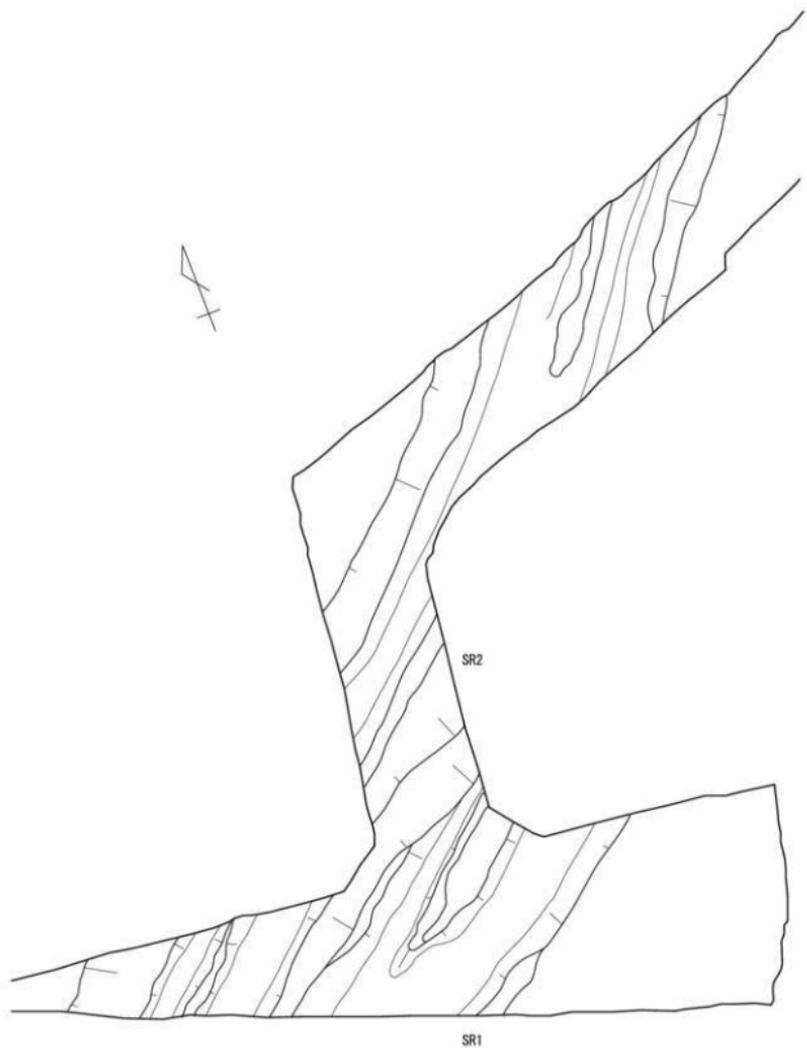


1 SK2 平・断面図 (S=1:30)



2 SK2 遺物出土状況図 (遺構S=1:40、遺物S=1:6)

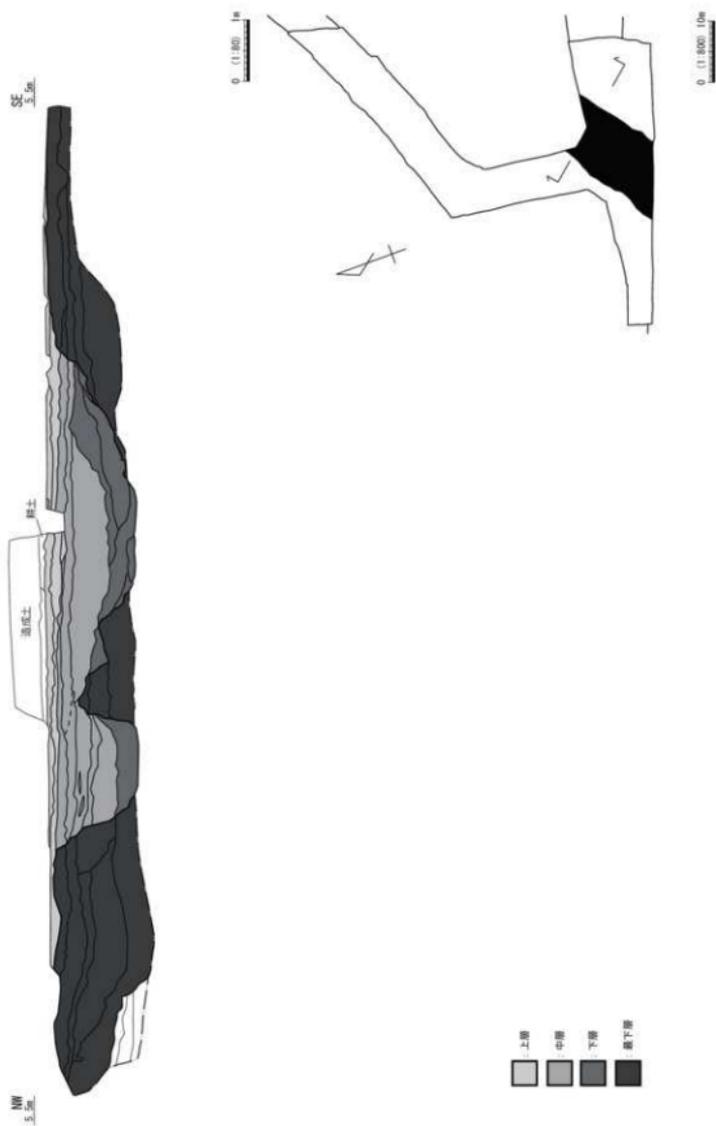
図版12 竹の前遺跡



SR1・SR2 平面図 (S=1:300)

0 (1:300) 10m

図版13 竹の前遺跡



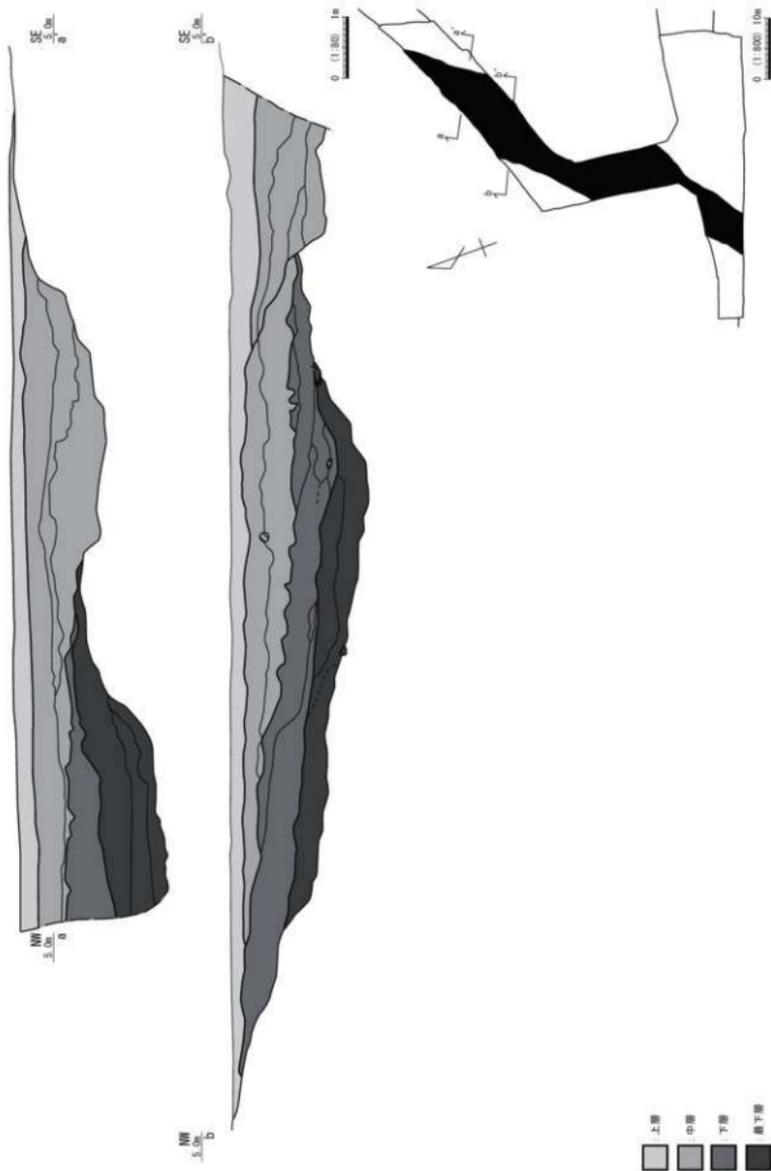
SR1 断面図 (S=1:80)

図版14 竹の前遺跡



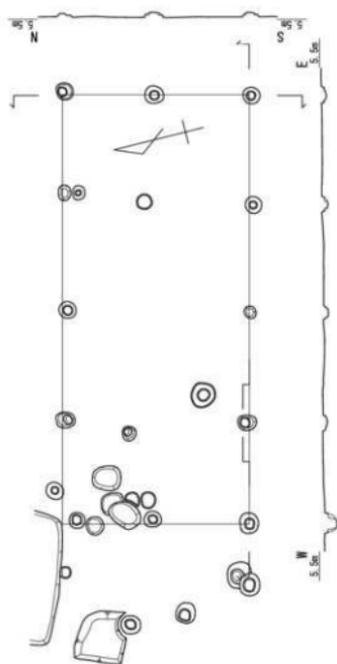
SR1 遺物出土状況図 (遺構S=1:50, 土器S=1:6, 木製品S=1:10)

図版15 竹の前遺跡

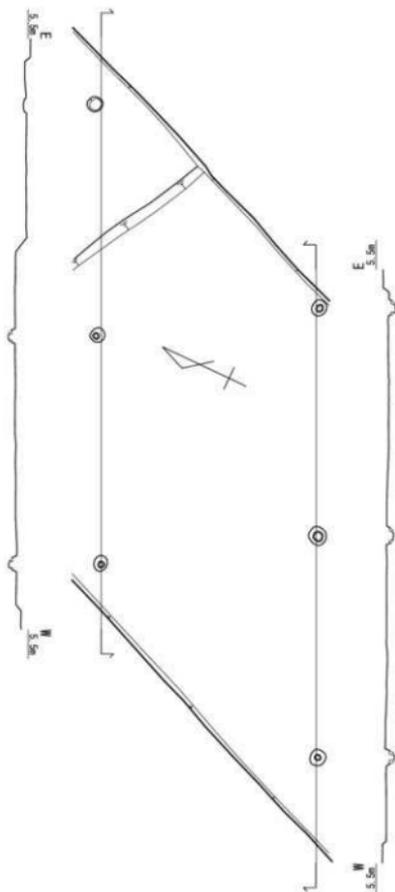


SR2 断面図 (S=1:80)

図版16 竹の前遺跡

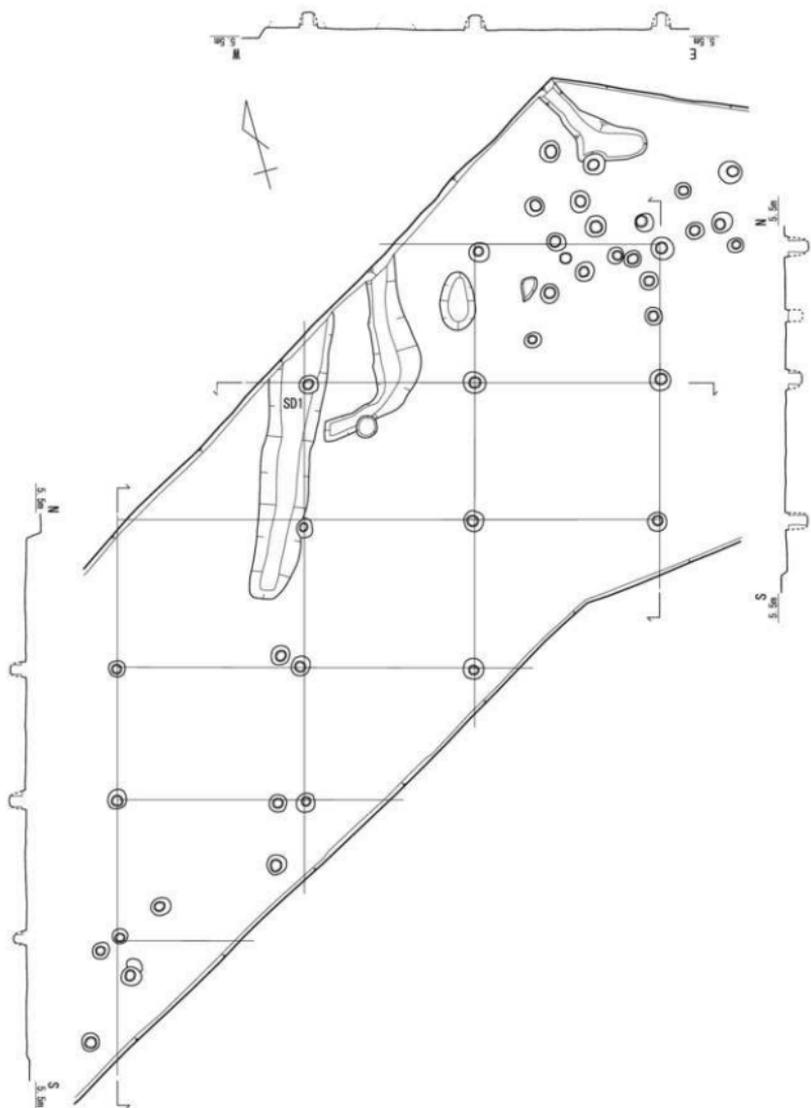


1 SB1 平・断面図 (S=1:80)



2 SB2 平・断面図 (S=1:80)

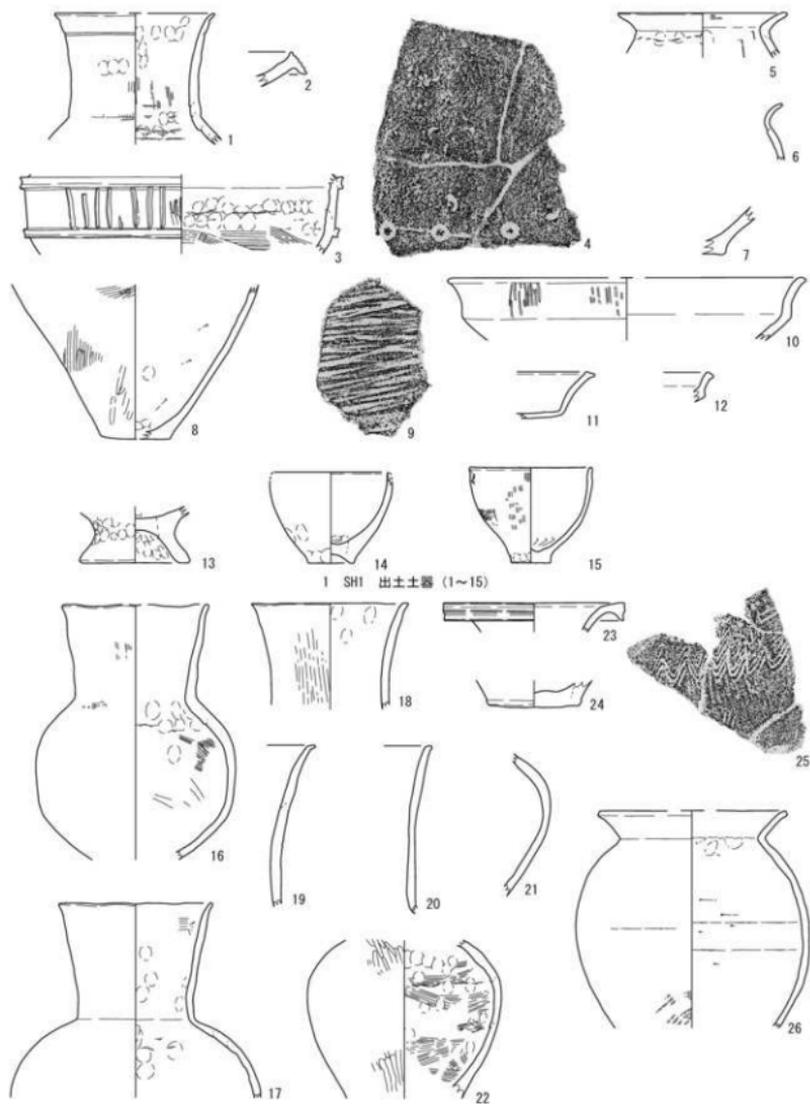
0 (1:80) 1m



0 (1:80) 1m

SB3 平・断面図 (S-1 : 80)

図版18 竹の前遺跡

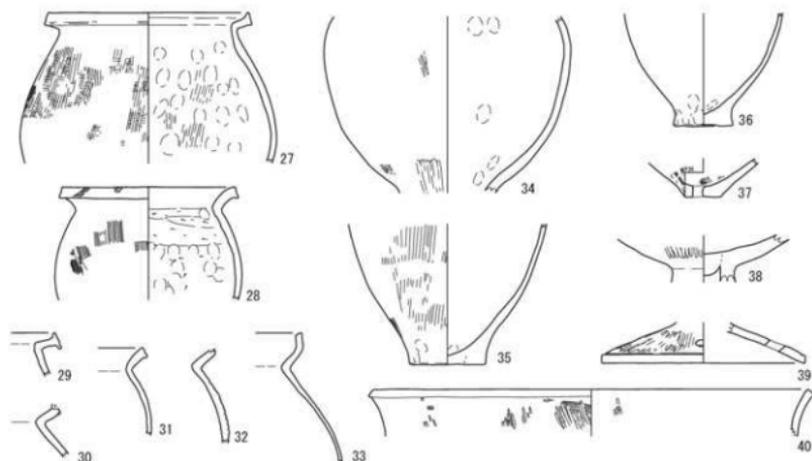


1 SH1 出土土器 (1~15)

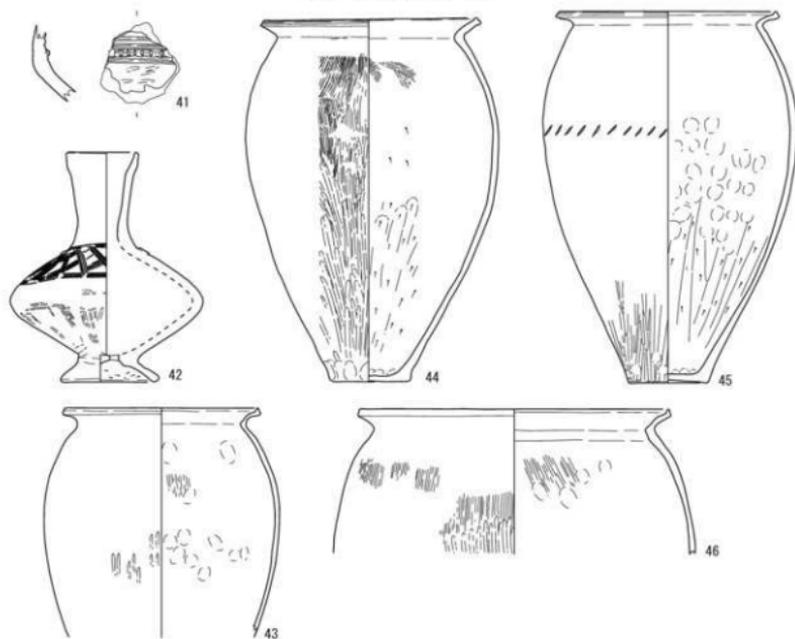
2 SH2 出土土器① (16~26)

0 4・9・25 5cm
(1・2)

0 (1・4) 10cm



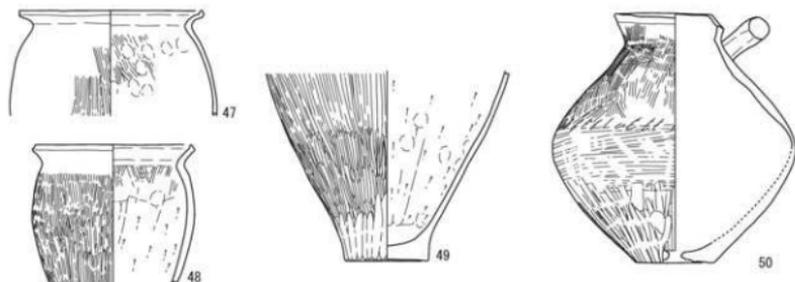
1 SH2 出土土器② (27~40)



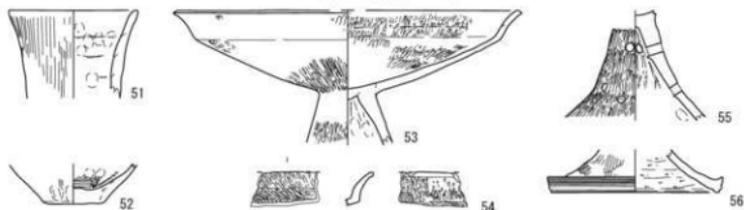
0 (1:4) 10cm

2 SK1 出土土器① (41~46)

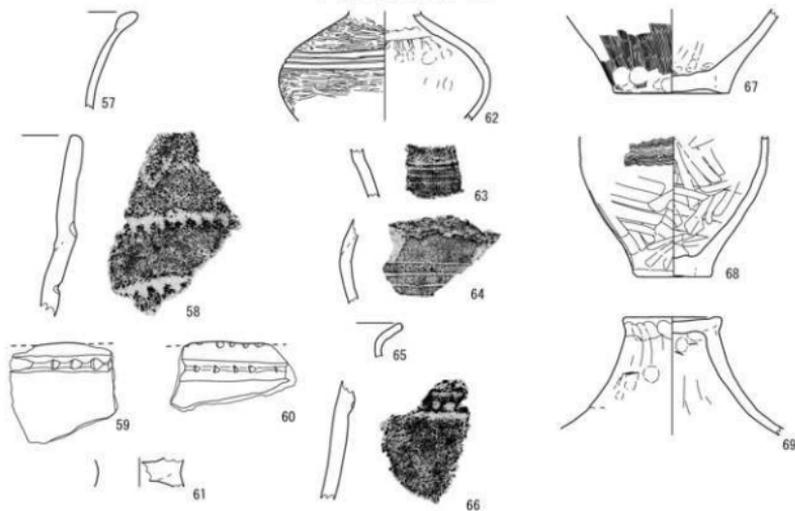
図版20 竹の前遺跡



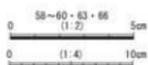
1 SK1 出土土器② (47~50)



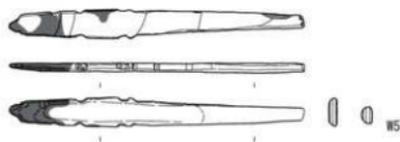
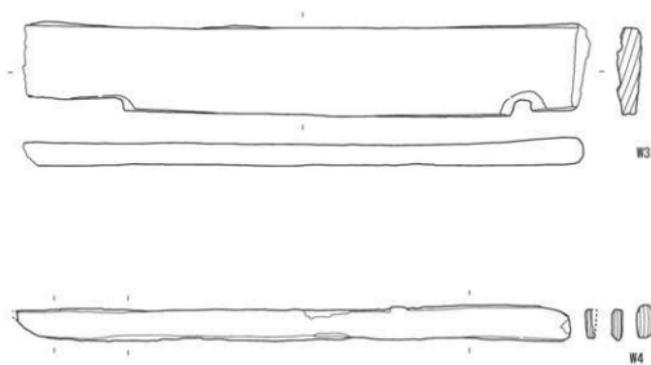
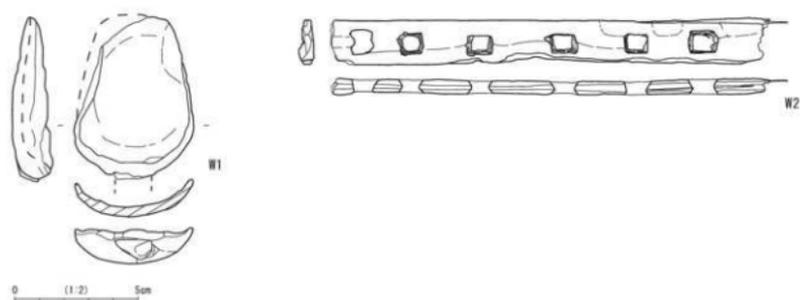
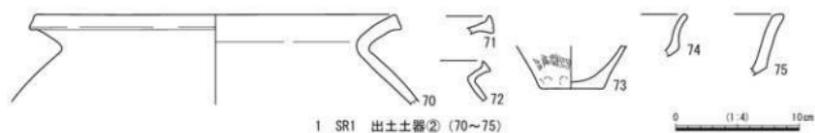
2 SK2 出土土器 (51~56)



3 SR1 出土土器① (57~69)

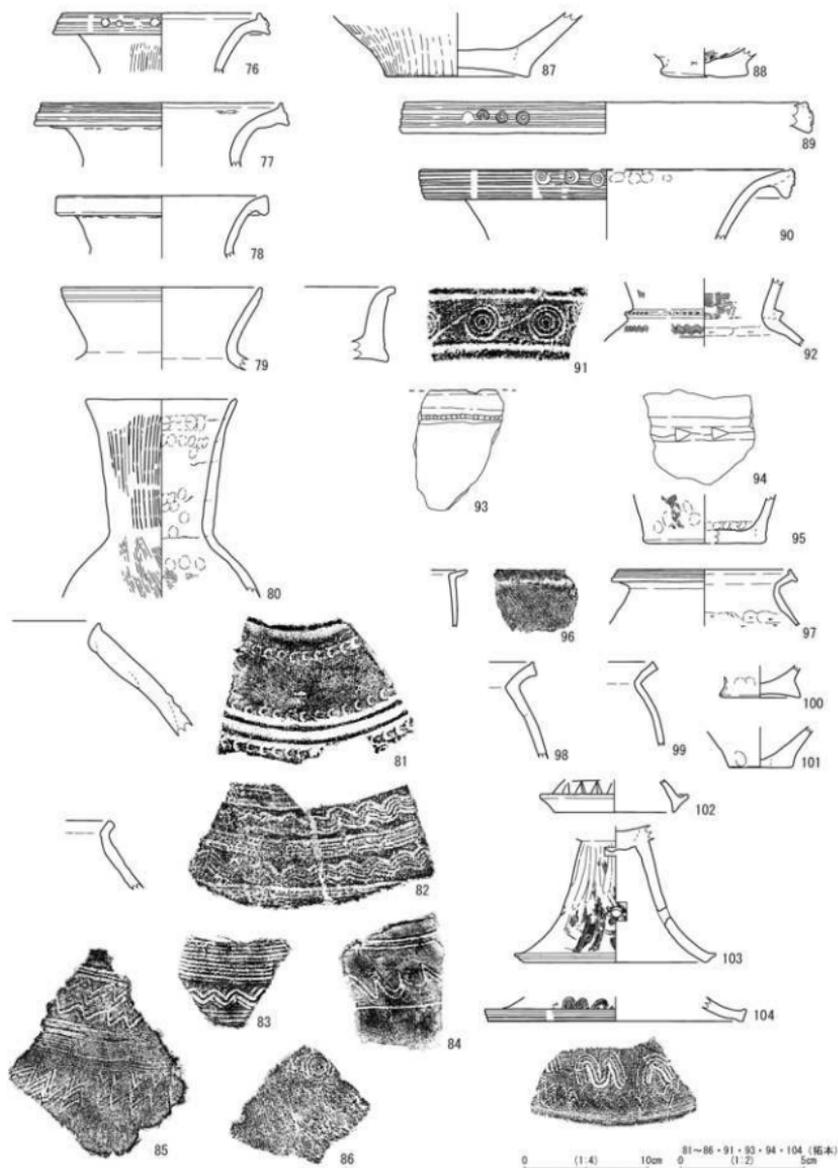


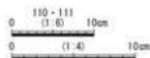
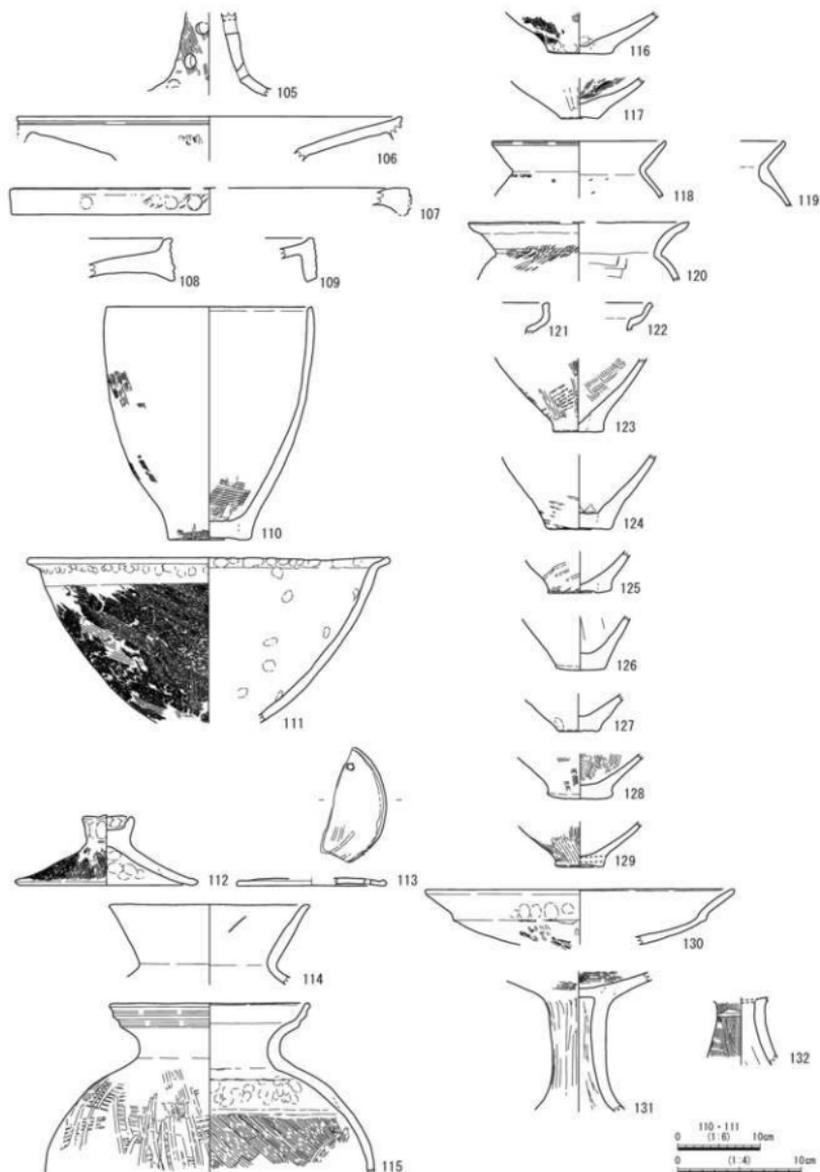
図版21 竹の前遺跡



2 SR1出土木製品 (W1~W5)

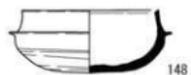
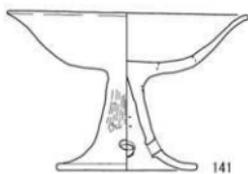
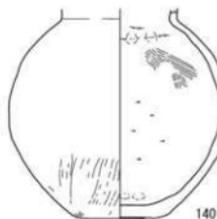
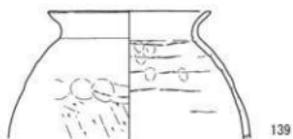
図版22 竹の前遺跡



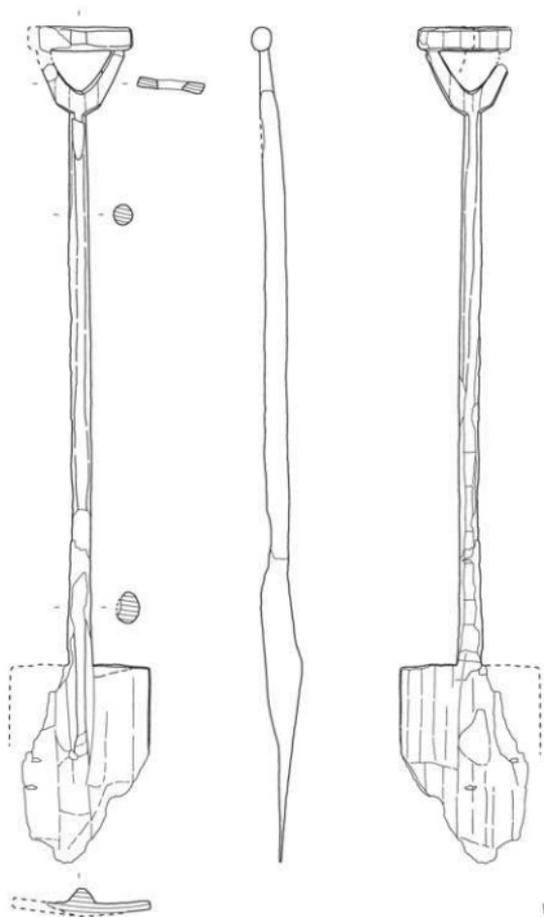


SR2 出土土器② (105~132)

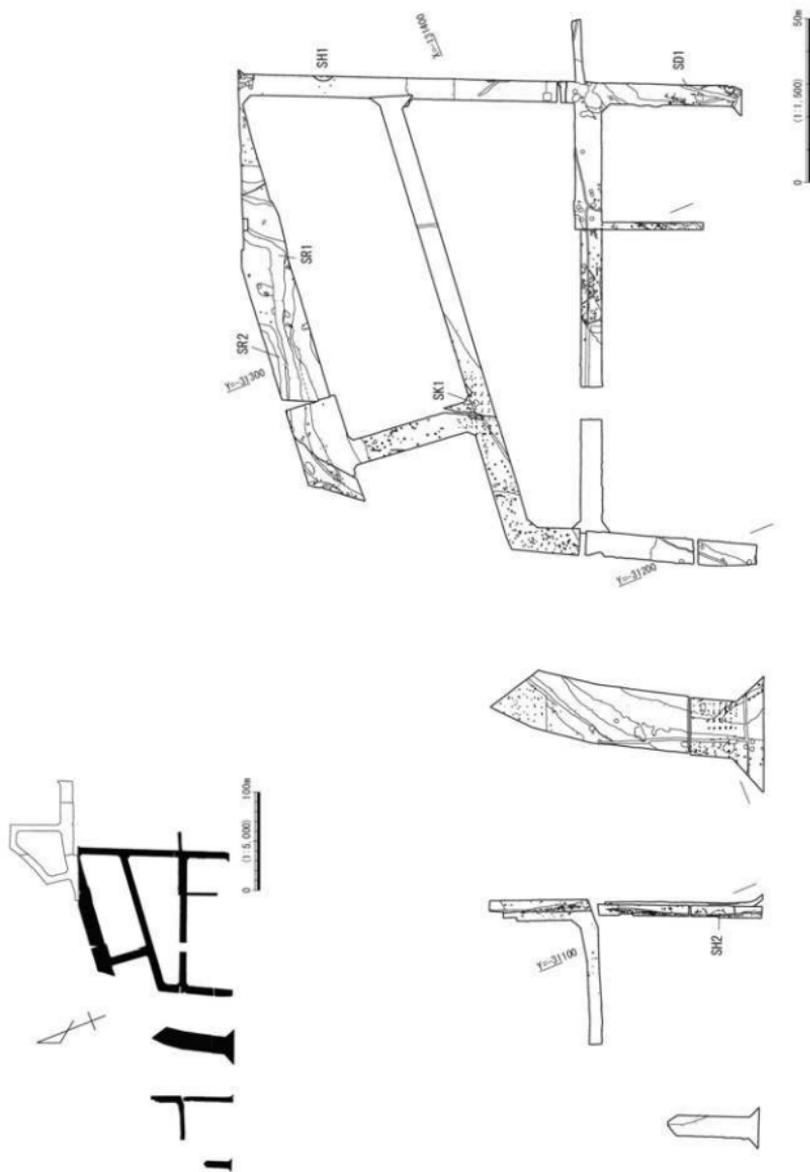
図版24 竹の前遺跡



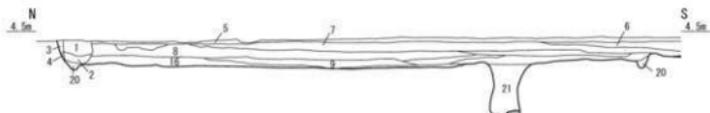
0 (1:4) 10cm



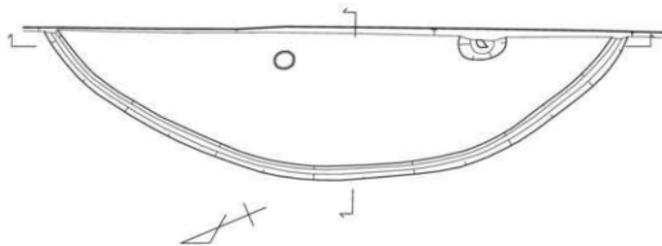
W6



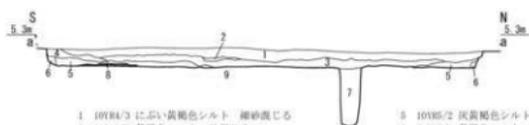
畑田遺跡調査区全体図（彌生時代）S=1:1,500



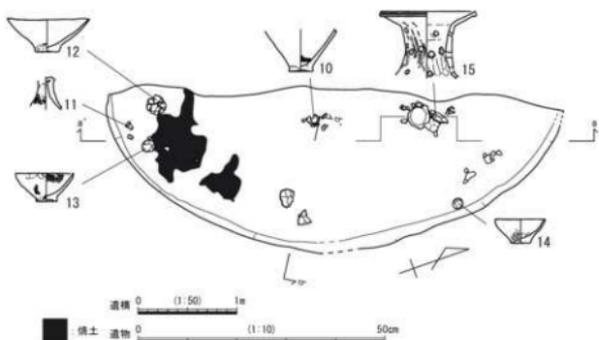
- | | |
|------------------------------------|-------------------------------------|
| 1 10YR5/4 に近い黄褐色中砂 | 12 10YR4/6 褐色細砂に 10YR4/2 灰黄褐色細砂混じる |
| 2 10YR4/4 褐色細砂 | 13 2.5Y4/2 灰黄褐色中砂～粗砂混じる |
| 3 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂 | 14 2.5Y4/2 暗灰黄色中砂 |
| 4 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂 | 15 2.5Y4/3 オリーブ褐色中砂 |
| 5 床上 | 16 5Y4/4 灰オリーブ中砂～粗砂混じる |
| 6 2.5Y5/3 黄褐色細砂 | 17 10YR4/2 灰黄褐色中砂に 10YR5/6 黄褐色細砂混じる |
| 7 2.5Y5/4 黄褐色細砂に 10YR4/6 褐色細砂混じる | 18 10YR5/3 に近い黄褐色中砂 |
| 8 10YR4/2 灰黄褐色中砂 | 19 10YR3/3 黄褐色細砂～中砂 |
| 9 10YR4/2 灰黄褐色中砂に 10YR5/8 黄褐色細砂混じる | 20 10YR3/2 黒褐色細砂 |
| 10 10YR4/2 灰黄褐色中砂 | 21 10YR1/1 褐色細砂～ 10YR3/3 暗褐色シルト質細砂 |
| 11 10YR4/6 褐色細砂 | |



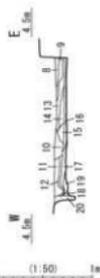
1 SH1 平・断面図 (S=1:50)



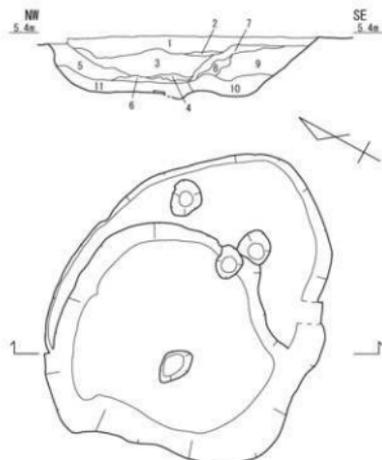
- | | |
|---------------------------|-------------------------------|
| 1 10YR4/3 に近い黄褐色シルト 細砂混じる | 5 10YR5/2 灰黄褐色シルト |
| 2 2.5Y5/3 黄褐色シルト 砂混じる | 6 2.5Y5/3 黄褐色シルト 均質 褐色土混じる |
| 3 10YR4/4 褐色シルト マンガン集積 | 7 10YR3/2 黒褐色シルト |
| 4 10YR5/4 に近い黄褐色シルト | 8 地上 |
| | 9 7.0YR3/2 黒褐色シルト マンガン集積 (地山) |



2 SH2 平・断面図 遺物出土状況 (遺構S=1:50、遺物S=1:10)



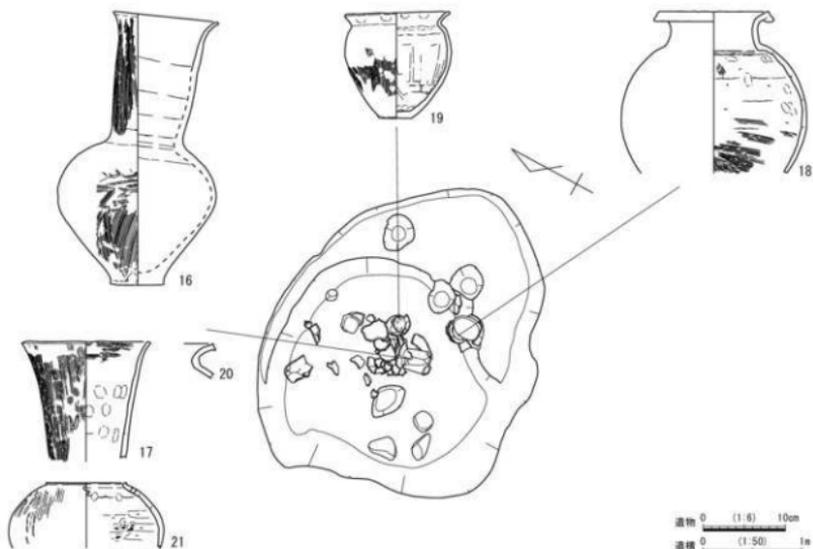
- | |
|-------------------------------|
| 1 10YR4/3 に近い黄褐色シルト 細砂混じる |
| 2 10YR4/4 褐色シルト マンガン集積 |
| 3 10YR5/4 に近い黄褐色シルト |
| 4 10YR5/4 黄褐色シルト 均質 褐色土混じる |
| 5 2.5Y5/3 黄褐色シルト マンガン集積 (地山) |
| 6 7.0YR3/2 黒褐色シルト マンガン集積 (地山) |



1 SK1 平・断面図 (S=1:30)

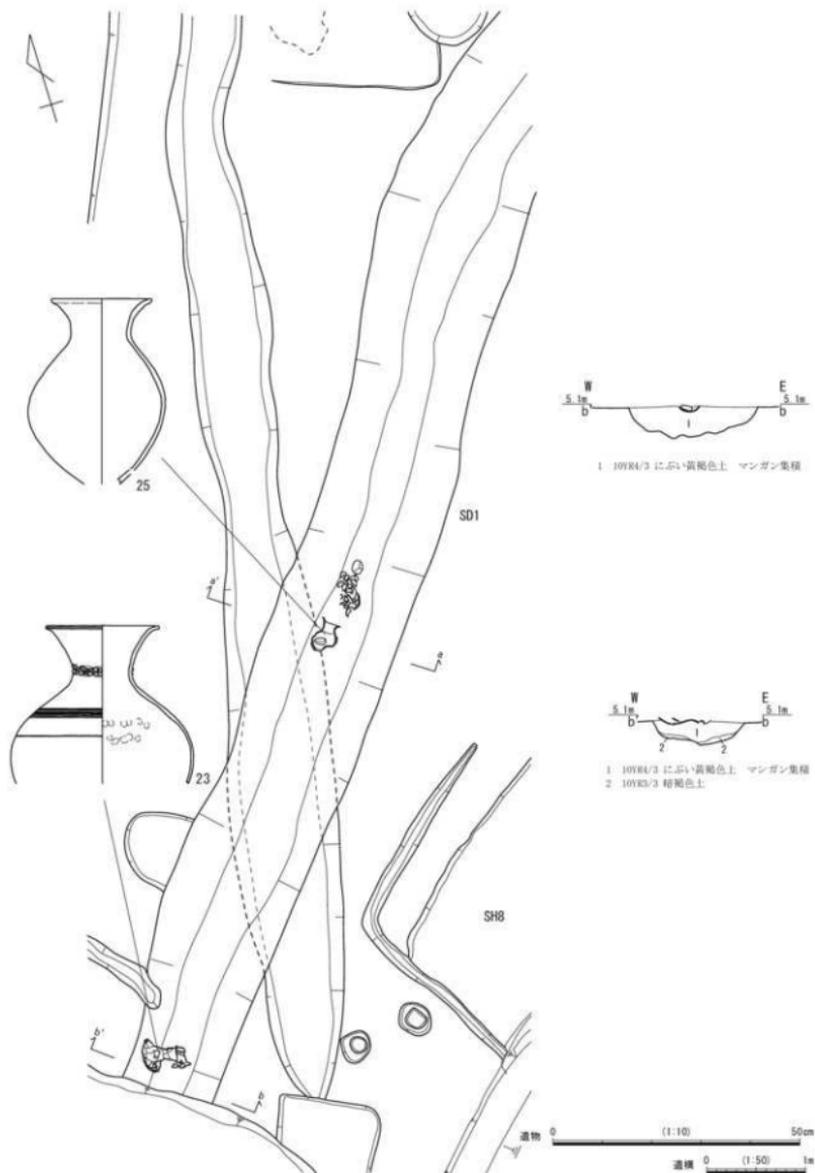
- 1 2,503/4/1 暗オリーブ灰色粘質土 粘性・練りあり
層5cm以下のベースブロック多い
- 2 015/1 黄灰色粘質土 白色砂の水平ラミナ状堆積 粘性あり 練り弱い
- 3 7,014/2 灰オリーブ色砂混じり粘質土 ベースブロックほとんど含まず
粘性・練りあり 微砂混じる
- 4 2,503/3/1 ~ 2,503/2/1 暗オリーブ灰~黒色粘質土 灰・焼土・炭層
- 5 2,503/4/1 暗オリーブ灰色砂混じり粘質土
灰が水平から傾下がりによく層状に堆積
- 6 2,503/4/1 暗オリーブ灰色砂混じり粘質土
9層よりベースブロック少量含む 灰・灰・焼土混じる
- 7 015/2 灰オリーブ色粘質土 粘性・練りあり 9層に近い
- 8 2,503/3/1 ~ 2,503/2/1 暗オリーブ灰~黒色粘質土 灰・焼土・炭層
- 9 2,503/4/1 暗オリーブ灰色砂混じり粘質土 粘性・練りあり
層5cm以下のベースブロック多く含む 微砂混じる
- 10 2,503/4/1 暗オリーブ灰色砂混じり粘質土 9層よりベースブロック少量
- 11 2,503/4/1 暗オリーブ灰色砂混じり粘質土 9層よりベースブロック多い

0 (1:30) 1m



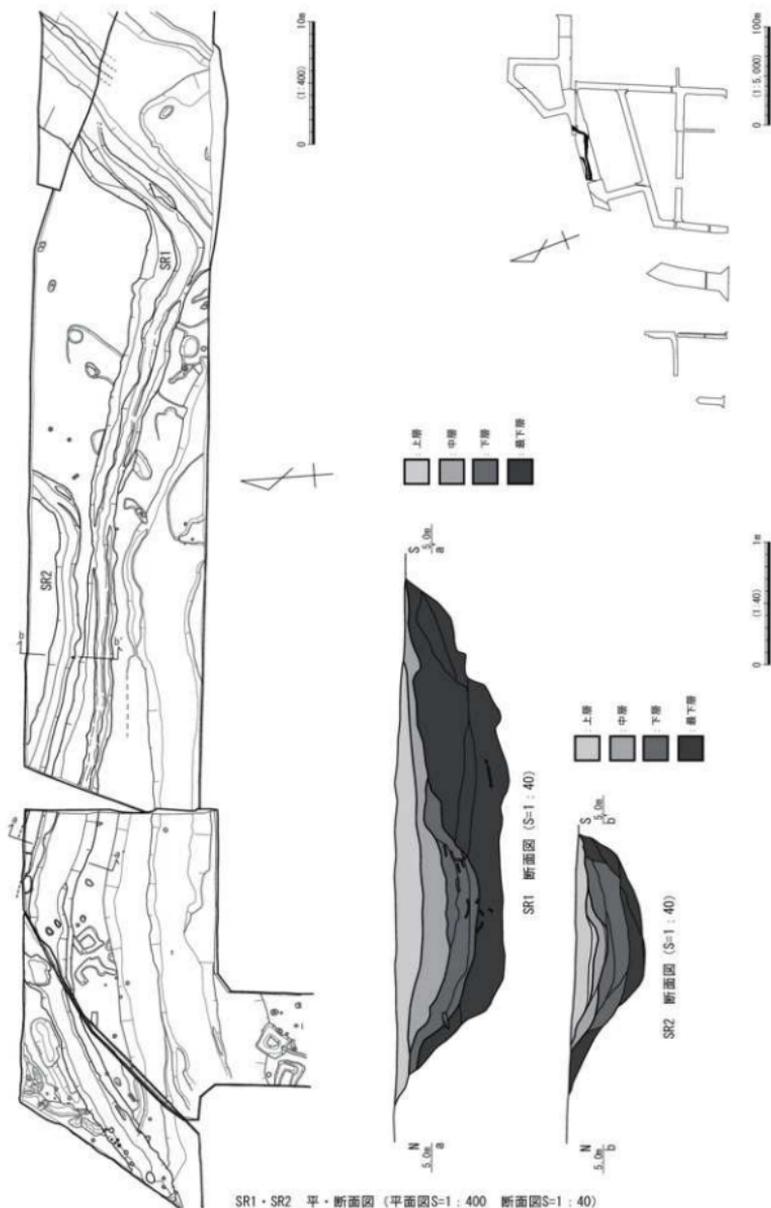
2 SK1 遺物出土状況図 (遺構S=1:30、遺物S=1:6)

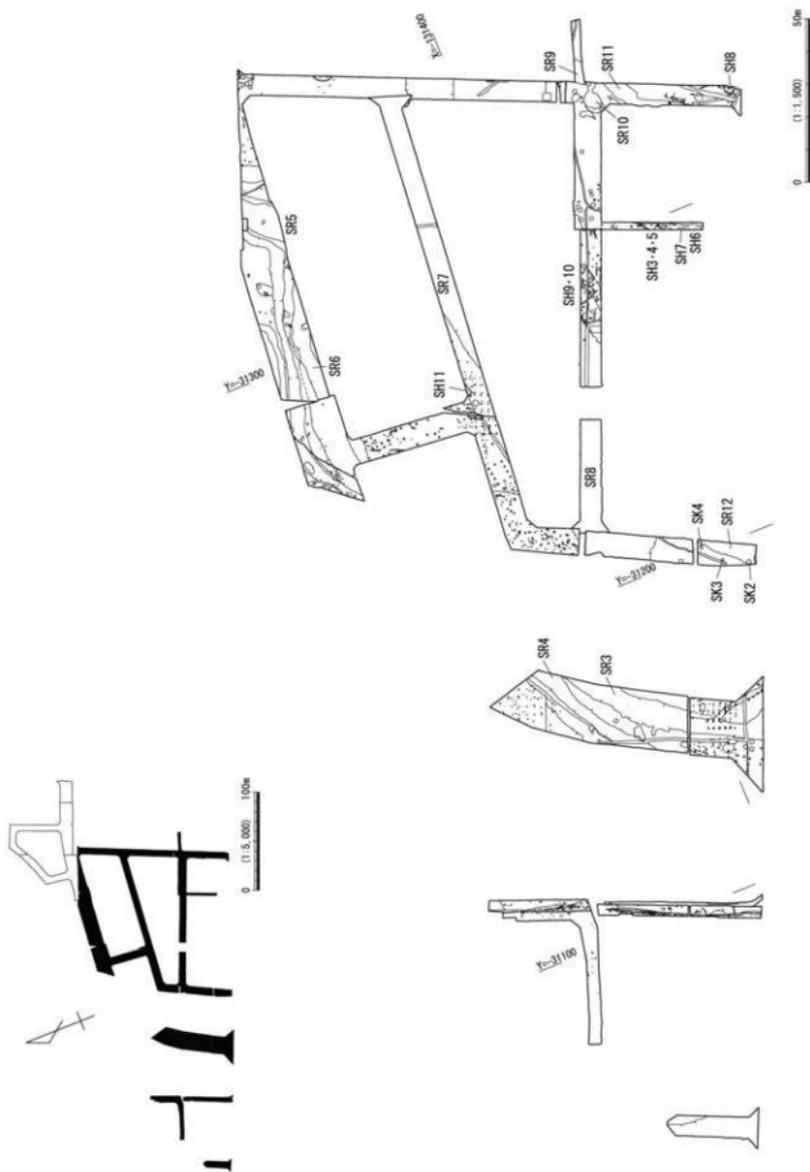
遺物 0 (1:6) 10cm
遺構 0 (1:30) 1m



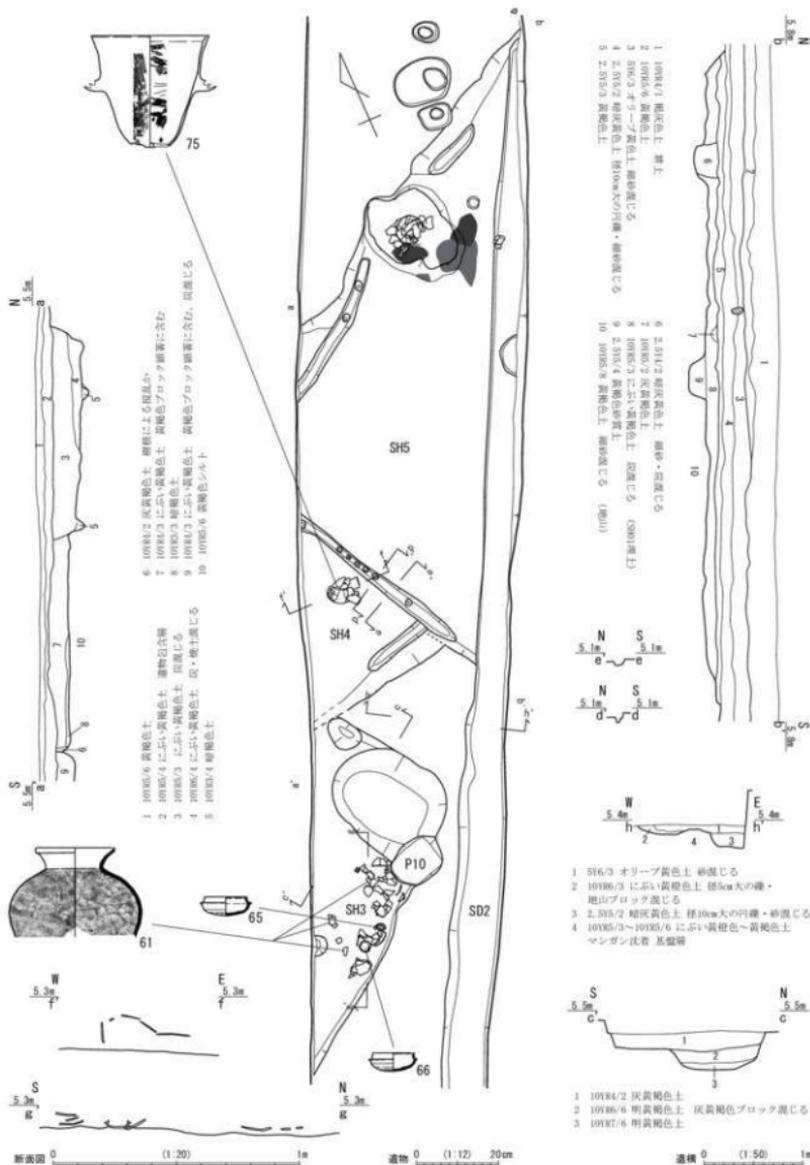
SD1 平・断面図 遺物出土状況図 (遺構S=1:50, 遺物S=1:10)

図版30 畑田遺跡

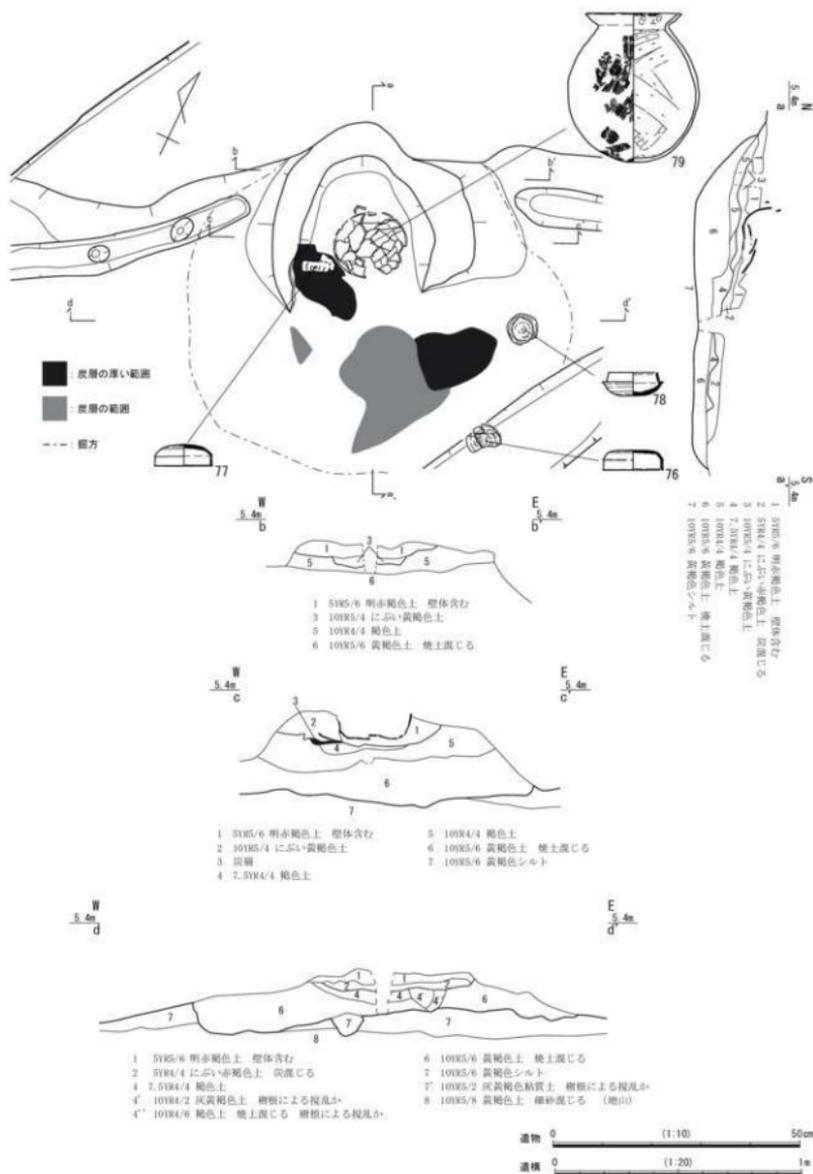




畑田遺跡調査区全体図（古墳時代）S=1:1,500

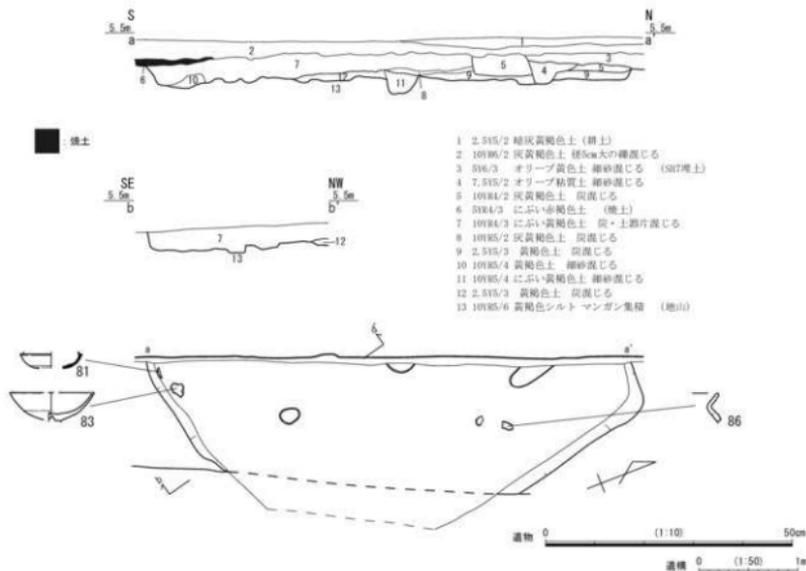


SH3・SH4・SH5・SD2 平・断面図 遺物出土状況図(遺構S=1:50、遺物出土状況断面図S=1:20、遺物S=1:12)

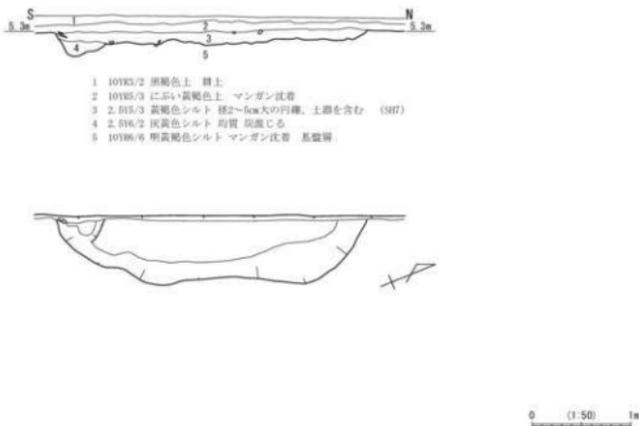


SH5 カマド 平・断面図 遺物出土状況図 (遺構S=1:20、遺物S=1:10)

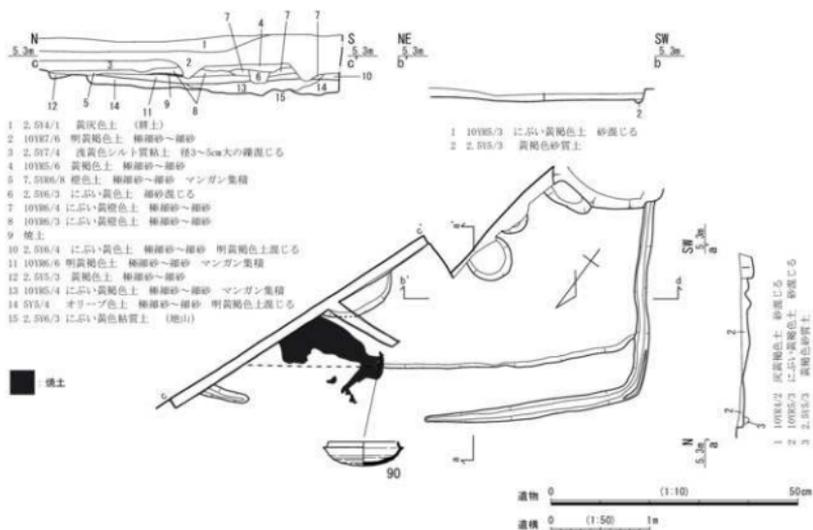
図版34 畑田遺跡



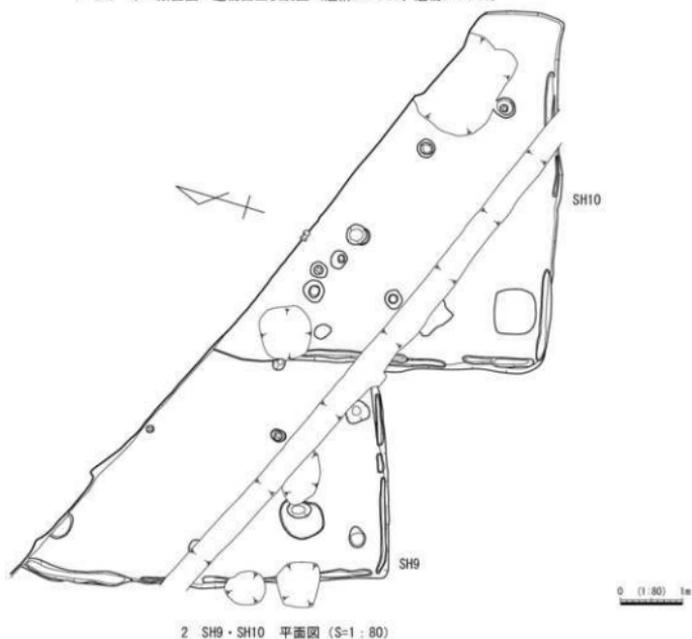
1 SH6 平・断面図 遺物出土状況図 (遺構S=1:50, 遺物S=1:10)

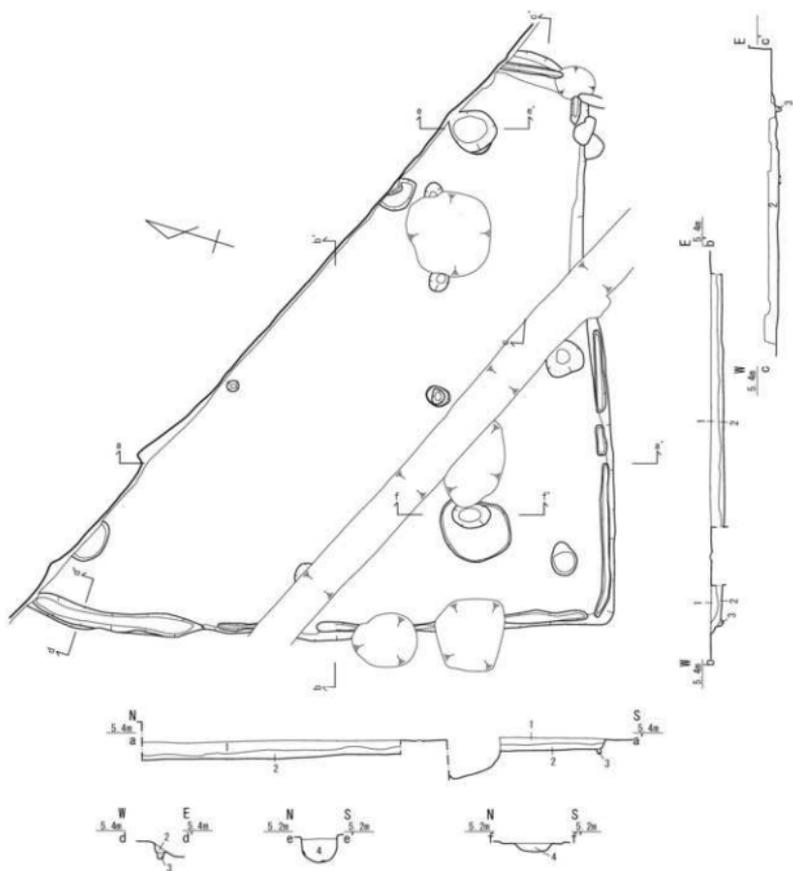


2 SH7 平・断面図 (S=1:50)

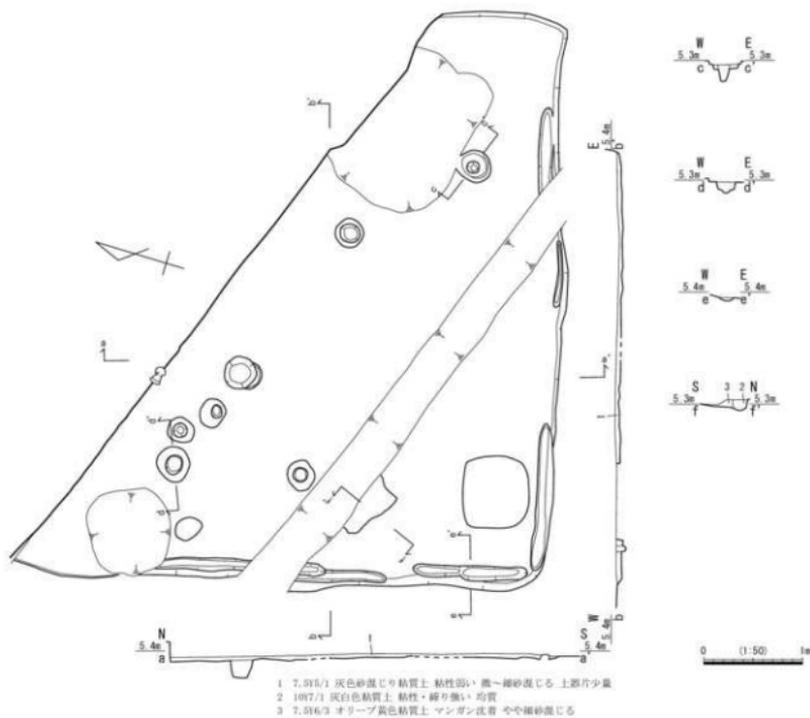


1 SH8 平・断面図 遺物出土状況図 (遺構S=1; 50、遺物S=1; 10)

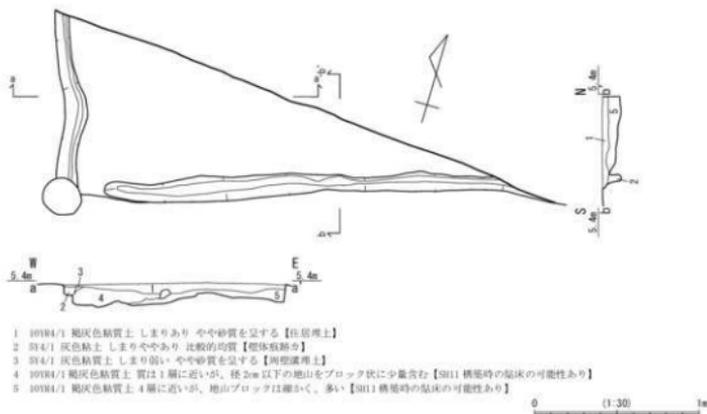




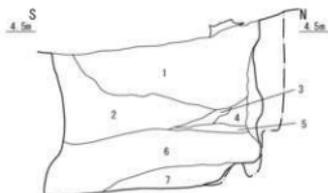
- 1 7.514/1 灰色粘質土 しまりややあり 土器片少量含む【住居礎上】
- 2 7.514/1 灰色粘質土 基本は1層と同じだが、径5cm以下の地山をブロック状に多く含む【住居礎上土】
- 3 7.516/2 灰オリーブ色粘質土 しまりややあり 比較的均質【埋蔵遺埋土】
- 4 514/2 灰オリーブ色粘質土 しまりあり 土器小片含む【柱穴埋土】



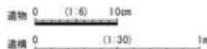
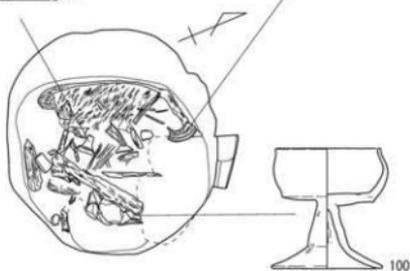
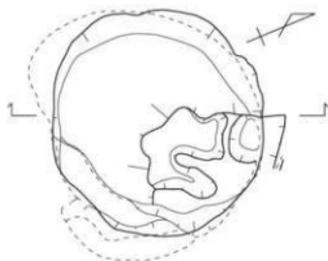
1 SH10 平・断面図 (S=1:50)



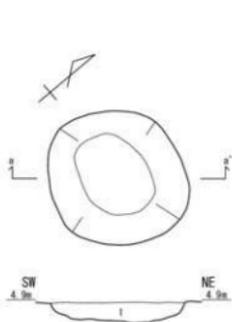
2 SH11 平・断面図 (S=1:30)



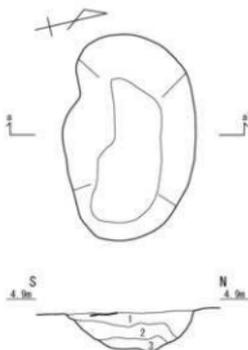
- 1 5G3/1 暗緑灰色粘質土 粘性・締りややあり
種1cm大の炭化粒 ベースブロック少量含む 土器・有機質含む
- 2 5G3/1 暗緑灰色粘質土 粘性・締りやや強い
種1cm大のベースブロック少量含む 土器・有機質含む
- 3 5G3/1 暗緑灰色砂混じり粘質土 粘性・締り弱い 粗砂混じる
- 4 10Y7/2 灰白色砂質土 ベースブロック含む
- 5 5G3/1 暗緑灰色粘質土 粘性強い 締りあり 均質
- 6 8A/0 灰色砂混じり粘質土 粘性・締りあり 細砂へやや粗砂含む
- 7 7.0Y7/1 灰白色砂質土 粗砂 締り弱い



1 SK2 平・断面図 (S=1:30) 遺物出土状況図 (遺構S=1:30 遺物S=1:6)



1 5G3/1 暗緑灰色粘質土 しまりややあり 径5mm以下の炭化粒を少量含む SK2の1層に近5%

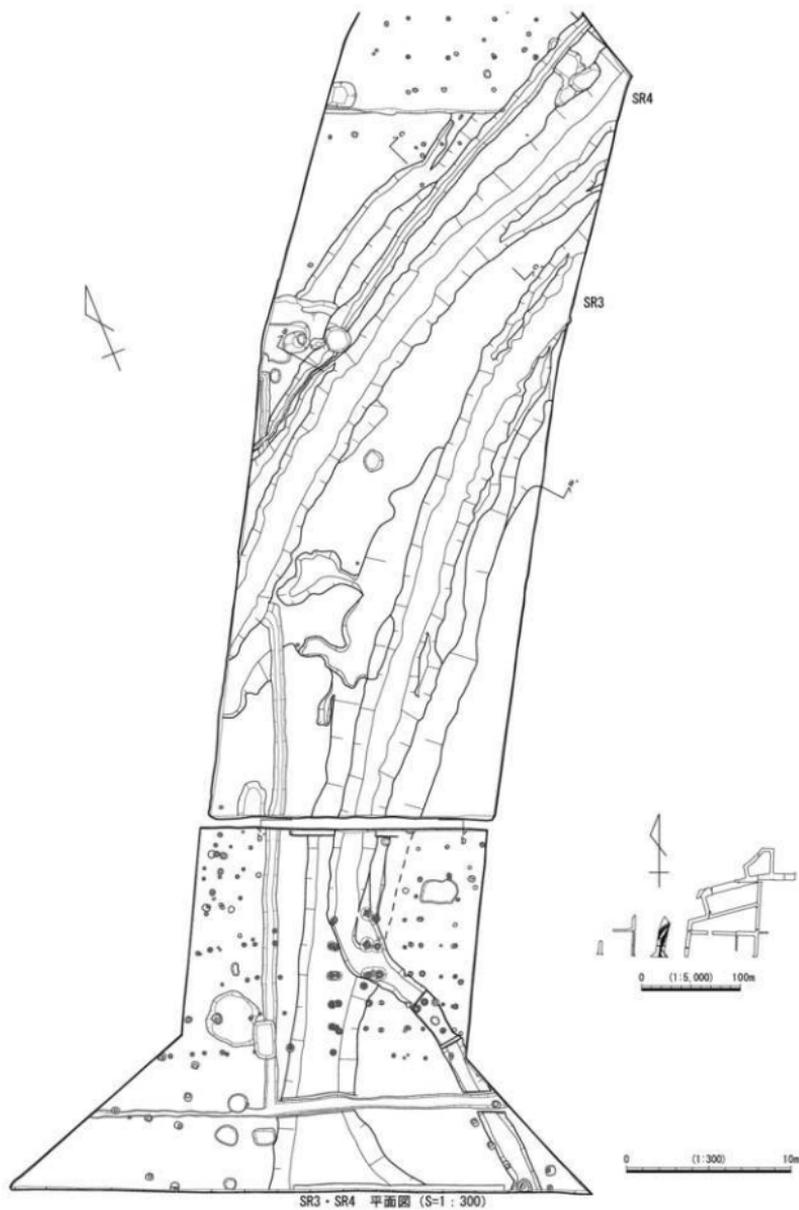


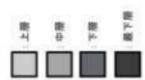
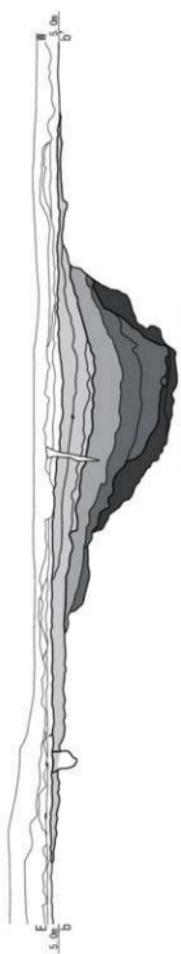
- 1 5G3/1 暗緑灰色粘土 粘性・しまりあり
色調は1・2層に近5%の比較的均質
- 2 5G3/1 暗緑灰色粘質土 しまりあり
径5mm以下の炭化粒を含む SK2の1層に近い
- 3 5G3/1 暗緑灰色粘質土 1層に近いが、炭化粒は少なく、やや砂質を呈する



2 SK3 平・断面図 (S=1:30)

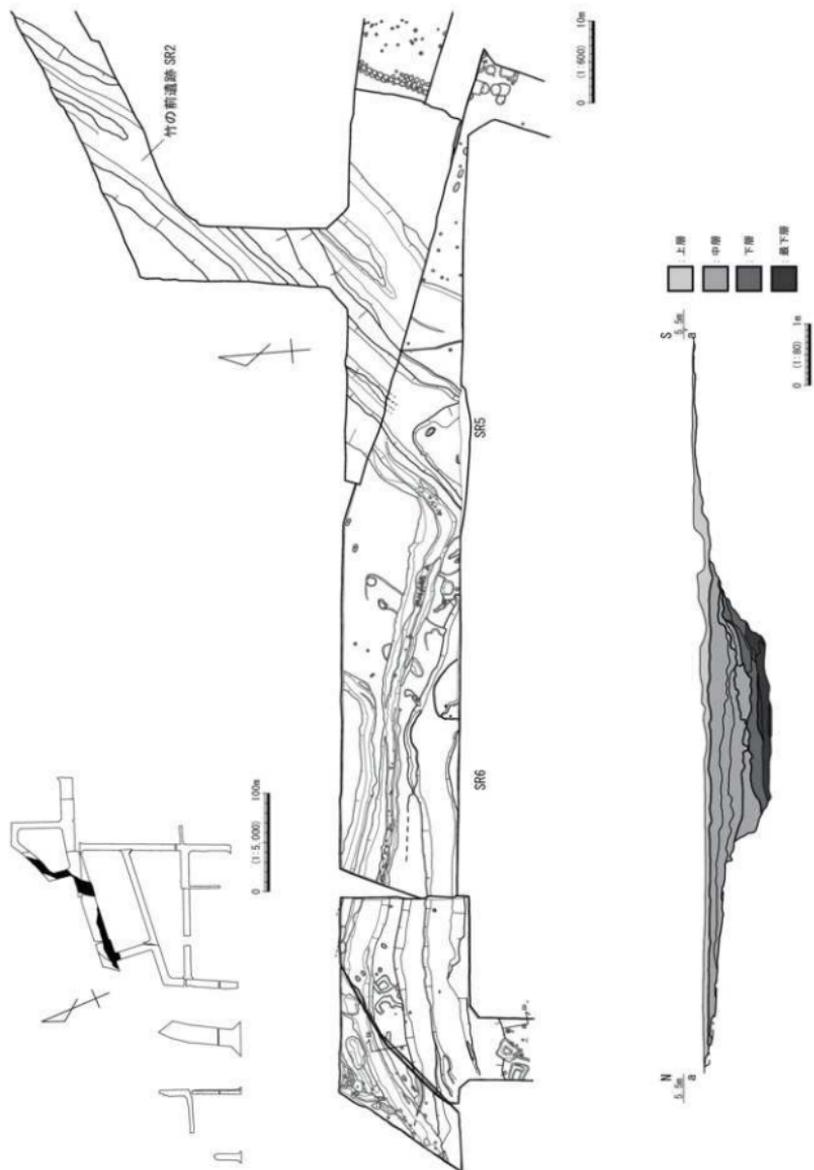
3 SK4 平・断面図 (S=1:30)





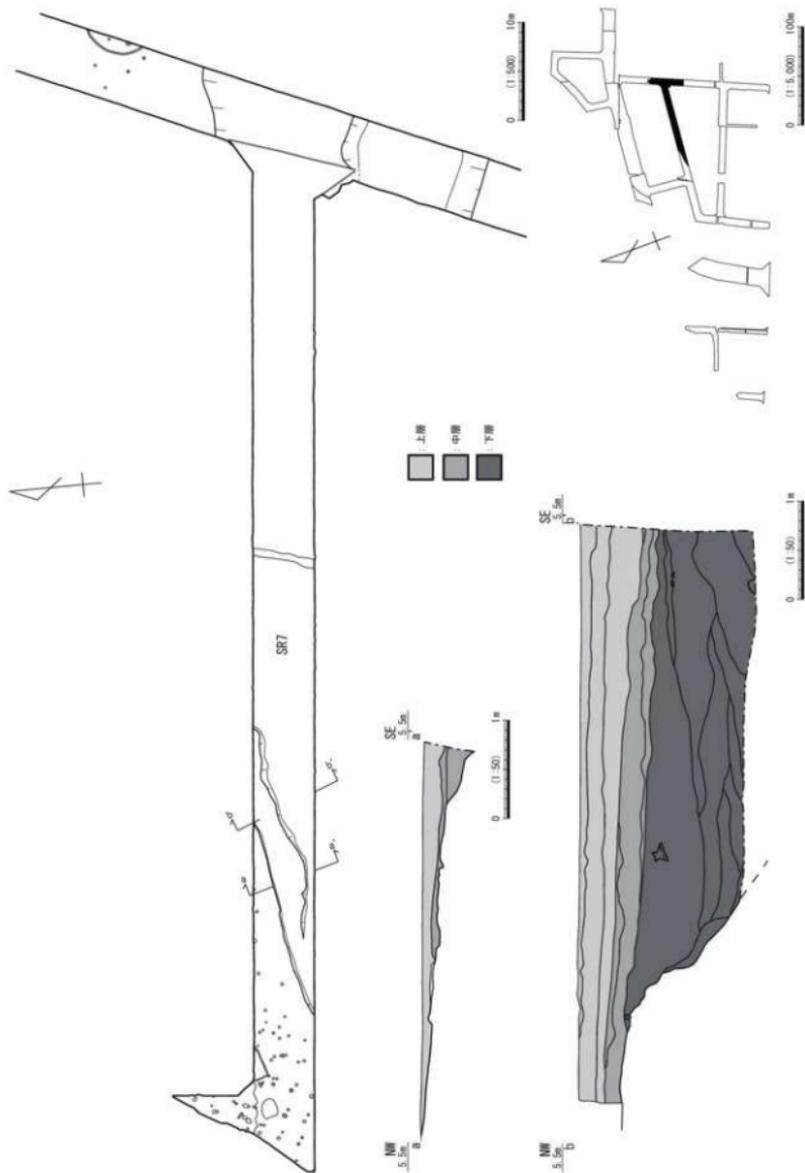
SR3・SR4 断面図 (S=1:70, S=1:50)

図版42 畑田遺跡

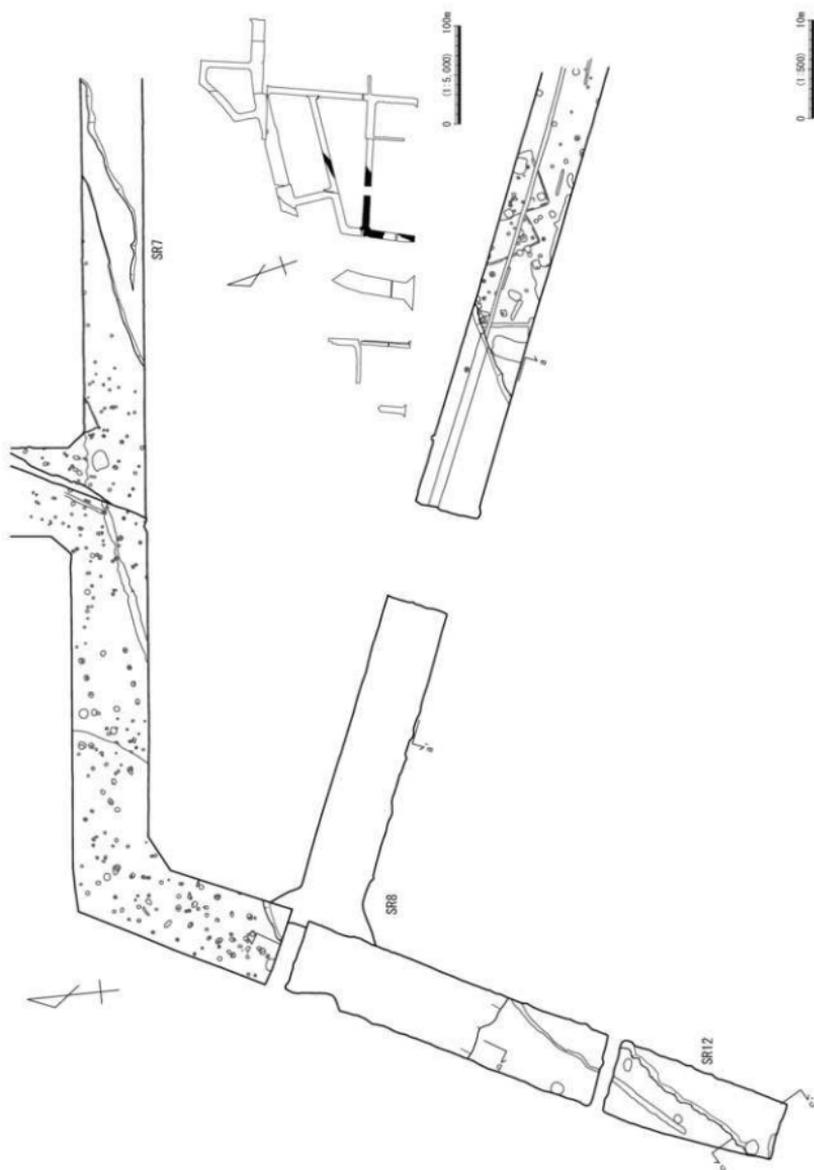


SR5・SR6、竹の前遺跡SR2 平・断面図（平面図S-1：600、断面図S-1：80）

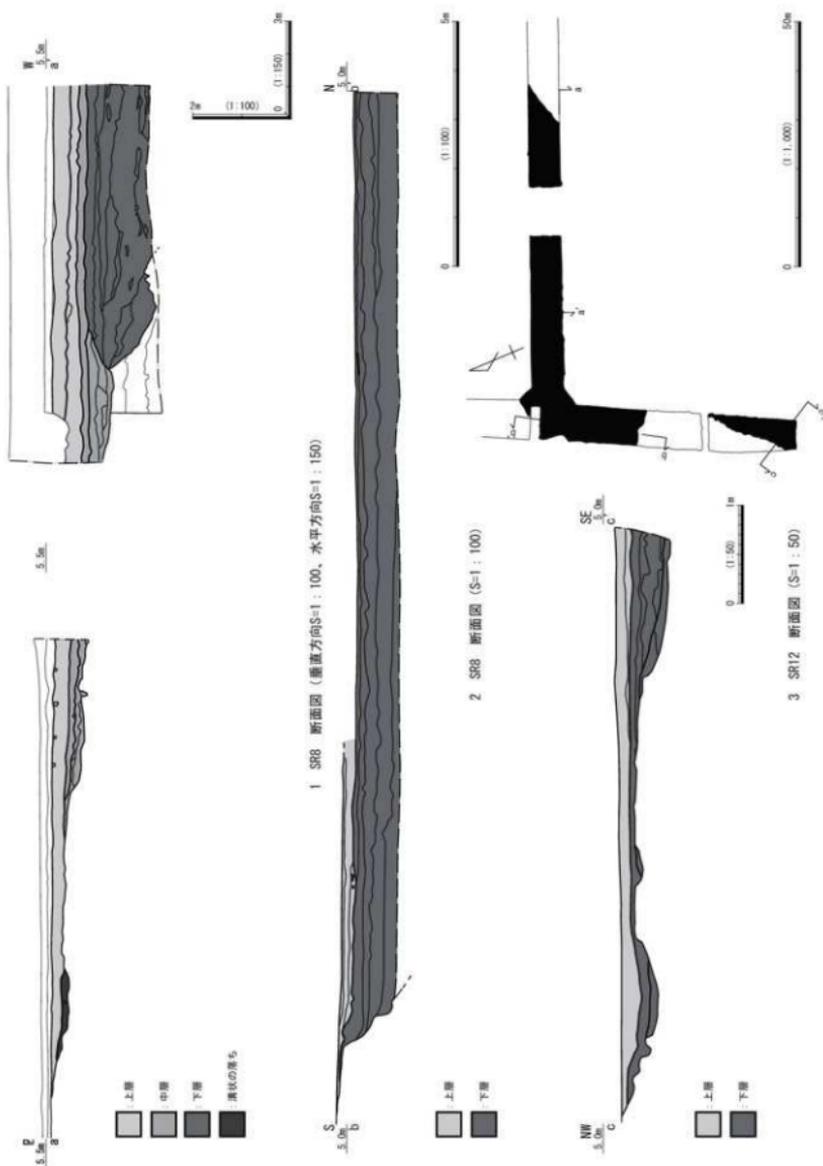
図版43 畑田遺跡



SR7 平・断面図 (平面図S-1: 500、断面図S-1: 50)

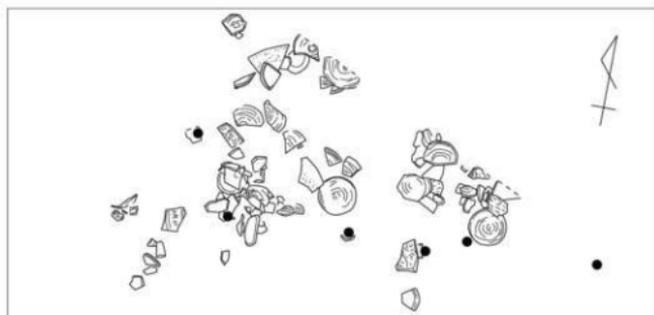
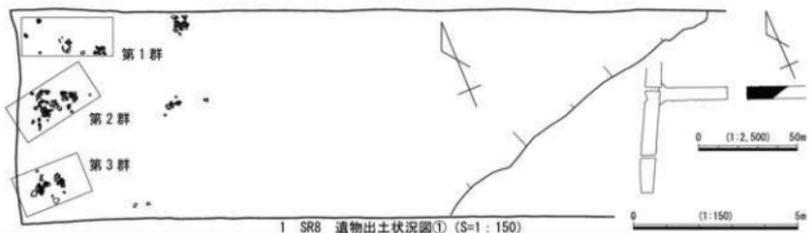


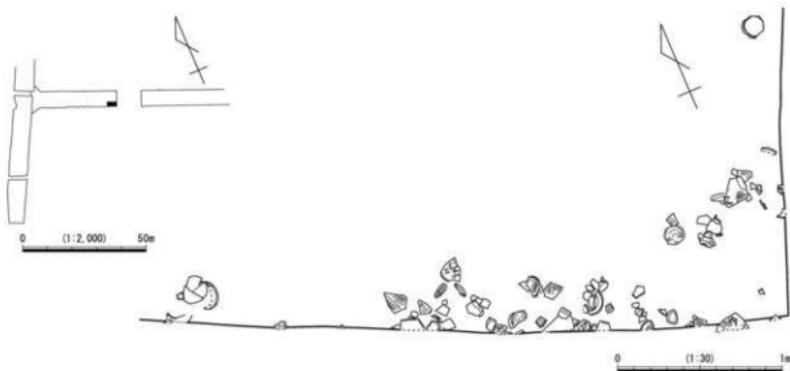
SR7・SR8・SR12 平面図 (S=1:500)



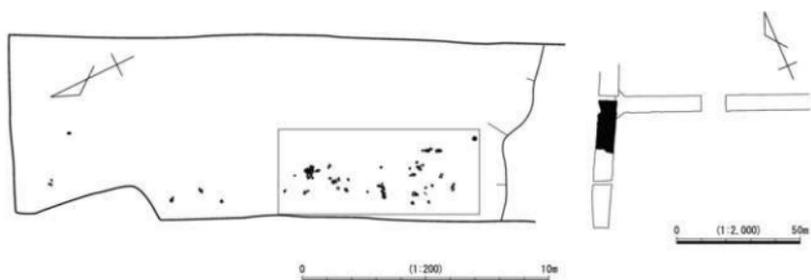
SR8 断面図 (垂直方向S=1:100・水平方向S=150、S=1:100)

SR12 断面図 (S=1:50)

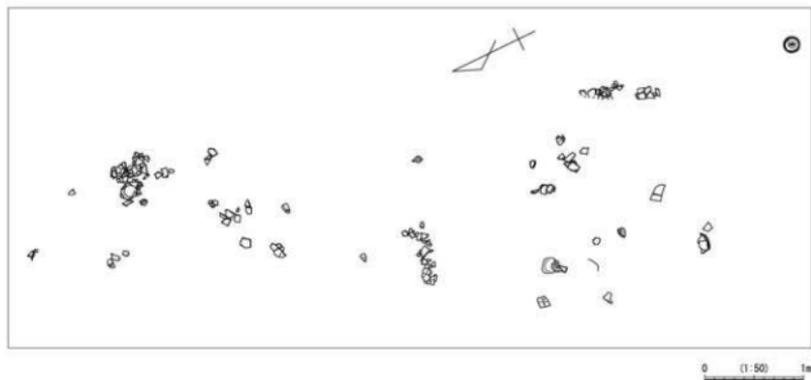




1 SR8 遺物出土状況図② (S=1:30)

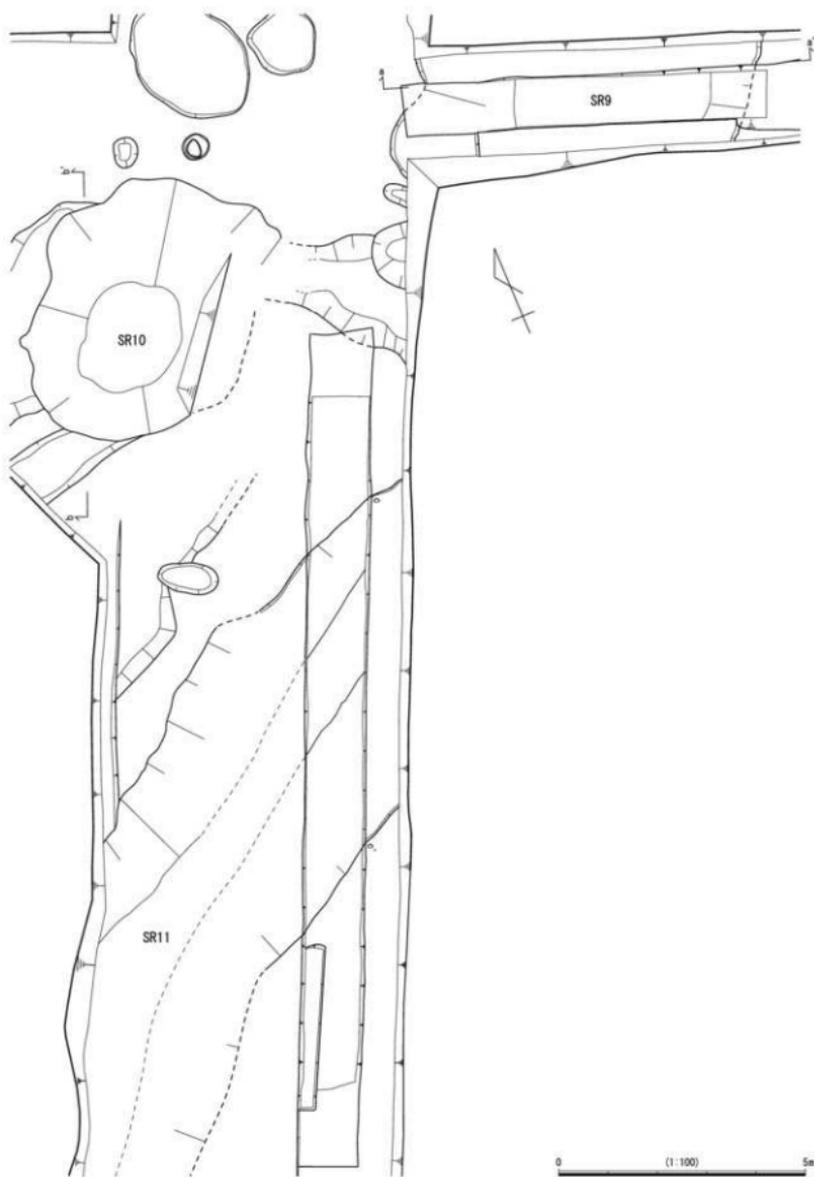


2 SR8 遺物出土状況図③ (S=1:200)

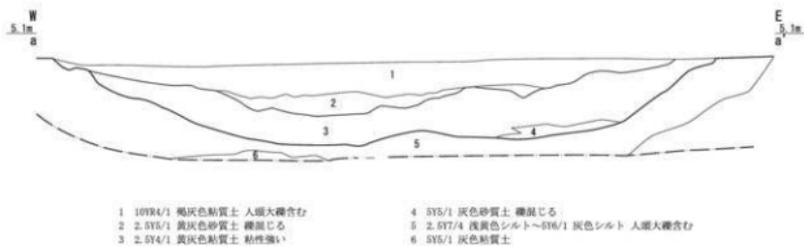


3 詳細図 (S=1:50)

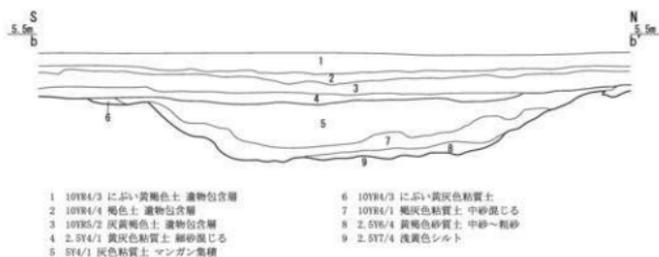
図版48 畑田遺跡



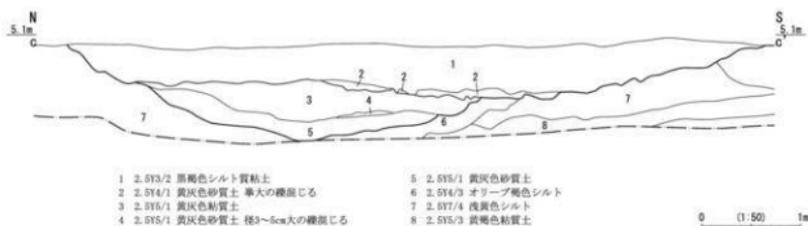
SR9・SR10・SR11 平面図 (S=1:100)



1 SR9 断面図 (S=1 : 50)

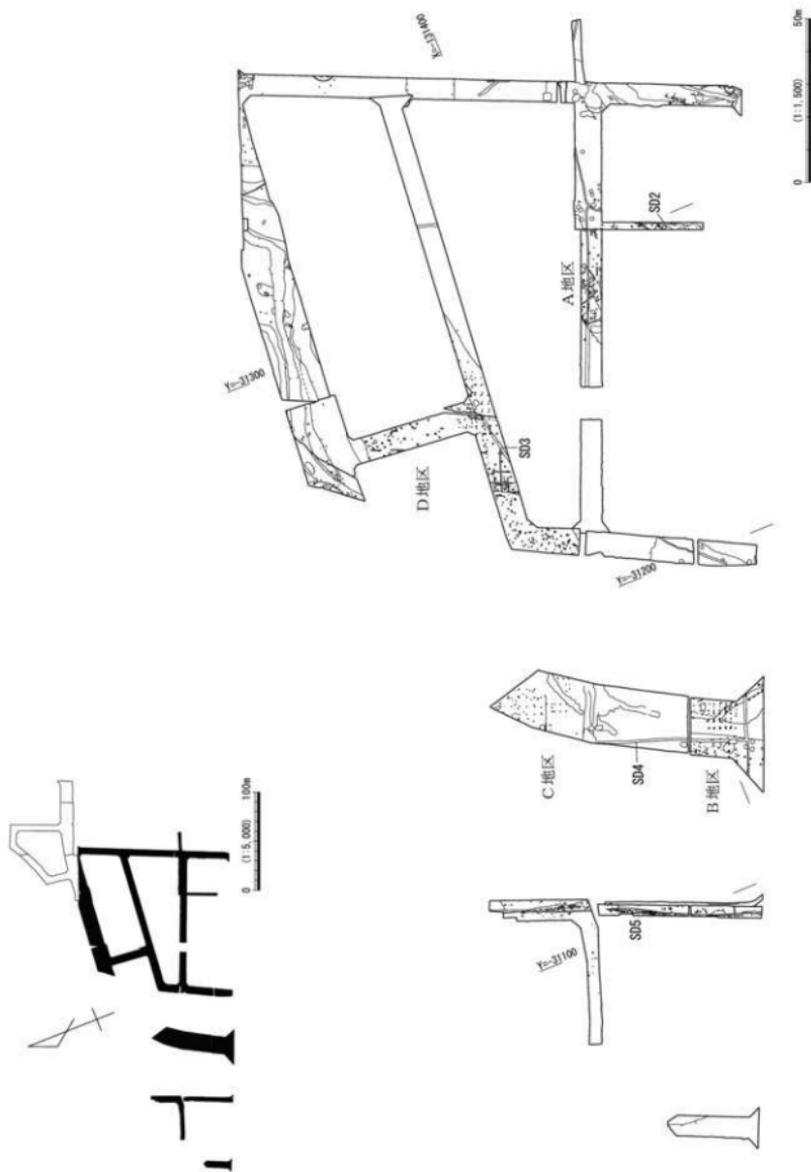


2 SR10 断面図 (S=1 : 50)

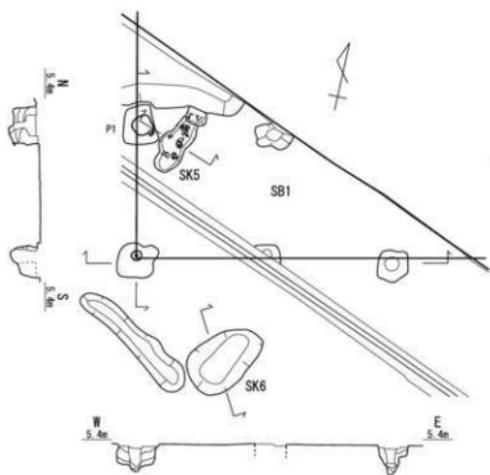


3 SR11 断面図 (S=1 : 50)

0 (1:50) 1m



畑田遺跡調査区全体図 (奈良・平安時代以降) S=1:1,500



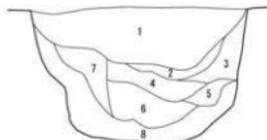
1 SB1 平・断面図 SK5・SK6 平面図 (S=1:80)

W 5.4m E 5.4m



2 SK5 断面図 (S=1:20)

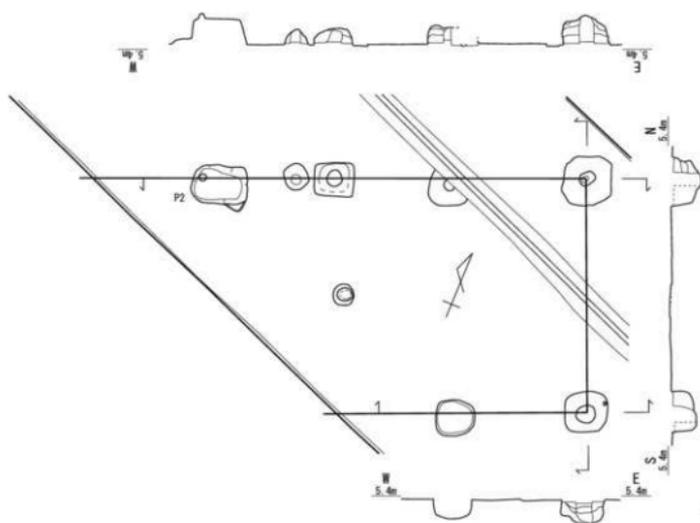
N 5.4m S 5.4m



- 1 2.SG16/1 オリーブ灰色シルト質粘土 径30cm大の円礫含む
水成堆積物
- 2 2.SG16/1 オリーブ灰色粘質土
- 3 2.SG16/1 オリーブ灰色シルト質粘土
- 4 7.S15/3 灰オリーブ色砂質土 細砂 マンガン沈着
- 5 7.S15/3 灰オリーブ色砂質土 細砂～粗砂
- 6 5Y6/1 灰色粘質土
- 7 2.SG16/1 オリーブ灰色シルト質粘土 7.S15/3 灰オリーブ色
砂質土少量含む
- 8 5Y6/1 灰色粘質土 均質 水成堆積

0 (1:80) 1m

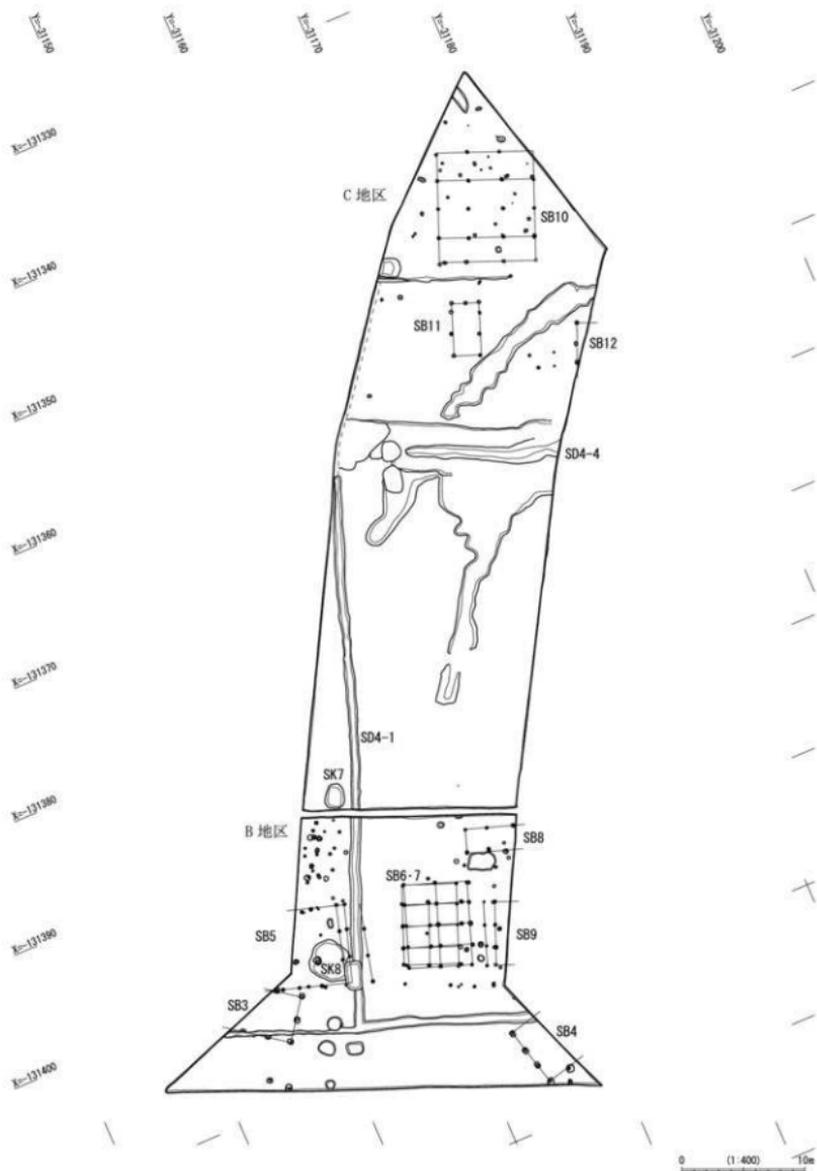
0 (1:20) 1m



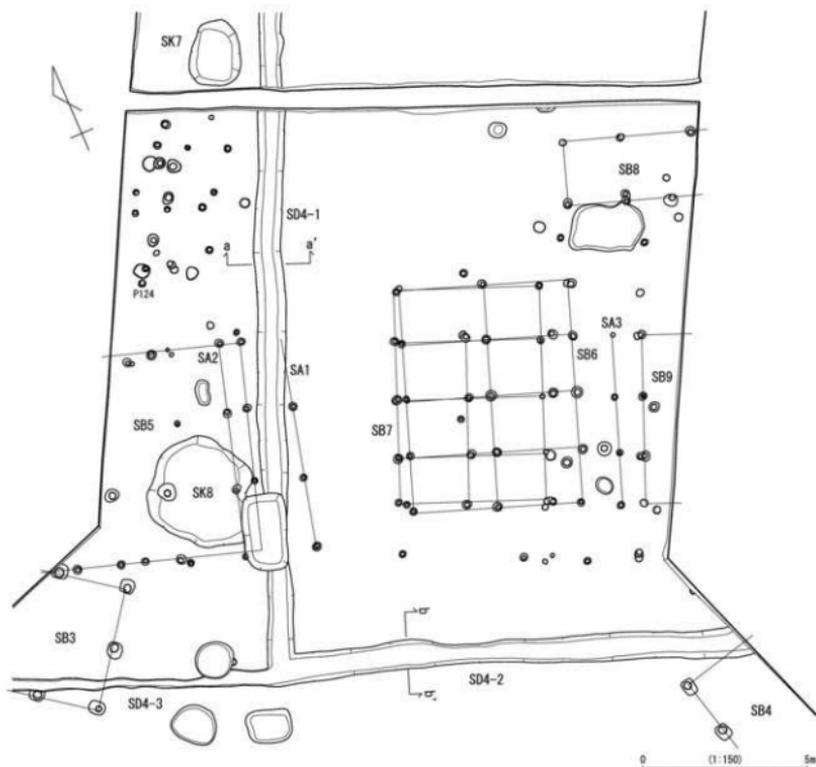
4 SB2 平・断面図 (S=1:80)

0 (1:80) 1m

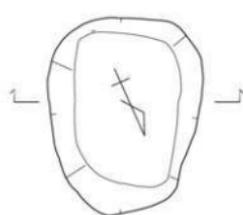
図版52 畑田遺跡



B・C地区 全体図 (S=1:400)

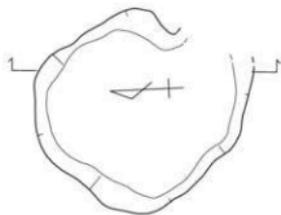


1 B地区 全体図 (S=1:150)



- 1 穴
- 2 10Y6/1 褐色粘質土、しまりやあり、炭屑の塊を少し含む

2 SK7 平・断面図 (S=1:50)



- 1 2.5Y5/3 黄褐色中砂 10Y8/5 黄褐色中砂混じる
- 2 10Y3/1 黒褐色細砂 10Y4/1 褐色細砂混じる
- 3 10Y5/2 灰黄褐色中砂 10Y4/6 褐色中砂混じる

3 SK8 平・断面図 (S=1:80)

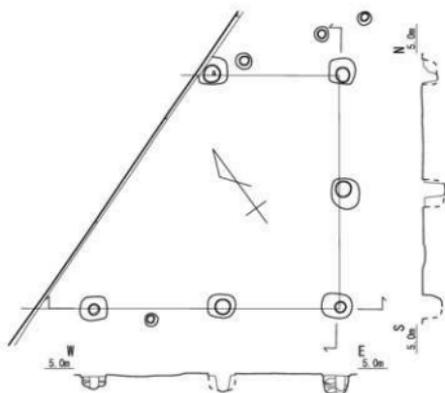


- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色中砂
- 2 10Y5/8 黄褐色中砂 10Y5/2 灰黄褐色中砂混じる
- 3 10Y5/2 灰黄褐色中砂
- 4 10Y5/3 にぶい黄褐色中砂
- 5 10Y5/4 にぶい黄褐色中砂
- 6 10Y3/4 暗褐色中砂
- 7 7.5Y3/2 黒褐色細砂 マンガン沈着 基盤層

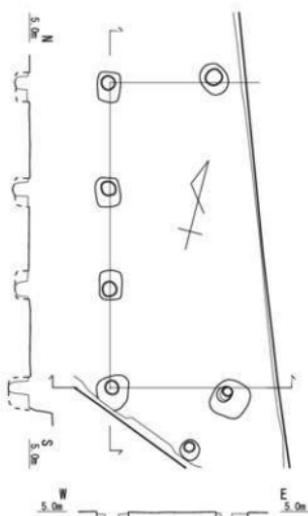


- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色中砂
- 2 10Y5/6 黄褐色中砂
- 3 10Y5/2 灰黄褐色中砂 粗砂混じる

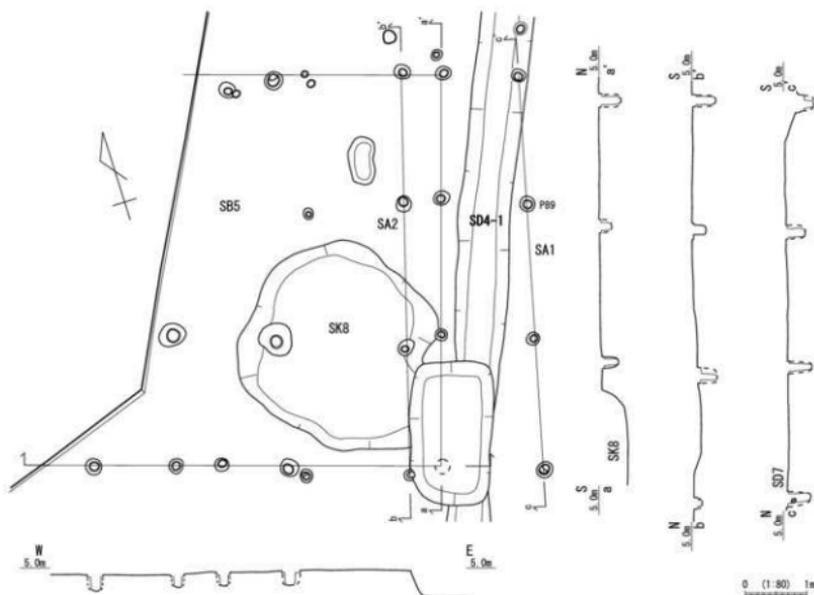
4 SD4 断面図 (S=1:50)



1 SB3 平・断面図 (S=1:80)

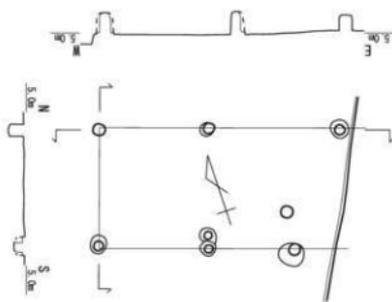


2 SB4 平・断面図 (S=1:80)

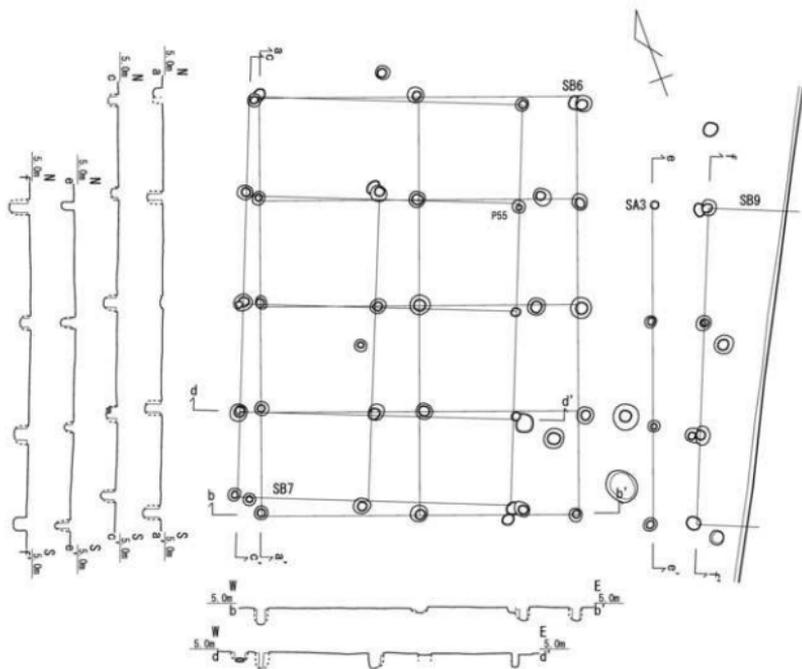


3 SB5・SA1・SA2 平・断面図 (S=1:80)

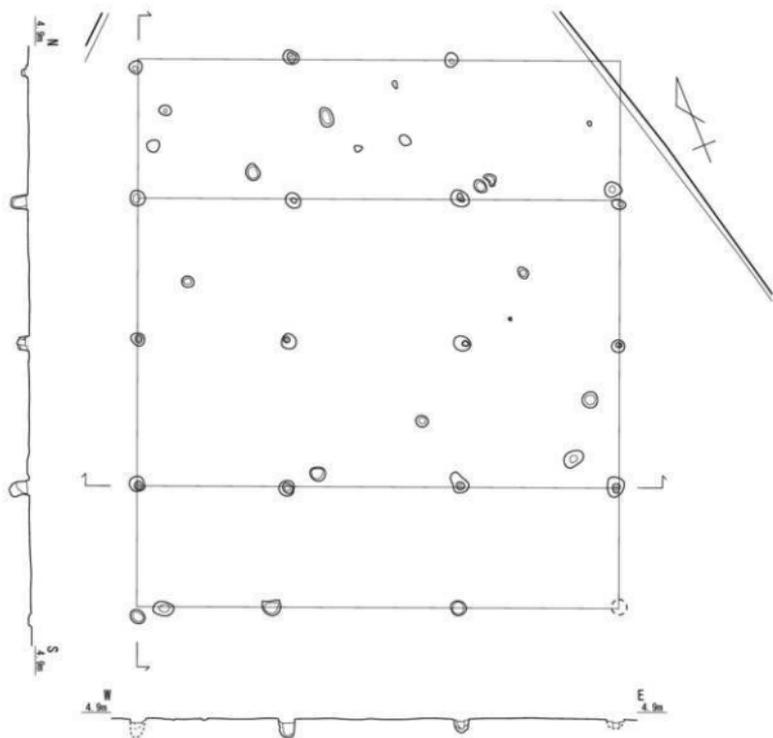
0 (1:80) 1m



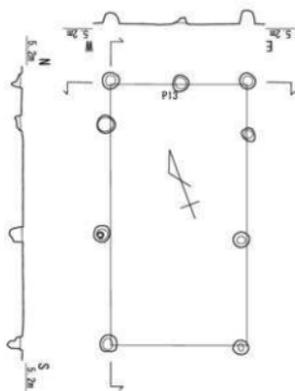
1 SB8 平・断面図 (S=1:80)



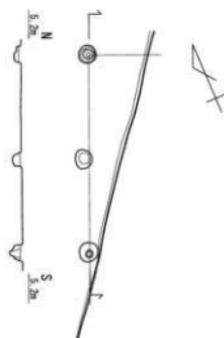
2 SB6・SB7・SB9・SA3 平・断面図 (S=1:80)



1 SB10 平・断面図 (S=1:80)



2 SB11 平・断面図 (S=1:80)

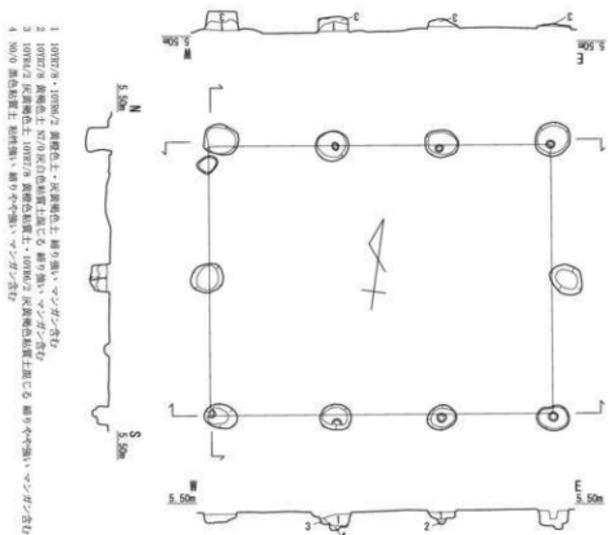


3 SB12 平・断面図 (S=1:80)

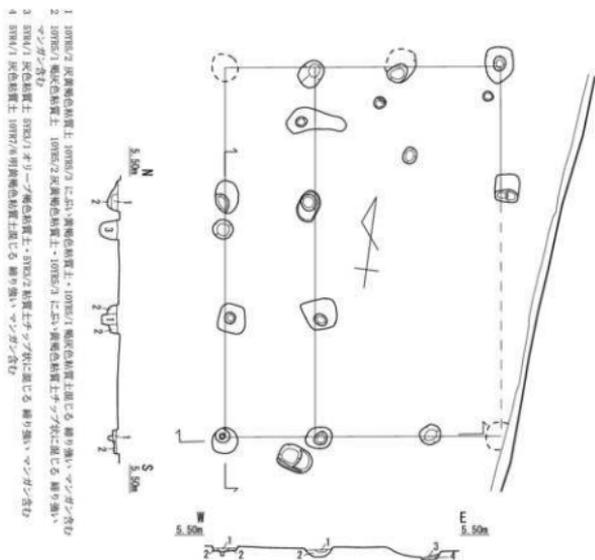
0 (1:80) 1m



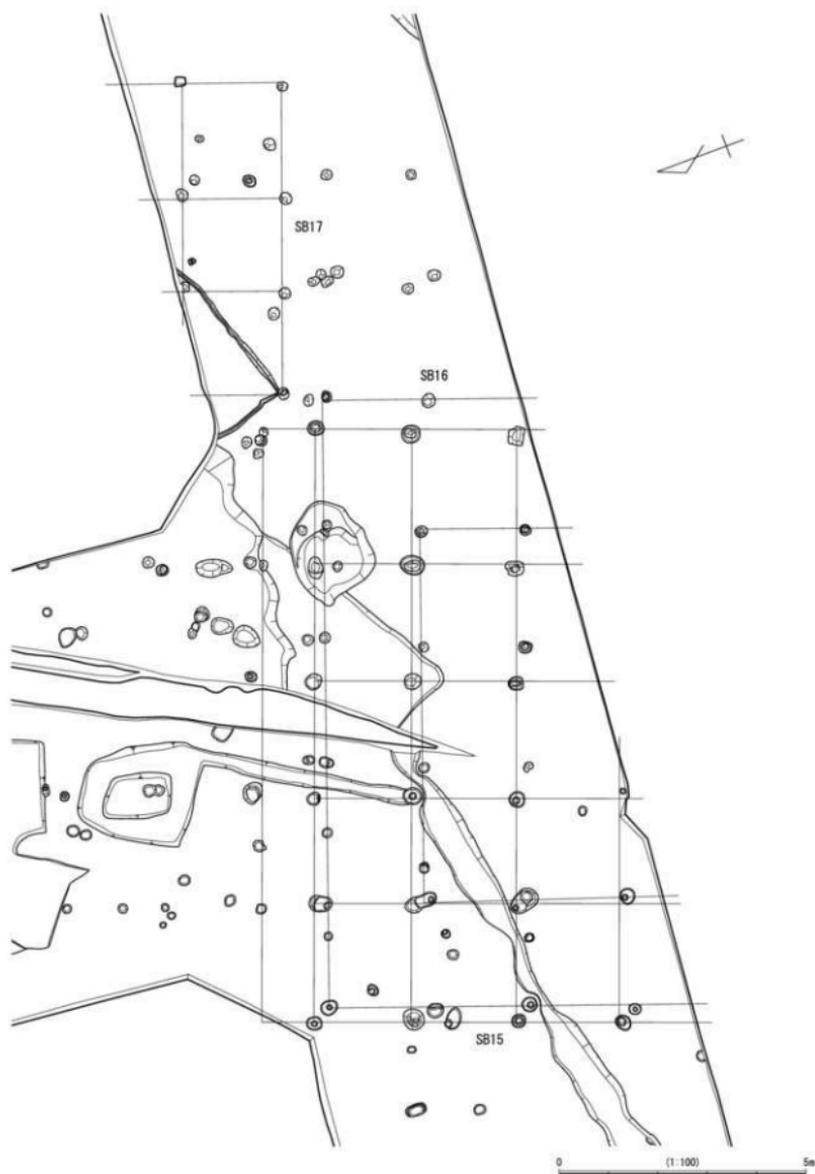
1 D地区 全体図 (S=1:250)



1 SB13 平・断面図 (S=1:80)



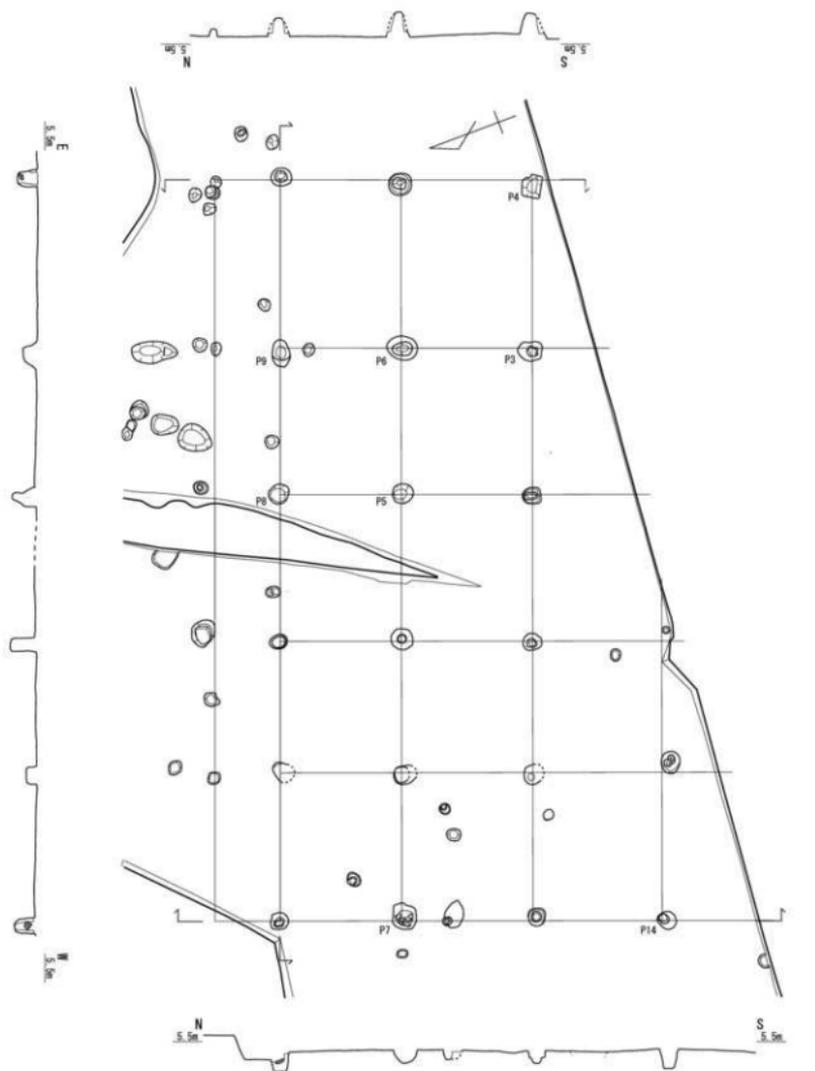
2 SB14 平・断面図 (S=1:80)



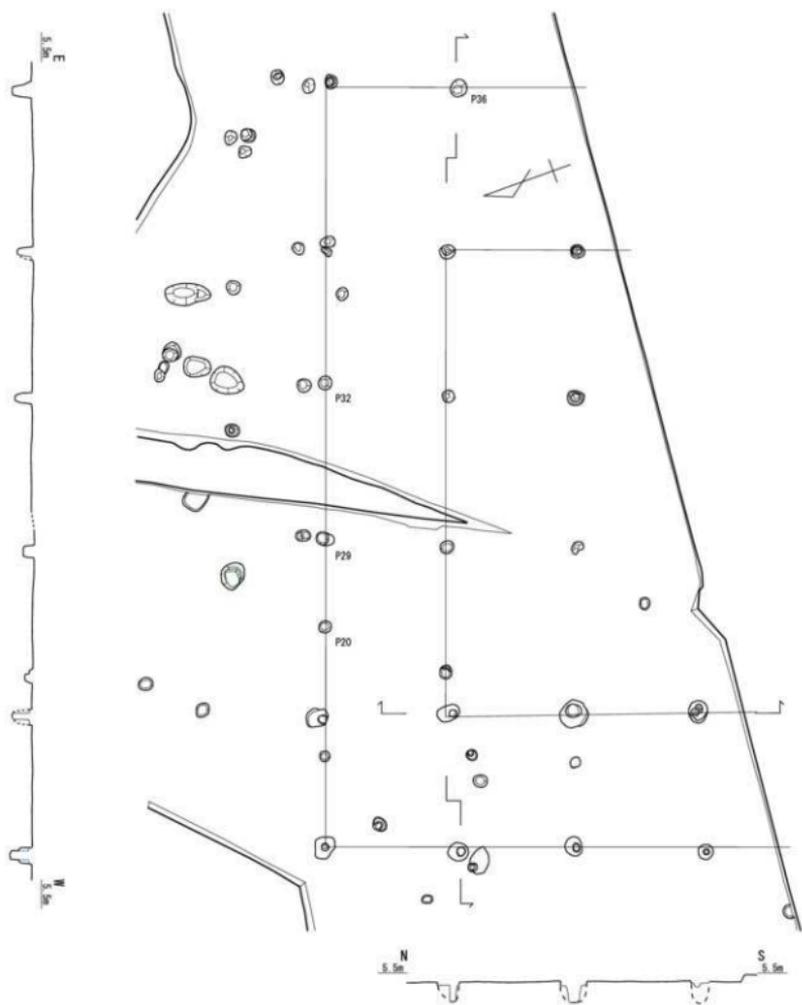
SB15・SB16・SB17 平面図 (S=1:100)

図版60 畑田遺跡

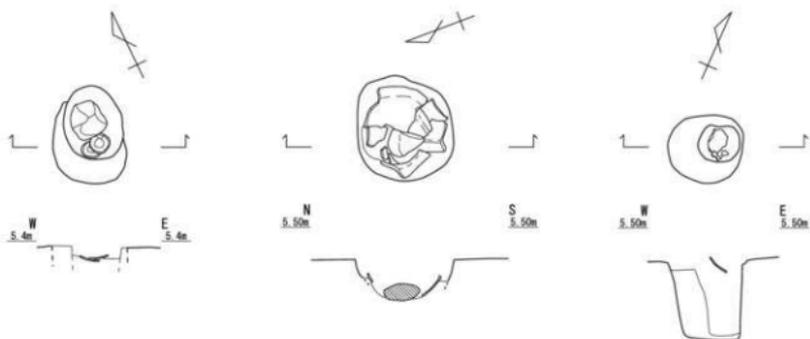
畑田遺跡



SB15 平・断面図 (S=1:80)



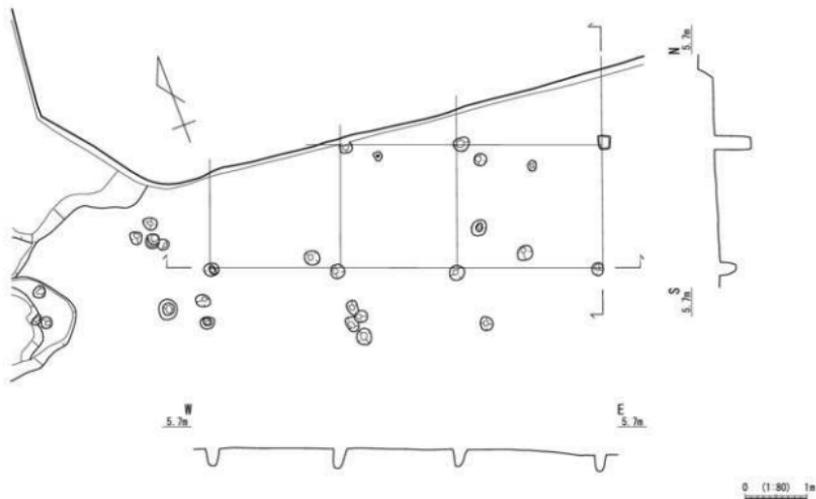
SB16 平・断面図 (S=1:80)



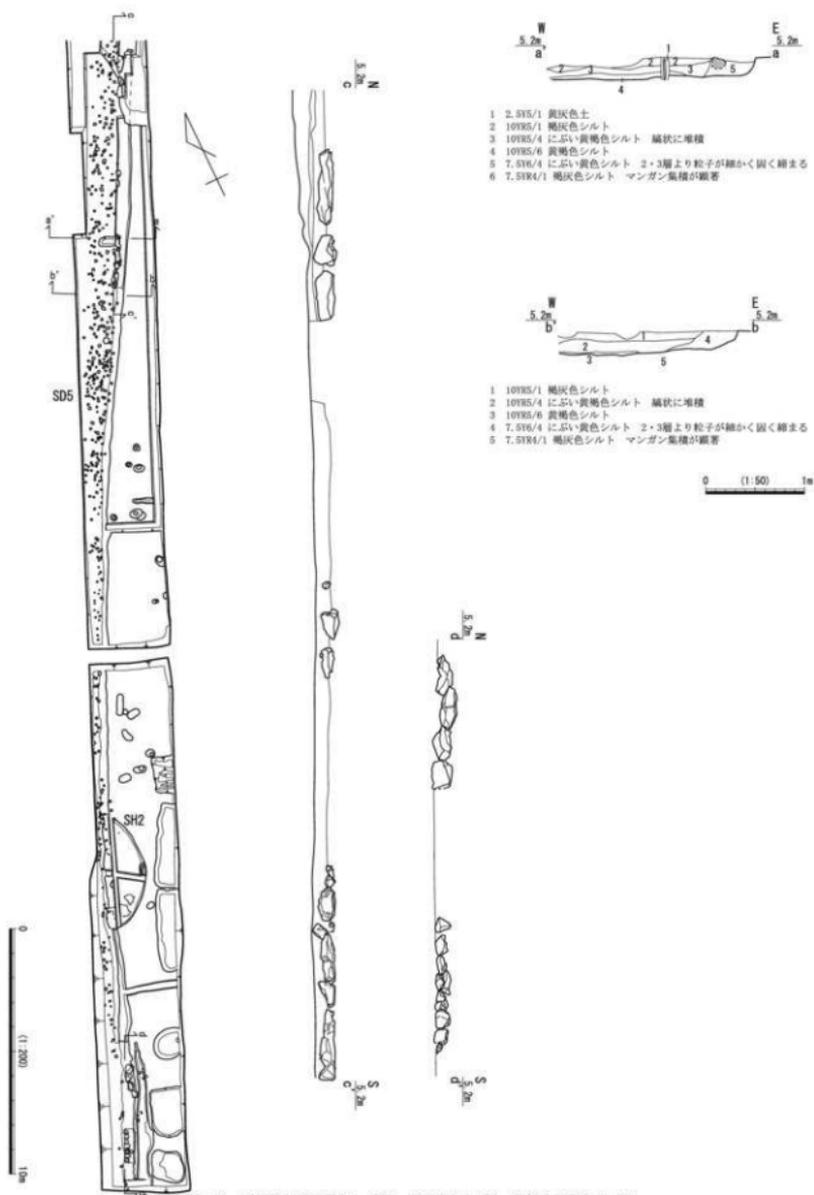
1 SB15P3 遺物出土状況図 (S=1:20)

2 SB15P7 遺物出土状況図 (S=1:20)

3 SB15P14 遺物出土状況図 (S=1:20)

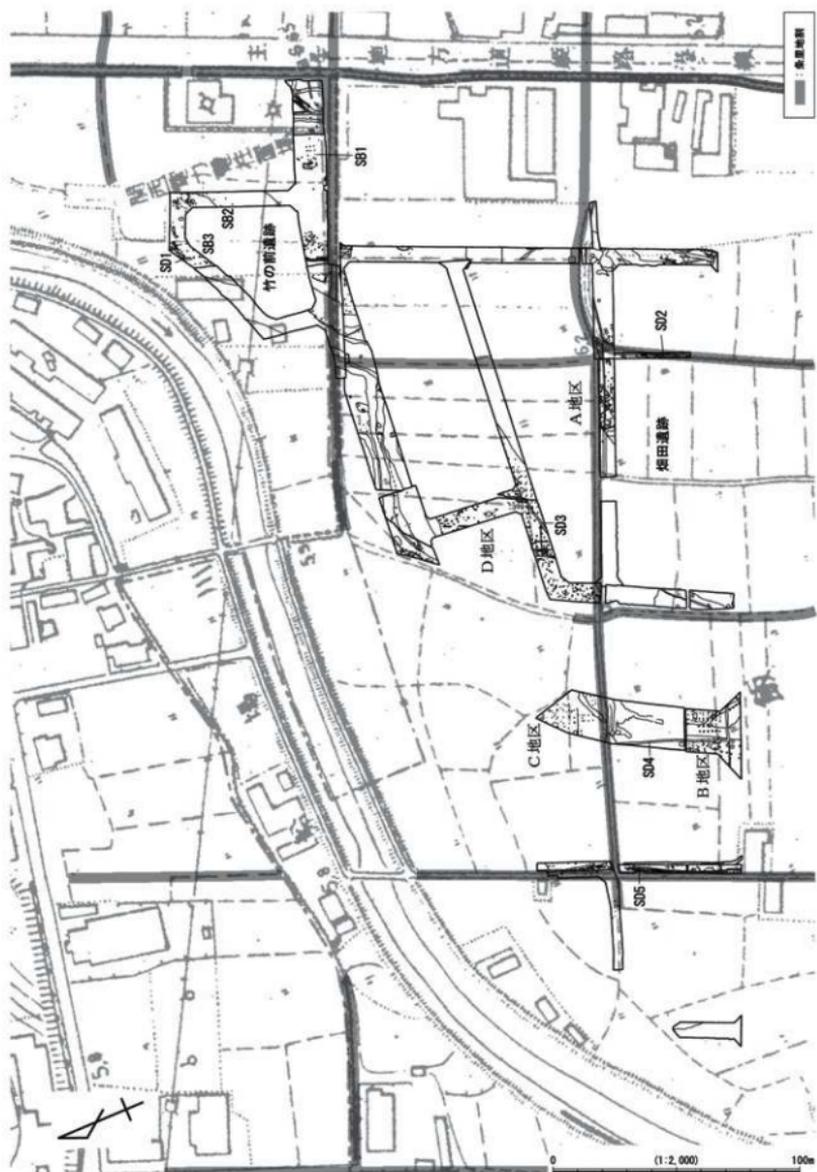


4 SB17 平・断面図 (S=1:80)



SD5 平・断面図 (平面図S=1:200、断面図S=1:50、石組立面図S=1:50)

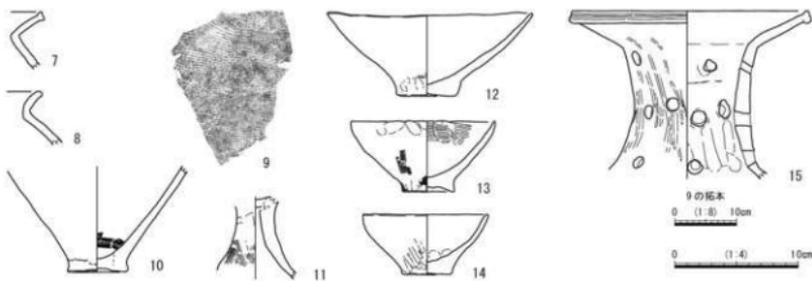
図版64 畑田遺跡



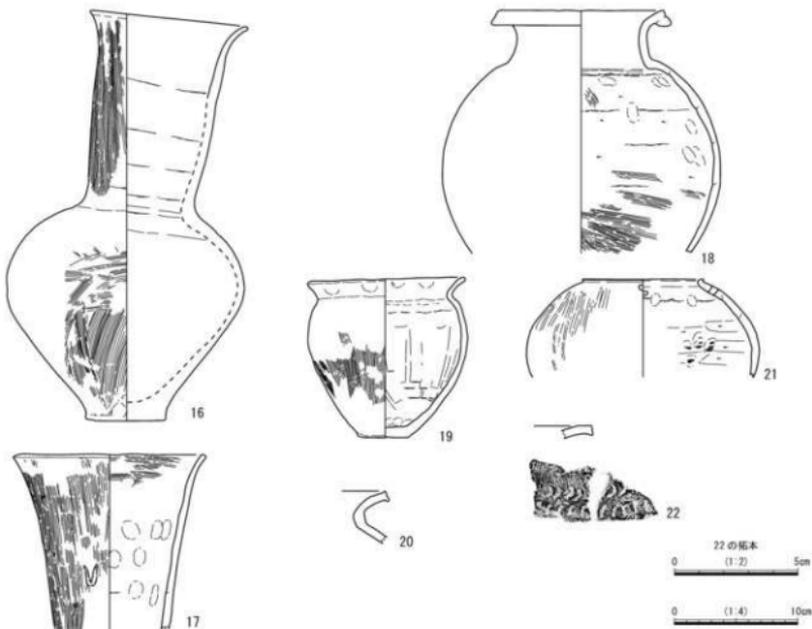
条里地割と奈良・平安時代の遺構との合成図 (S=1:2,000)



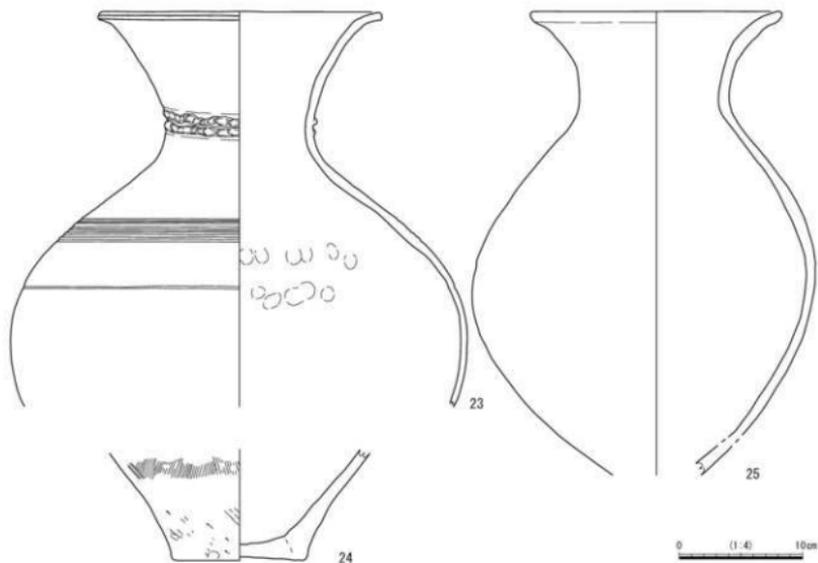
1 SH1 出土土器(1~6)



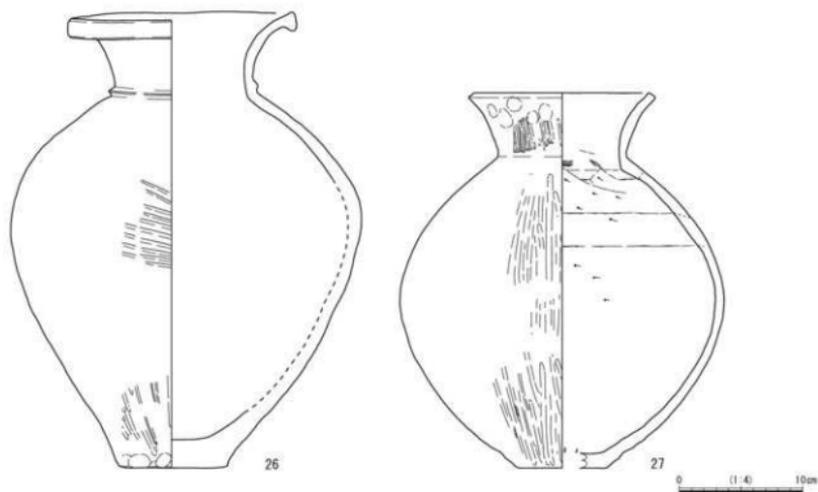
2 SH2 出土土器(7~15)



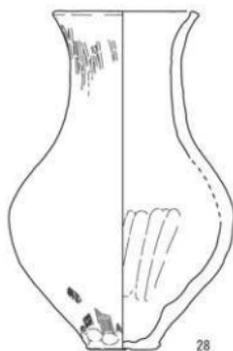
3 SK1 出土土器(16~22)



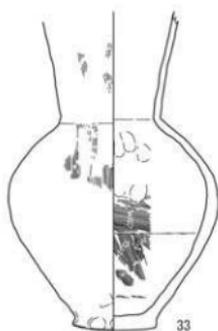
1 SD1 出土土器(23~25)



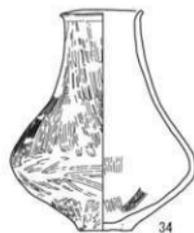
2 SR1 出土土器①(26・27)



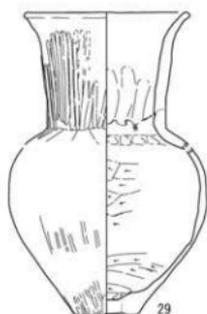
28



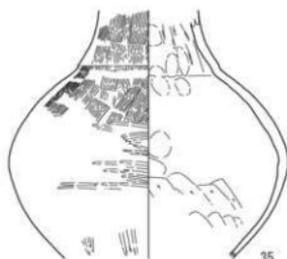
33



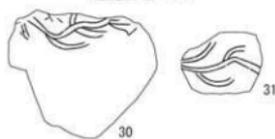
34



29

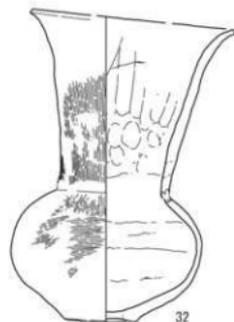


35

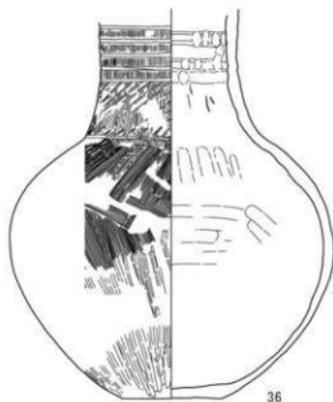


30

31

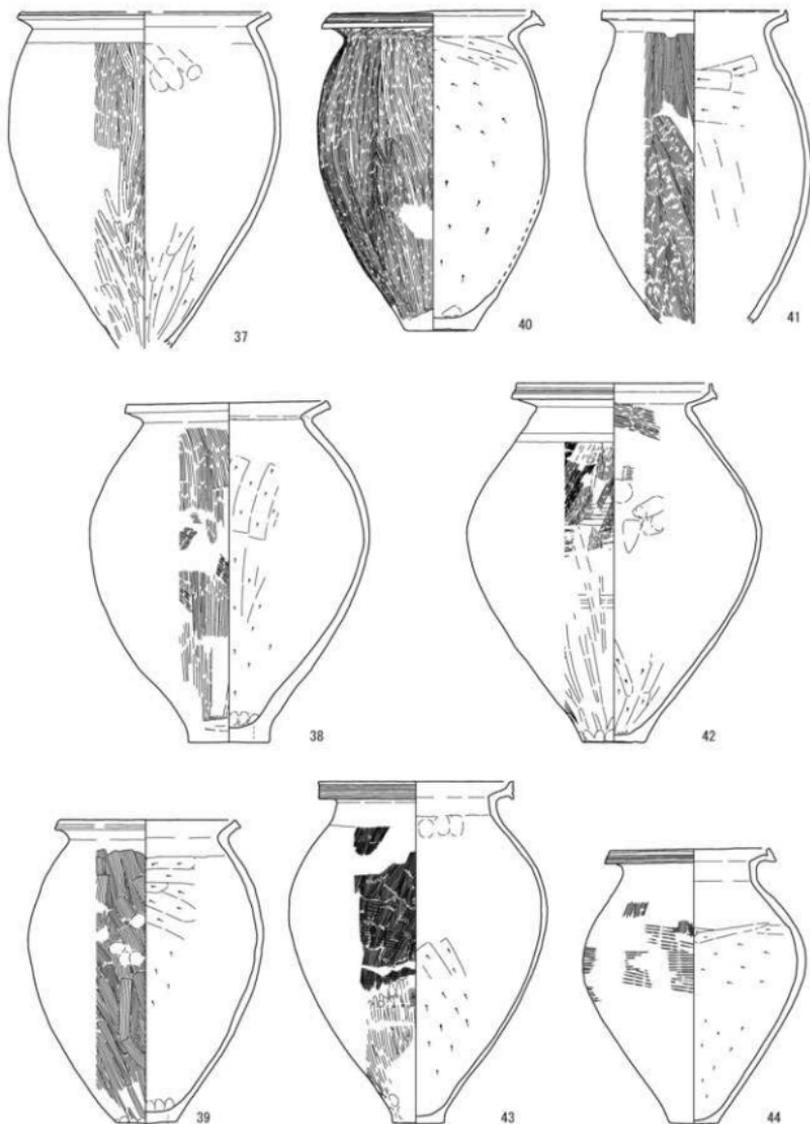


32

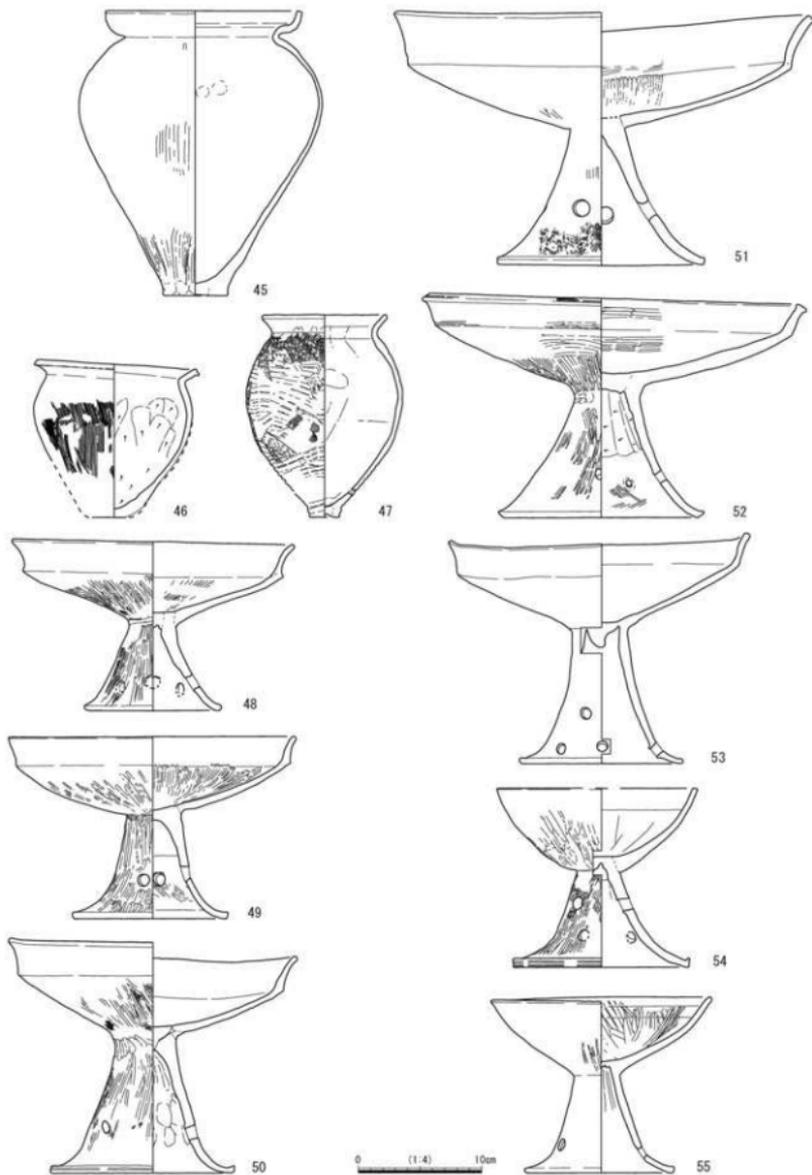


36

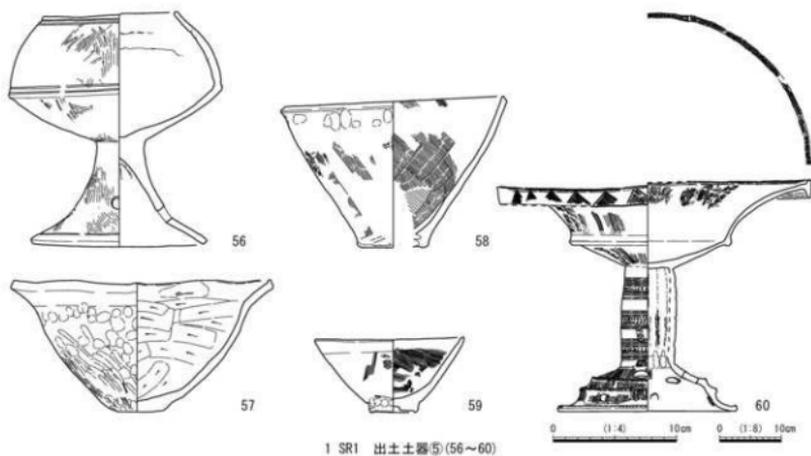
0 (1:4) 10cm



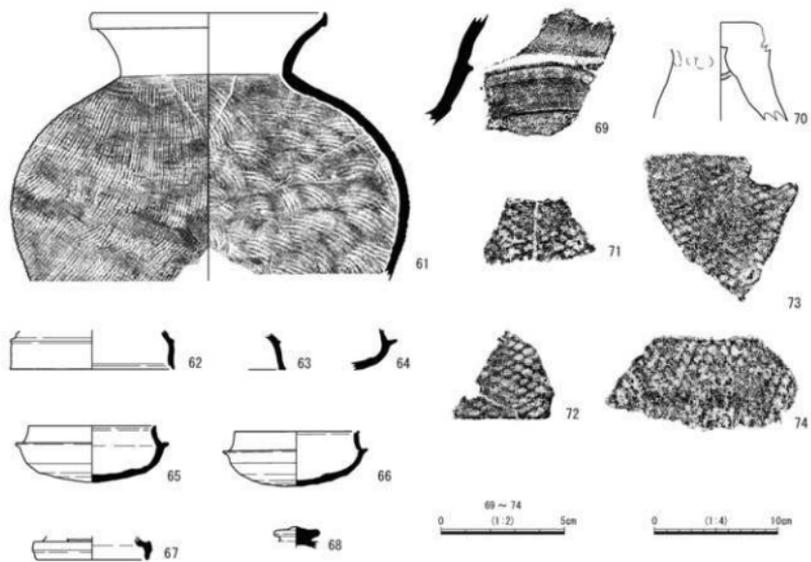
0 (1-4) 1.0cm



SR1 出土土器④(45~55)



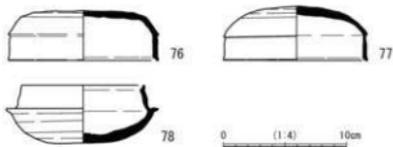
1 SR1 出土土器⑤(56~60)



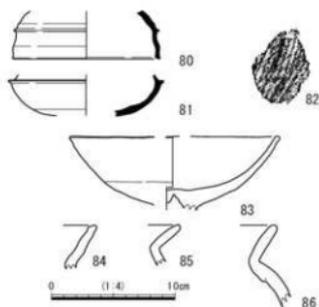
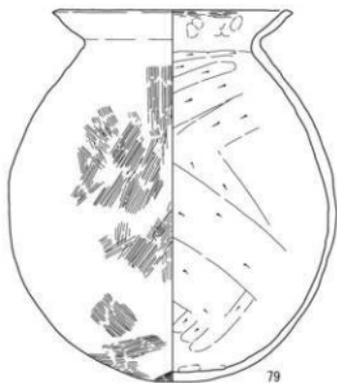
2 SH3 出土土器(61~74)



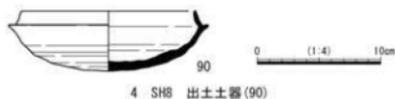
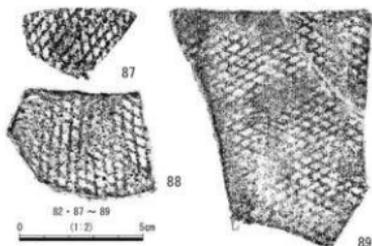
1 SH4 出土土器 (75)



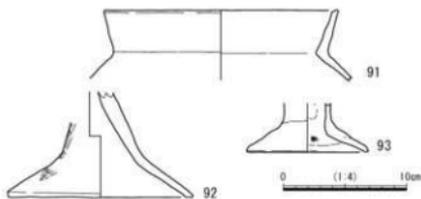
2 SH5 出土土器 (76~79)



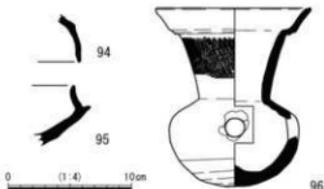
3 SH6 出土土器 (80~89)



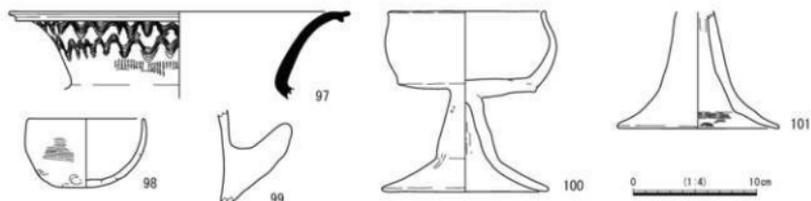
4 SH8 出土土器 (90)



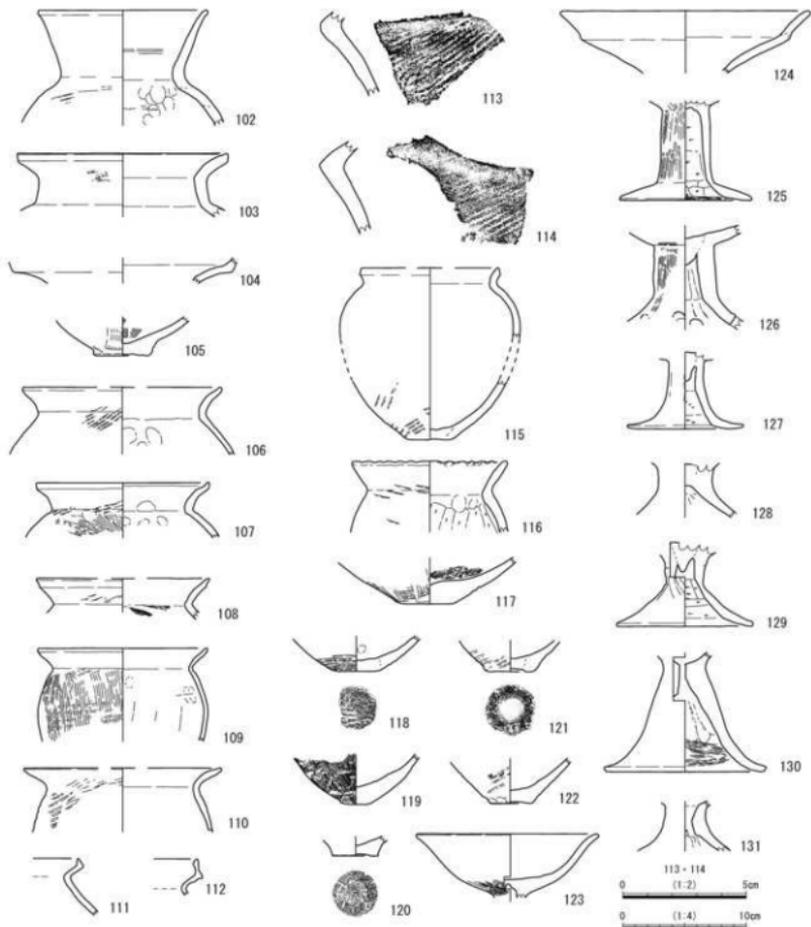
5 SH9 出土土器 (91~93)



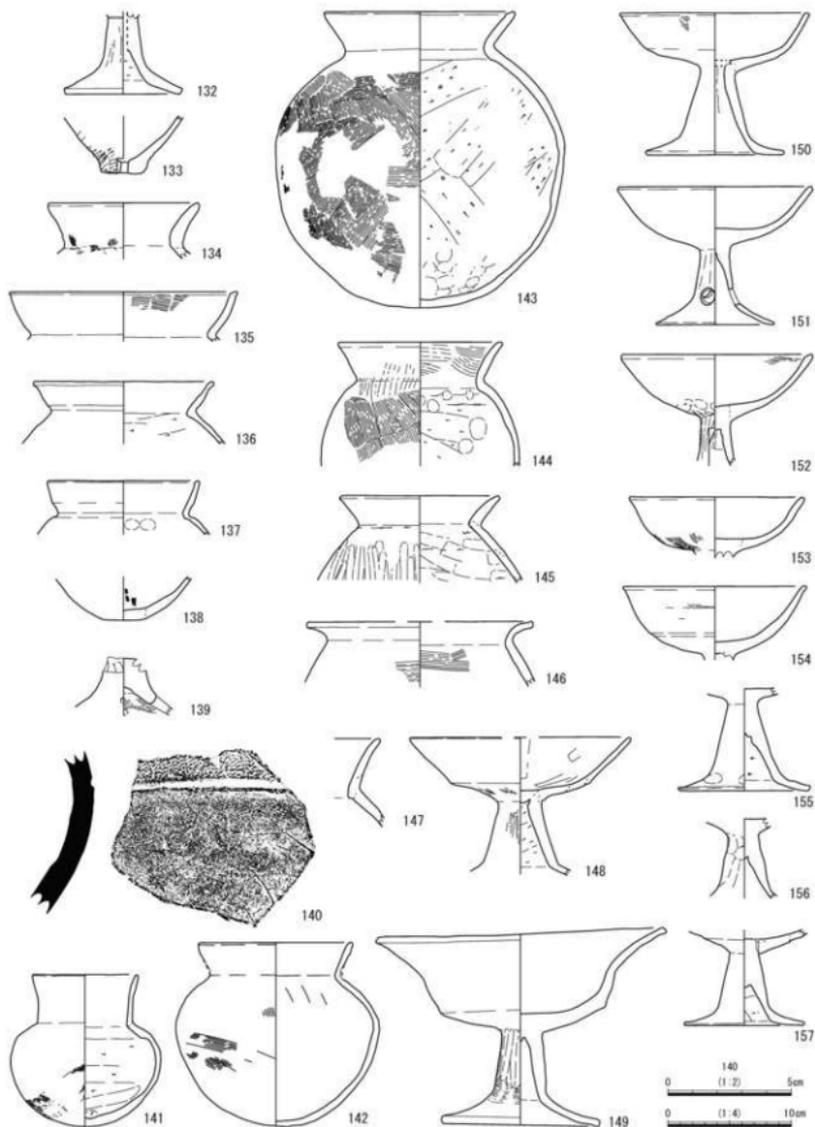
6 SH10 出土土器 (94~96)

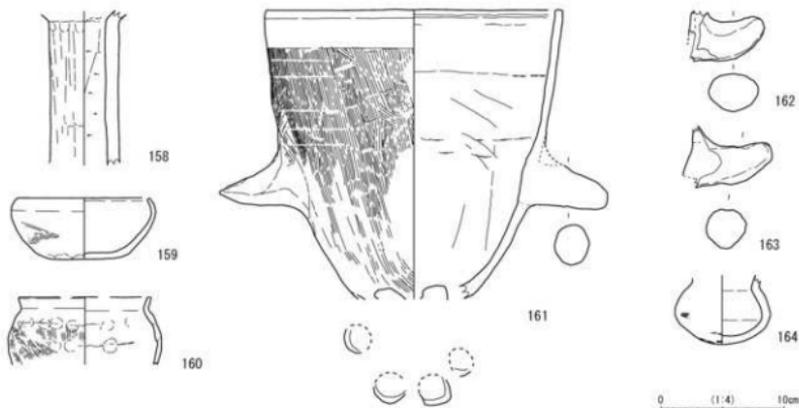


1 SK2 出土土器(97~101)

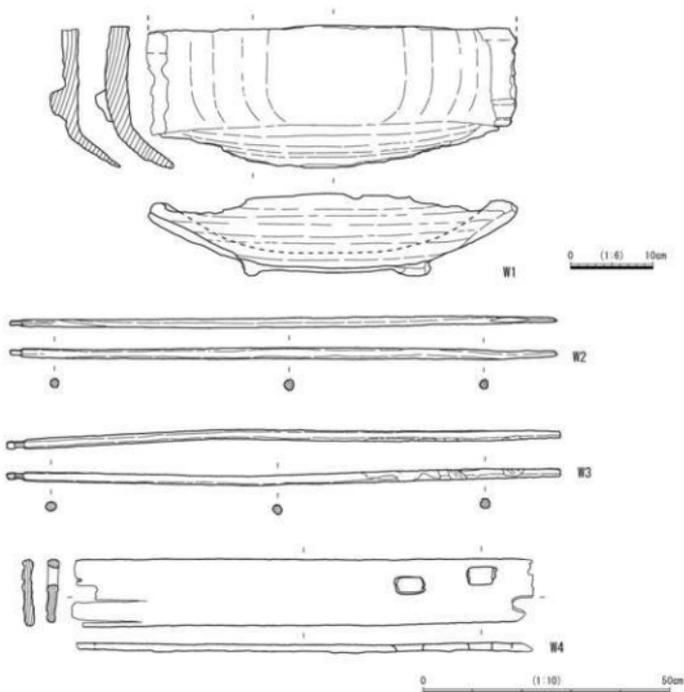


2 SR3 出土土器①(102~131)

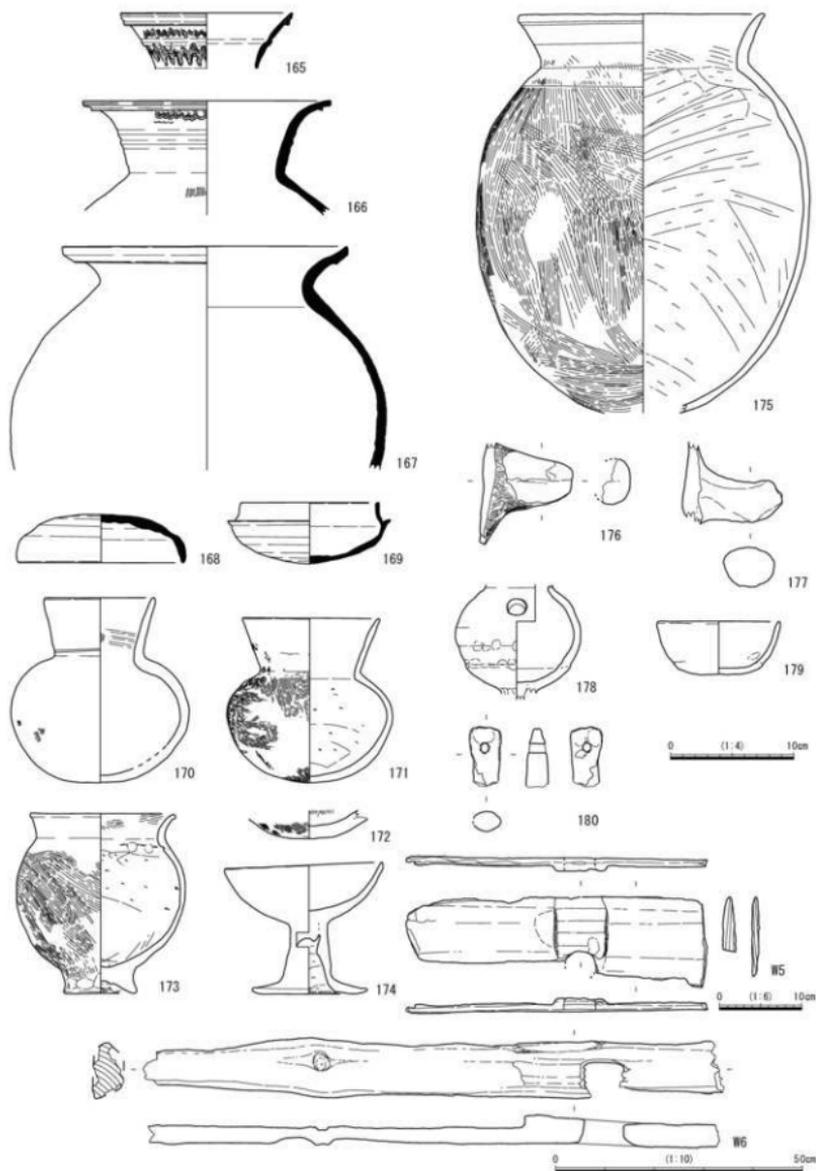




1 SR3 出土土器③(158~164)

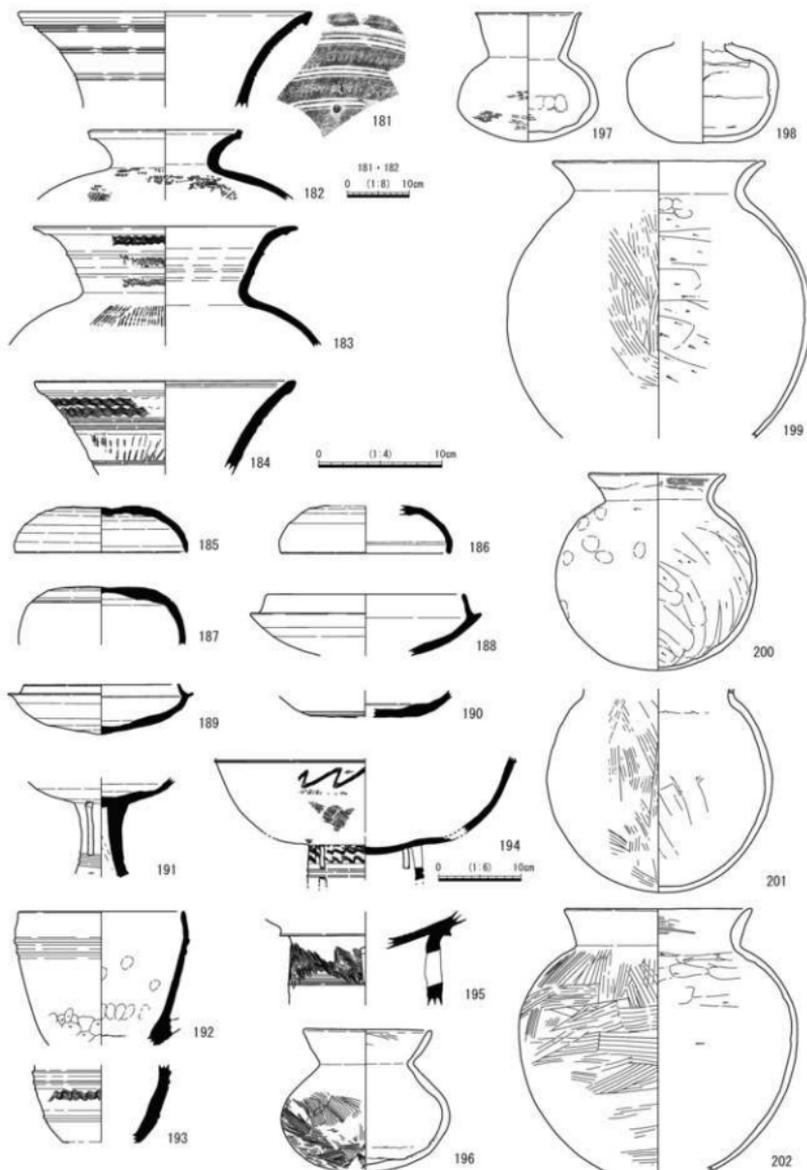


2 SR3 出土木製品(W1~W4)

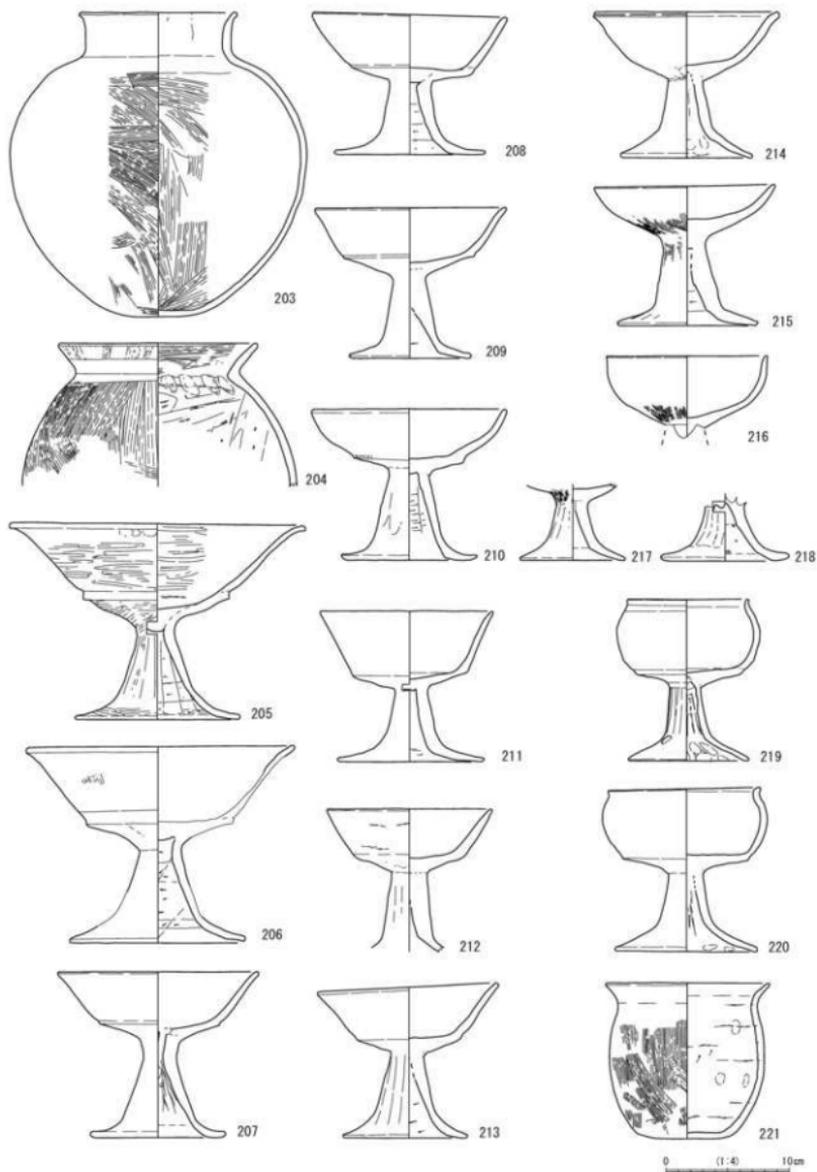


SR4 出土土器・木製品(165~180、W5・W6)

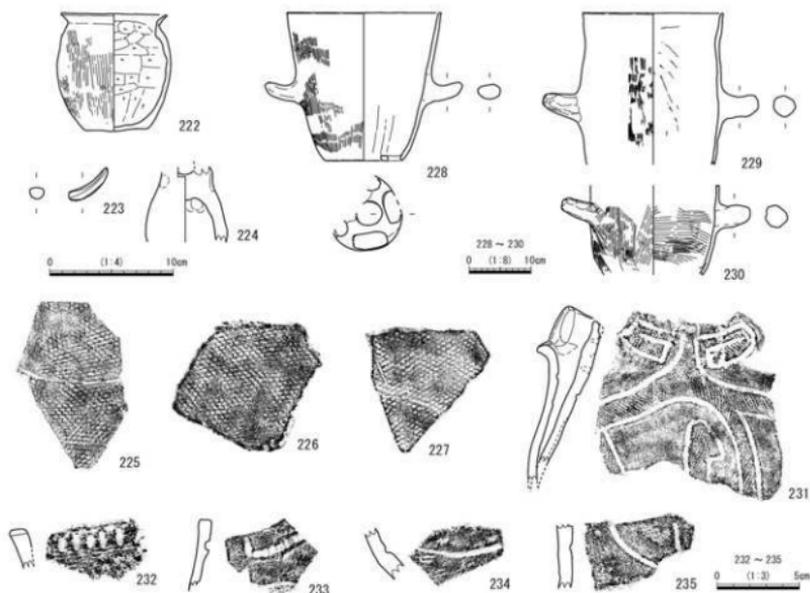
図版76 畑田遺跡



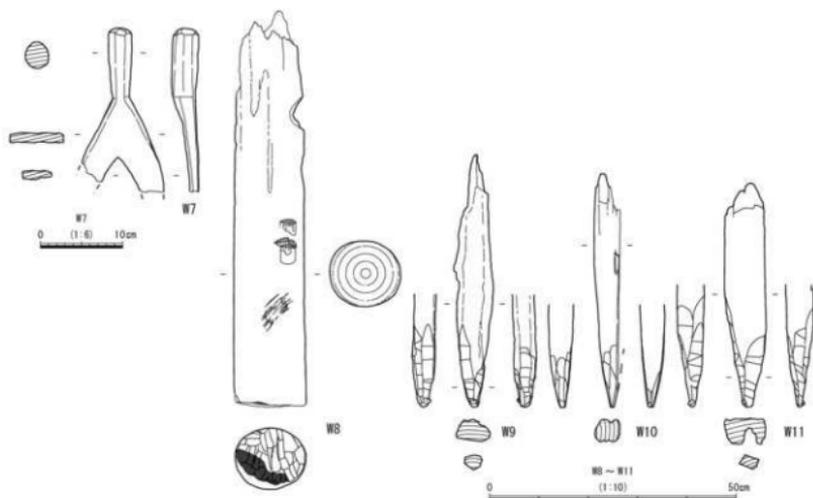
SR6 出土土器①(181~202)



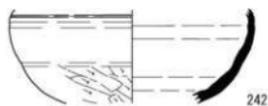
SR6 出土土器②(203~221)



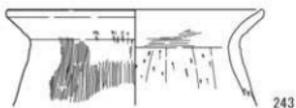
1 SR6 出土土器③ (222~235)



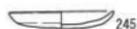
2 SR6 出土木製品 (W7~W11)



1 SB1 出土土器 (242)



2 SB2 出土土器 (243・244)



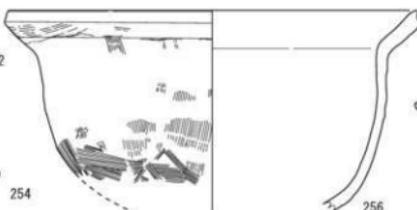
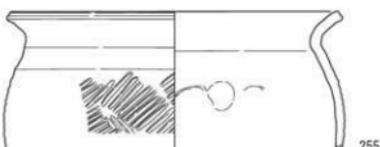
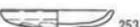
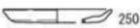
3 SB7 出土土器 (245)



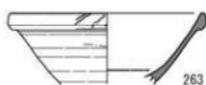
4 SB11 出土土器 (246)



5 SA1 出土土器 (247)



6 SB15 出土土器 (248~259)



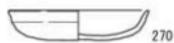
7 SB16 出土土器 (260~263)



8 ビット 出土土器 (264~269)

0 (1:4) 10cm

図版80 畑田遺跡



270



271



273



272



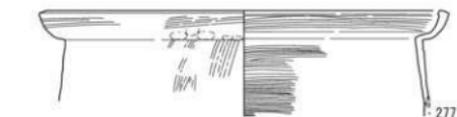
274



276



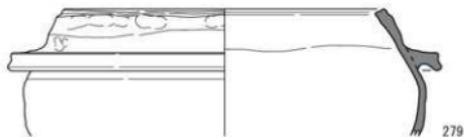
275



277



278

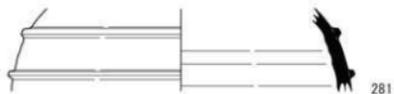


279

1 SD4 出土土器 (270~279)



280



281

2 SK7 出土土器 (280・281)



283



282



284



285



286

3 SK8 出土土器 (282~286)

0 (1:4) 10cm